

い りょう ぼら
伊領原遺跡

こ やけ
木焼遺跡

まつ が たに
松ヶ谷遺跡

2006

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域社会の創造に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その結果を記録にとどめ、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、経営体育成基盤整備事業伊陸西部地区工事に先立ち、柳井市伊陸地内に所在する伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡について、山口県農林部及び山口県教育委員会から委託を受けて山口県ひとづくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、伊領原遺跡から17棟の掘立柱建物跡や、建物の周囲を囲むように伸びる溝状の遺構などが確認され、中世集落跡の存在が明らかになりました。また、多くの中世の土師器に加えて縄文土器片なども出土しました。木焼遺跡や松ヶ谷遺跡では、中世を中心とした土師器や陶磁器などが出土しました。

伊陸地区ではこれまで本格的な発掘調査は行われておらず、今回の発掘調査により縄文時代や中世にこの地に暮らしていた人々の暮らしを考える上で大変貴重な資料を得ることができ、ふるさとの歴史に新しい事実を加えることができました。

本書が、文化財保護に対する理解をより深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の実施ならびに報告書作成に当たってご協力をいただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山口県ひとづくり財団

理事長 村岡正義

例 言

- 1 本書は、平成17年度に実施した伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡（山口県柳井市伊陸）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、経営体育成基盤整備事業伊陸西部地区工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が山口県教育委員会並びに山口県農林部の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県ひとづくり財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	文化財専門員	上土井 宏 典
	文化財専門員	吉 中 雅 信
	調査補助員	藤 原 彰 久
	文化財専門員	谷 口 哲 一（山口県教育庁文化財保護課）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、山口県田布施農林事務所、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「岩国」「柳井」を、第2図・第28図・第34図の調査区設定図は、田布施農林事務所提供の地図を複製使用したものである。
- 6 石材の鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏に依頼した。なお、石材鑑定は表面観察によるものである。
- 7 本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 8 本書に使用した土色の色調表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式に従った。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 土器実測図の断面は、黒塗りが須恵器・中世須恵器を、網掛けが陶磁器を表す。
- 11 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SB：掘立柱建物跡	SK：土坑	SD：溝状遺構	SP：柱穴
SX：不明遺構	TR：トレンチ		
- 12 本書の作成・執筆は、上土井・吉中・藤原・谷口が共同で行い、編集は上土井が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	伊領原遺跡	5
	1 調査の方法と経過	5
	2 調査の成果	9
	3 まとめ	37
IV	木焼遺跡	39
	1 調査の方法と経過	39
	2 調査の成果	43
	3 まとめ	46
V	松ヶ谷遺跡	47
	1 調査の方法と経過	47
	2 調査の成果	51
	3 まとめ	53
付編 1	氷室岳周辺にみられる「嶽山壺」について	54
付編 2	伊領原遺跡 リン酸・カルシウム分析及び火山灰分析報告書	57

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1
伊領原遺跡		
第2図	調査区設定図	5
第3図	遺構配置図	7
第4図	SB1 実測図	9
第5図	SB2・3 実測図	10
第6図	SB4・5 実測図	11
第7図	SB6・7 実測図	12
第8図	SB8・9 実測図	13
第9図	SB10・13・16 実測図	14
第10図	SB11・12 実測図	15
第11図	SB15・14・17 実測図	16
第12図	SK1 実測図	18
第13図	SK3・14 実測図	19
第14図	SK5・11 実測図	20
第15図	SD1・2 実測図	22
第16図	SD3・4 実測図	23
第17図	SP25・26・59・29・60 実測図	24
第18図	SX1・2 実測図	25
第19図	流路跡土層断面図	26
第20図	出土土器実測図①	28
第21図	出土土器実測図②	29
第22図	出土土器実測図③	30
第23図	出土土器実測図④	31
第24図	出土土器実測図⑤	32
第25図	出土土器実測図⑥	33
第26図	出土土器実測図⑦	34
第27図	出土石製品・金属製品実測図	35
木焼遺跡		
第28図	調査区設定図	39
第29図	トレンチ土層断面図	40
第30図	遺構配置図	41
松ヶ谷遺跡		
第34図	調査区設定図	47
第35図	遺構配置図	48
第36図	トレンチ土層断面図①	49
第31図	SB1 実測図	43
第32図	出土土器実測図	44
第33図	出土石製品・金属製品実測図	45
第37図	トレンチ土層断面図②	50
第38図	出土土器実測図	51
第39図	出土石製品・金属製品実測図	52

表目次

伊領原遺跡

表1 掘立柱建物跡一覧表	17
表2 土坑一覧表	21

木焼遺跡

表4 石製品観察一覧表	45
-------------	----

松ヶ谷遺跡

表5 石製品観察一覧表	52
-------------	----

表3 石製品観察一覧表	36
-------------	----

図版目次

伊領原遺跡

図版1 調査区遠景
図版2 調査区全景、I-1地区完掘状況
図版3 I-2・II地区完掘状況 I-2地区掘立柱建物群
図版4 SB1完掘状況 SB2完掘状況、SB3完掘状況 SB4完掘状況、SB5完掘状況
図版5 SB6完掘状況、SB7完掘状況 SB8完掘状況、SB9完掘状況 SK1遺物出土状況① SK1遺物出土状況② SK1完掘状況、SK3検出状況
図版6 SK4完掘状況、SK11完掘状況 SK5検出状況、SK5完掘状況 SD1・2検出状況、SD3・4検出状況
図版7 SP4遺物出土状況、SP7遺物出土状況 SP25・26遺物出土状況、SP25・26完掘状況 SP29遺物出土状況、SP29完掘状況

図版7 SP46遺物出土状況、SP52遺物出土状況
図版8 SP54遺物出土状況、SP58遺物出土状況 SP60遺物出土状況① SP60遺物出土状況② I-2地区縄文遺物包含層遺物出土状況 I-2地区遺物出土状況
図版9 SX1遺物出土状況① SX1遺物出土状況② SX1遺物出土状況③ SX2遺物出土状況① SX2遺物出土状況②、SX2完掘状況
図版10 出土土器①
図版11 出土土器②
図版12 出土土器③
図版13 出土土器④
図版14 出土土器⑤
図版15 出土土器⑥
図版16 出土石製品・金属製品

木焼遺跡

図版17 調査区遠景
図版18 調査区全景
図版19 I地区遺物包含層完掘状況

図版19 SB1完掘状況
図版20 出土土器・石製品・金属製品

松ヶ谷遺跡

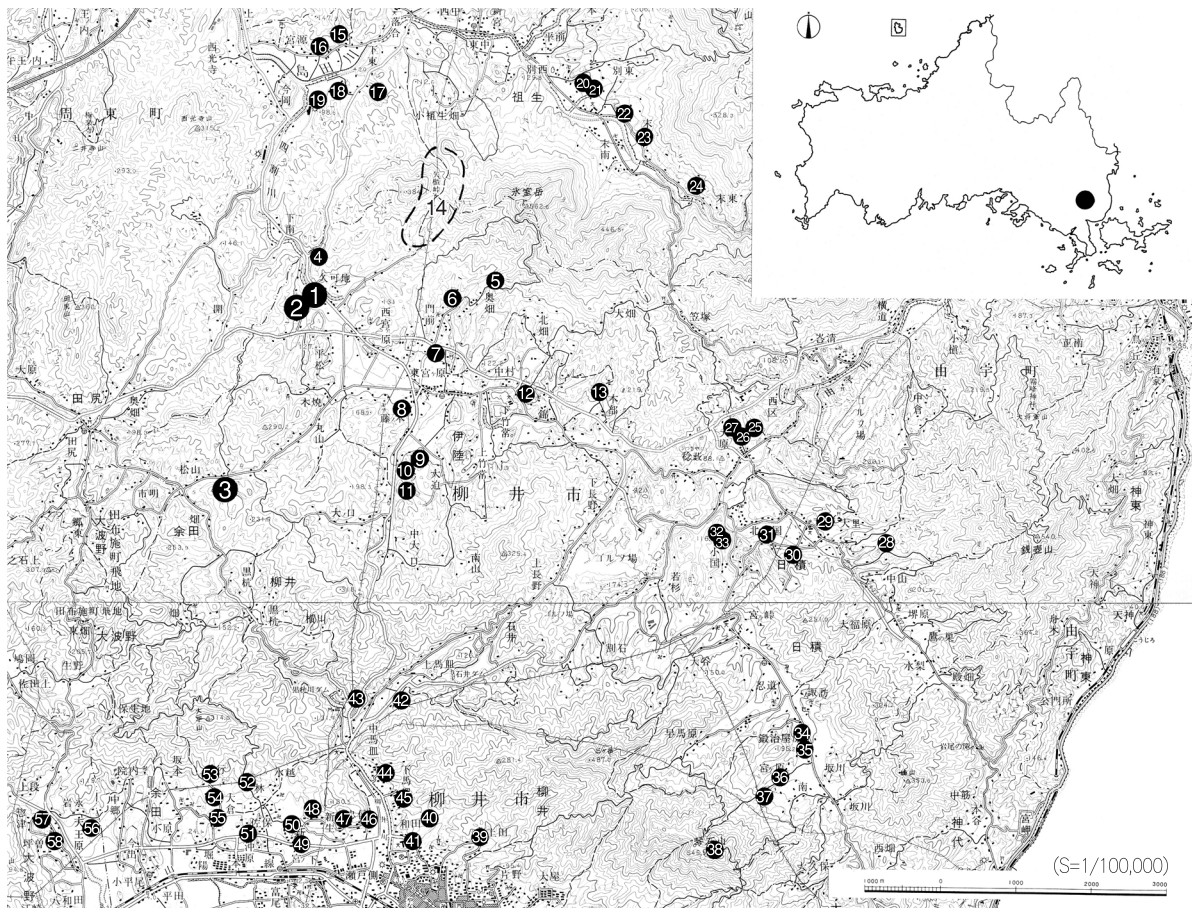
図版21 調査区遠景
図版22 調査区全景
図版23 調査区中央部完掘状況 TR4①土層断面、TR4②土層断面 TR4③土層断面、TR4④土層断面
図版24 TR1①土層断面、TR1②土層断面 TR1③土層断面、TR6①土層断面

図版24 TR6②土層断面、TR6③土層断面 TR2①土層断面、TR2②土層断面
図版25 TR2③土層断面、TR2④土層断面 TR2⑤土層断面、TR2⑥土層断面 TR5①土層断面、TR5②土層断面 TR5③土層断面、TR5④土層断面
図版26 出土土器・石製品・金属製品

I 遺跡の位置と環境

伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡は柳井市伊陸に所在する。伊陸地区は柳井市の北部に位置し、北端および西端は周東町と接する。伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡が所在する伊陸盆地は東半が由宇川、西半が島田川の支流である四割川の上流域にあたり、由宇川および四割川の形成する谷底平野と氷室岳等の周辺の山地および丘陵地からなる。伊領原遺跡は伊陸盆地の北西端、四割川右岸の平野部に位置し、木焼遺跡は対岸の丘陵地の裾部に位置する。松ヶ谷遺跡は両遺跡とは少し離れた四割川の源流に近い山地の谷あい位置する。

周辺の遺跡を見ると、伊陸地区では藤木遺跡（8）や宗兼遺跡（12）から縄文時代の石鏃や石斧が出土しており、人々の生活の痕跡を縄文時代から追うことができる。伊陸周辺では島田川上流域の玖珂盆地周辺や熊毛半島沿岸部に縄文時代の遺跡が集中して多く見られる。用田遺跡（周東町）・黒島浜遺跡（柳井市）からは旧石器時代の石器も出土しており、玖珂盆地周辺及び熊毛半島沿岸部は古くか



- | | | | | |
|--------------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------|
| 1. 伊領原遺跡 | 2. 木焼遺跡 | 3. 松ヶ谷遺跡 | 4. 久可地城跡(藤井氏城跡) | 5. 高山寺城跡 |
| 6. 周防安国寺跡 | 7. 東宮ヶ原遺跡 | 8. 藤木遺跡 | 9. 山ノ神古墳 | 10. 大迫遺跡 |
| 11. 下大ノ口遺跡 | 12. 宗兼遺跡 | 13. 放光山十輪寺 | 14. 嶽山壺窯跡推定地 | 15. 上丈遺跡 |
| 16. 宮源遺跡 | 17. 岡丈遺跡 | 18. 奥ヶ原遺跡 | 19. 四割遺跡 | 20. 冷泉家北遺跡 |
| 21. 冷泉氏館跡 | 22. 城の山城跡 | 23. 北ヶ迫城跡 | 24. 末元遺跡 | 25. 岡の畑首塚 |
| 26. 大原遺跡 | 27. 清常古墳 | 28. 尾崎原遺跡 | 29. 大里遺跡 | 30. 中院遺跡 |
| 31. 北智雲院遺跡 | 32. 茶臼山城跡 | 33. 日積茶臼山古墳群 | 34. 杉氏館跡(代官屋敷) | 35. 鍛冶屋原遺跡 |
| 36. 栗屋氏館跡(栗屋弥兵衛屋敷) | 37. 正蓮寺跡 | 38. 琴石城跡(伊賀道城跡) | 39. 上田遺跡 | 40. 鳥越遺跡 |
| 41. 和田遺跡(井向遺跡) | 42. 法専寺遺跡 | 43. 鱈淵遺跡 | 44. 新国清遺跡 | 45. 国清遺跡 |
| 46. 杉氏館跡 | 47. 多田野古墳 | 48. 山の口遺跡 | 49. 浜遺跡 | 50. 稻荷山古墳 |
| 51. 迫ヶ谷遺跡 | 52. 吉政遺跡 | 53. 安行瓦窯跡 | 54. 濡田廃寺跡 | 55. 大倉遺跡 |
| 56. 明地遺跡 | 57. 天王原古墳(坪曾古墳) | 58. 納蔵原古墳群 | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

ら人々の生活の場として適した環境であったことがわかる。

弥生時代になると、島田川流域および熊毛半島基部（古柳井水道）周辺には大規模な集落が営まれるようになる。特に弥生時代中期以降は島田川流域を中心に丘陵上に立地し防衛機能を持つ高地性集落が出現し、社会情勢の変化が伺われる。伊陸周辺では四割遺跡（19）・奥ヶ原遺跡（18）で弥生後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が見つかり、また弥生時代後期から終末期の高地性集落として鳥越遺跡（40）、吉政遺跡（52）が挙げられる。中院遺跡（30）・明地遺跡（56）は弥生時代中期から後期の大きな集落跡であり、大型の分銅形土製品が出土している。

古墳時代になると熊毛半島基部（古柳井水道）周辺には茶白山古墳（柳井市）をはじめ、県下最大級の前方後円墳である白鳥古墳（平生町）等の大規模な首長墓が次々と築造される。従来遺跡が多く分布するこの地域は西瀬戸内海の海上交通の要衝でもある。伊陸地区では古墳時代後期の円墳である山ノ神古墳（9）がある。伊陸地区における弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は東宮ヶ原遺跡（7）、大迫遺跡（10）等伊陸盆地周辺の山地の裾部において見られるが、いずれも未調査であるため詳細は不明である。

古代において柳井周辺は玖珂郡に属する。日積地区にある大里遺跡（29）からは8～10世紀頃の遺物が出土しており、その中には緑釉陶器や六連島式製塩土器が含まれる。

中世になると伊陸地区は文献にも登場するようになり、地名にも中世に由来すると思われるものが多く、中世以降大きく開かれたことが伺われる。氷室岳の麓の高山寺は1320年に開山し、その後1338年には足利尊氏により周防安国寺（6）に定められている。また伊陸及びその周辺には大内氏の家臣関連の城館跡が多く分布しており、伊領原遺跡の北東の山には15～16世紀頃大内氏家臣の藤井氏の居城である久可地城（4）があったとされる。氷室岳の北麓にあたる周東町祖生には同じく大内氏家臣の冷泉氏の館（21）およびその家臣達の居城（22、23）が築かれており、冷泉氏館跡に隣接する冷泉家北遺跡（20）では、溝を伴う建物跡をはじめ13～16世紀の遺構が確認されている。なお、日積地区に所在する尾崎原遺跡（28）からは14～16世紀頃の溝に囲まれた数十棟の建物跡が見つかり、柳井地域における中世集落遺跡の様子が明らかにされている。

伊陸地区では、縄文時代以降伊陸盆地周辺にいくつかの遺跡が発見されているが未調査の遺跡がほとんどであり、遺跡の性格や広がり等不明な部分が多く、今後の調査が期待される。

参考文献

1. 柳井市史編纂委員会 『柳井市史』通史編 1984
2. 柳井市史編纂委員会 『柳井市史』総論編 1988
3. 山口県教育委員会 『山口県遺跡地図―第1次改訂版―』 1991
4. 山口県教育委員会 『未指定文化財総合調査報告書 史跡―中世―編』 1985
5. 山口県史編さん委員会 『山口県史』資料編 考古1 2000
6. 山口県史編さん委員会 『山口県史』資料編 考古2 2004
7. 周東町史編纂委員会 『周東町史』 1979
8. 財団法人山口県埋蔵文化財センター 『四割遺跡』 1991
9. 財団法人山口県埋蔵文化財センター 『奥ヶ原遺跡』 1992
10. 財団法人山口県埋蔵文化財センター 『吉政遺跡』 1996
11. 財団法人山口県埋蔵文化財センター 『冷泉家北遺跡』 1997
12. 財団法人山口県埋蔵文化財センター・柳井市教育委員会 『中院遺跡』 2003
13. 財団法人山口県ひとつづくり財団・山口県埋蔵文化財センター 『尾崎原遺跡・大里遺跡・北智雲院遺跡』 2005

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

柳井市伊陸西部における農業基盤整備事業等に伴い、対象地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、柳井市教育委員会が2002（平成14）年に試掘調査を実施した。調査では柱穴や土師器等の遺構・遺物が発見され、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認された。この調査を受けて山口県教育委員会は、事業主体である山口県農林部とその取り扱いを協議し、新たに埋蔵文化財包蔵地が確認された範囲のうち、ほ場整備工事によって削平を受け現状保存が困難とみられる久可地地区（伊領原遺跡、2,770㎡）、木焼地区（木焼遺跡、2,160㎡）、松山地区（松ヶ谷遺跡、670㎡）については、本発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。調査は、山口県農林部、および文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会から調査を委託された財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

2 調査の概要

発掘調査を進めるにあたっては、事前に対象となる調査区の現況確認の上、山口県田布施農林事務所との打ち合わせ等を行った。この間、近隣の小中学校、警察署、消防署、自治会等にも調査期間中における安全のための協力と理解を要請し、さらには、現場作業員説明会を実施して作業内容の確認や安全管理について周知徹底を図った。

「木焼遺跡」

5月12日から伊領原遺跡に仮設事務所を設置する作業と並行して、重機による表土除去を開始した。5月17日からはⅠ地区の遺構検出を行った。6月初旬には国土座標杭を設置し、6月10日からは遺構配置概略図作成のための平板実測を行った。7月9日から遺構の掘り込み作業に入り、8月2日にはすべて終了した。8月3日には空中写真撮影を行い、8月8日から遺構の写真撮影やグリッド実測を行った。遺跡内からは、土師器、須恵器、石鏃等が出土し、Ⅰ・Ⅱ地区にそれぞれ遺物包含層が確認された。

「伊領原遺跡」

5月9日より仮設事務所及び駐車場用地の整地を開始し、5月13日に仮設事務所及び機材庫を設置した。5月



表土除去（木焼遺跡）



国土座標杭設置（木焼遺跡）

10日からはこれと並行して重機による表土除去を行い、5月12日からは土層及び遺構面確認のためのトレンチ調査を実施した。6月初旬には木焼遺跡と併せて国土座標杭設置を行った。6月16日からは、I-1地区から遺構検出に入り、これと並行して遺構分布等の平板実測を行った。遺構検出終了後遺構の掘り込み作業に入り、掘立柱建物跡、溝、土坑、柱穴などの遺構を確認した。またI-2地区の遺物包含層からは、縄文土器片が出土し、他の遺構検出が終了後掘り込みを行うこととした。掘り込み作業と並行して、検出した遺構の写真撮影・実測を行った。遺構面の清掃作業終了後、9月22日には空中写真撮影を行った。9月26日からは遺跡内の遺構を最終的に記録するためのグリッド実測を行った。10月5日から流路跡の確認のためのトレンチを拡張して土層を確認し、これを記録する作業と、I-2地区の縄文遺物包含層の掘り込み作業を並行して行った。10月14日にはすべての作業を終了し、必要な機材は松ヶ谷遺跡へ搬出して仮設事務所や機材庫を撤収した。10月15日には、久可地公会堂において、これまでの調査の成果を広く公開すべく発掘調査報告会を開催した。地元の方々を中心に約50名の方の見学があり、プロジェクターによる遺跡全体や遺構の紹介、復元された縄文時代や中世の遺物の実物展示を行った。



空中写真撮影（伊領原遺跡）

「松ヶ谷遺跡」

9月よりトレンチ調査を始め、9月9日に重機による表土除去を行った。9月22日に伊領原遺跡から機材がすべて運ばれ、9月27日から遺構検出に入った。遺構検出終了後、遺構の掘り込み作業に入り、その結果中世とみられる柱穴や土師器、陶磁器などが出土した。10月20日に空中写真撮影を行った後、土層断面図等の実測や写真撮影を行い、地形の状態の記録を行った。10月27日にすべての機材を撤収して現地調査はすべて終了した。例年に比べると、雨による作業の中断は少なかったものの、9月上旬には県東部が台風の被害に遭い、調査区においても防災・排水に時間を費やすこととなった。3つの遺跡を並行して調査するなど、作業の効率化を図ることで調査を円滑に進めることができた。その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測及び写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。



遺構掘り込み（松ヶ谷遺跡）



発掘調査報告会

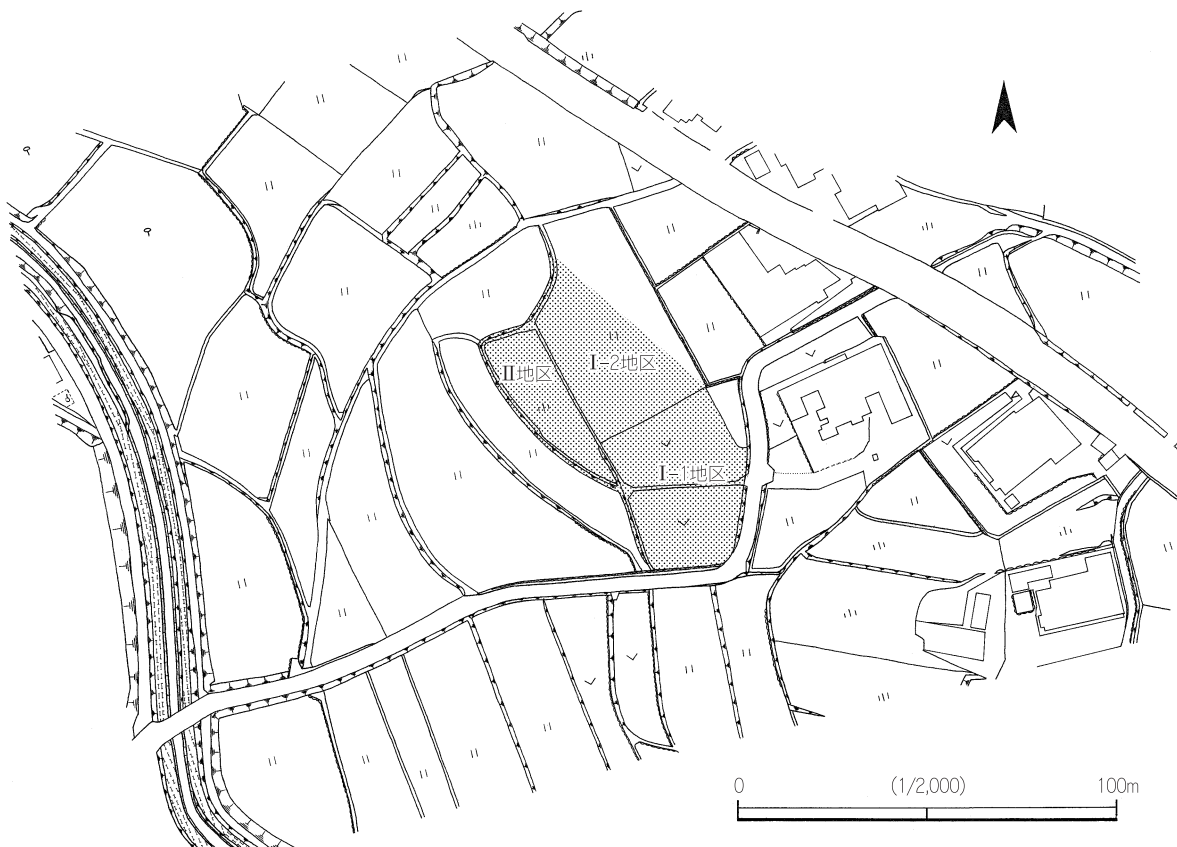
Ⅲ 伊領原遺跡

1 調査の方法と経過

伊領原遺跡は、氷室岳の西麓に広がる伊陸低地に位置している。伊陸低地は、島田川の支流である四割川と由宇川の両河川の上流域に形成されており、伊領原遺跡はその伊陸低地の北西部、四割川右岸の谷底平野にある。調査区の標高は約85mで、西側に向かってやや傾斜しているがほぼ平坦で、北側では四割川と舞谷川が合流している。また、四割川を挟んで約250m先の南西高位の段丘上には、木焼遺跡が位置している。

調査区は、調査前の現地水田区画に従い、上段南半をⅠ－1地区、上段北半をⅠ－2地区、下段をⅡ地区とした(第2図)。調査は、まずⅠ地区とⅡ地区それぞれ調査区を縦断する形でトレンチを設定し、遺構面を確認することから開始した。その結果、盤土下0～10cmの比較的浅い所に遺構面があると判断してⅠ－1地区より順に表土除去を行った。また、調査区を東西に横断するように2本の流路跡も確認することができた。途中、天候や進捗状況などにより、木焼遺跡と並行して表土除去や遺構の検出等の作業を進めることとした。

Ⅰ－1地区は、盤土下約15cm程度の所に灰黄褐色土層の遺構面があるとして検出作業を行った結果、土坑1基(SK14)、数個の柱穴、流れ込んできたと思われる少量の遺物を検出した。SK14とSP60は流路跡を掘り込む形で検出しており、SP60からは中世の土師器の鍋片が多量に出土した。さらに、トレンチを数カ所設定して遺構面の再確認を行ったが、灰黄褐色土層の下には砂礫層が堆積しており、80cmほど掘り下げても続くため氾濫原が広がっていたものと推察できる。



第2図 調査区設定図

I-2地区は、調査区の中で最も多くの遺構を検出した。南側には2本確認された流路跡のうちの1本が走り、その北側には黒色の砂質土の広がりが見られた。さらに北側には灰黄褐色の弱粘質土が広がっていることを確認した。また、黒色の砂質土と灰黄褐色の弱粘質土を区切るように2条の溝(SD3・SD4)が東西に走り、これと直交するように2条の溝(SD1・SD2)も検出した。特に、これらの溝に囲まれた地区に遺構が集中しており、確認された掘立柱建物跡はI-1地区にまたがるものを含めて14棟を数える。中でもSB1は桁行が4.7mで、南面には庇が付設されており、復元された建物の中では最大である。この地域では、墓と思われる土坑(SK1)や遺構としての性格は特定できないものの、平らな石の下から土師器坏2枚を口縁部同士合わせて置いたと考えられるもの(SX1)も検出され、集落としてのまとまりをうかがわせる。調査終盤には、SD3・SD4の北側に広がる灰黄褐色粘質土の中で、褐灰色土が混ざっている地域が見つかったため、掘り込みを行い精査した結果、少量ながらも縄文土器が比較的まとまった形で出土した。I-2地区は遺構が集中しており、弱粘質土が広がっている地域は水はけも悪いため、調査時間の大半を遺構検出や掘り込みに費やすこととなった。

I地区より一段下がったII地区には、I地区から続く流路跡2本が中央を横断しており、調査区の3分の2を礫の堆積層が占めている。北側の流路跡の両岸の一部には、I-2地区と同じような黒色の砂質土が広がっている個所が見られた。遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑4基、用途不明遺構1基、柱穴数十個が検出された。掘立柱建物跡3棟のうち1棟(SB15)は、南側の流路跡に掘り込まれる形で検出され、残りの2棟(SB16・SB17)は、一部が調査区外へおよんでいるか、または削平のため全体の規模は不明である。また、被熱した石の下から、ほぼ完形の土師器坏が据えられた状態で出土した遺構(SX2)も検出された。地鎮等の祭祀遺構の可能性も考えられるがはっきりとした用途は不明である。

本遺跡は、今回調査を行った3つの遺跡の中では遺構や遺物が最も多く検出されたことと、初めて発掘調査に携わる作業員が多かったため、発掘作業の手順、検出された遺構や出土した遺物の特徴や用途をその都度紹介するように努めた。また、夏期の調査であったため、安全管理の心得を徹底しながら作業を進め、最後に遺構の記録を空中写真撮影、グリッド実測等を行い、現地での調査を終了した。



第3図 遺構配置図

2 調査の成果

(1) 遺構

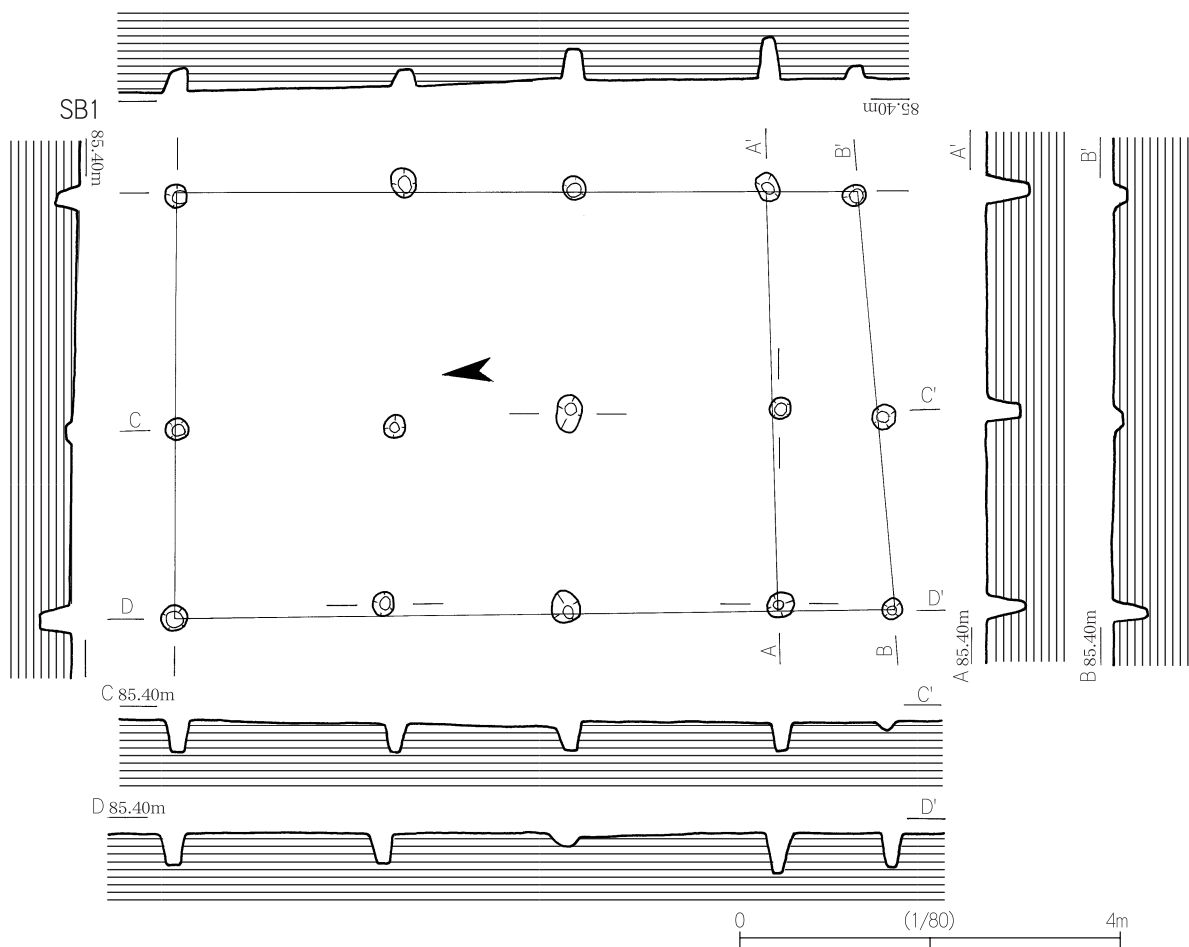
調査区は、標高85mの地にあり、四割川の支流の舞谷川が形成した扇状地の扇端部に位置する。調査区内でも東西を横断するように流路跡と思われる砂礫が厚く堆積している区域がある。今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡17棟、土坑14基、溝状遺構5条、柱穴約500個で、遺構の密度はI-2地区が最も高く、I-1地区が最も希薄である。これらの遺構から出土した遺物から、調査区内の遺構の多くが中世のものと考えられる。

① 掘立柱建物跡

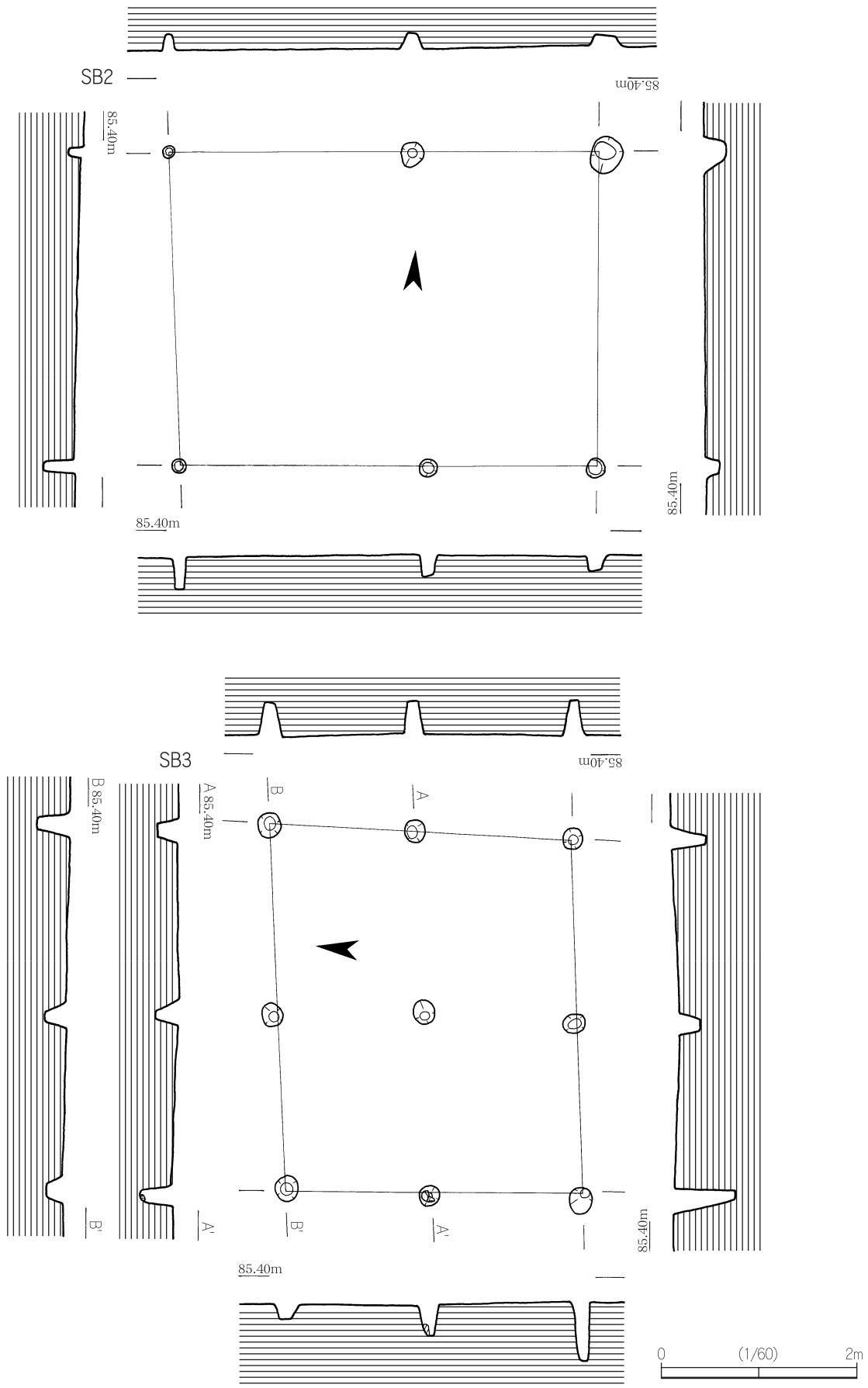
今回の調査で多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物跡が17棟復元できた(表1)。17棟のうちSB9、SB17については一部が調査区外におよび、SB16は削平を受けたため全容は確かでない。建物は1間×1間が2棟、2間×1間が8棟、2間×2間が3棟、3間×2間が1棟で比較的小規模なものが大半を占める。

SB1(第4図、図版4)

I-1地区とI-2地区にまたがり、I地区中央部に位置する身舎3間×2間の建物で、南面に庇(長さ1.20m)が付設されている。棟方向はN7°E。建物規模は桁行4.77m、梁行3.33m、面積約15.9㎡で、桁行は調査区で復元した建物中最長である。柱穴の規模は直径20~40cm、深さ8~48cmである。



第4図 SB1実測図

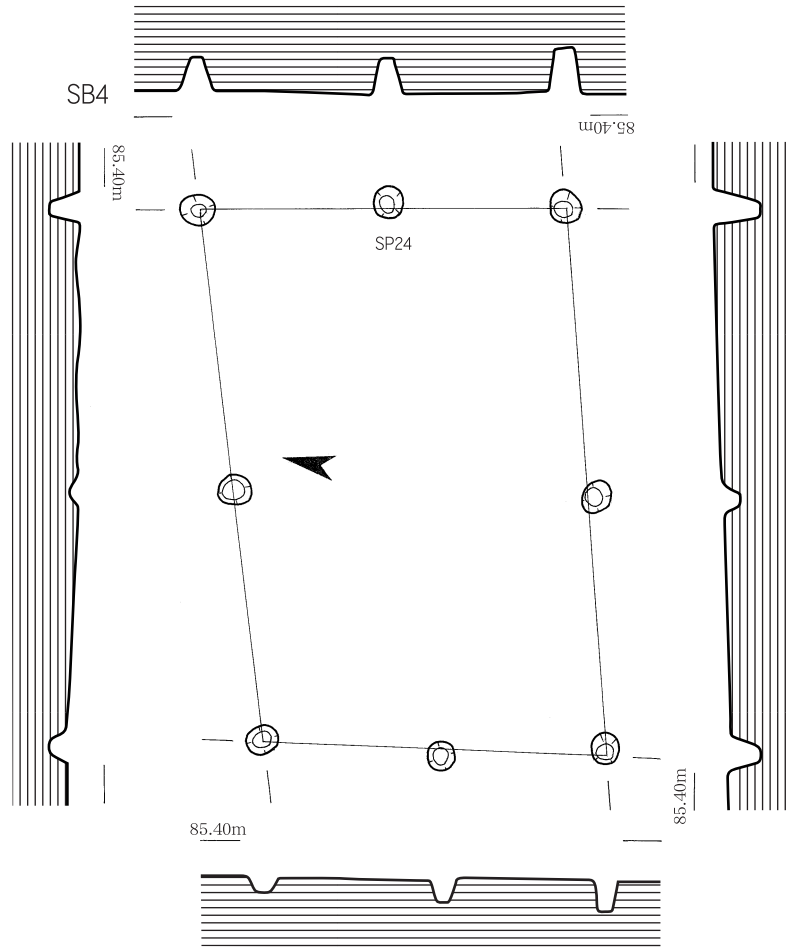


第5図 SB2・3実測図

遺物は出土していない。
 時期は不明である。

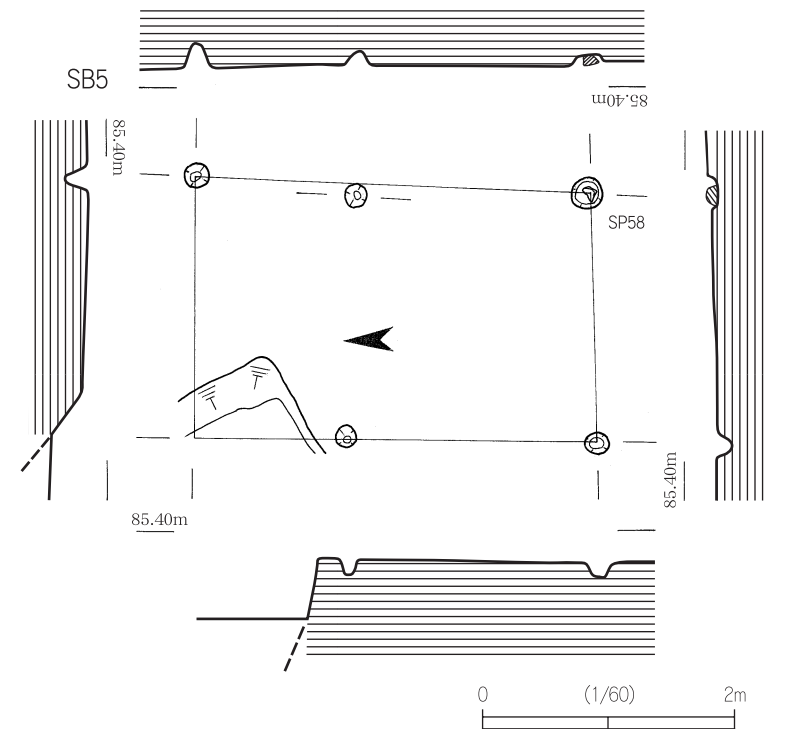
SB2 (第5図、図版4)

検出された建物では最も南に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN84°E。建物規模は、桁行4.26m、梁行3.21m、面積13.67㎡。柱穴の規模は、直径12~39cm、深さ15~33cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。SB1の付属棟かとみられる。



SB3 (第5図、図版4)

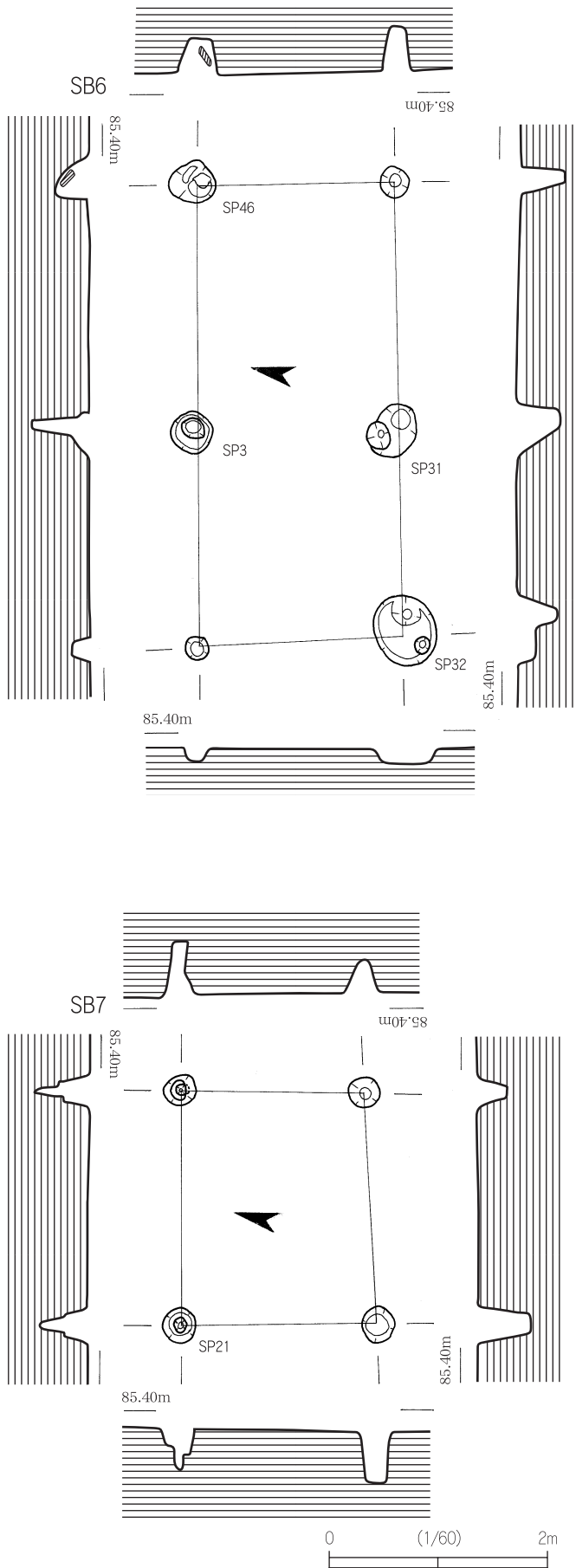
I-1地区とI-2地区にまたがり、I地区の中央部に位置する2間×2間の建物である。棟方向はN84°E。建物規模は桁行3.63m、梁行3.03m、面積は11.00㎡。柱穴の規模は、直径24~27cm、深さ15~60cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。



SB4 (第6図、図版4)

I-2地区の南東に位置する2間×2間の建物である。棟方向はN78°E。建物規模は桁行4.38m、梁行2.73m、面積は11.96㎡。柱穴の規模は直径21~27cm、深さ6~39cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。

第6図 SB4・5実測図



第7図 SB6・7実測図

SB5(第6図、図版4)

I-2地区の南東に位置する2間×1間の建物である。建物の北東端の柱穴は後世の攪乱により破壊されており確認することができなかった。棟方向はN3°E。建物規模は、桁行3.15m、梁行1.98m、面積は6.24㎡。柱穴の規模は直径15~24cm、深さ10~21cmである。遺物は出土していないが、SP58(図版8)からしっかりとした平らな石が検出され、根石の可能性もある。時期は不明である。

SB6(第7図、図版5)

I-2地区の南に位置する2間×1間の建物である。SB10・11と重複する。棟方向は、N78°E。建物規模は桁行4.17m、梁行1.89m、面積は7.88㎡。柱穴の規模は直径21~60cm、深さ15~51cmである。SP46(図版7)から詰石と思われる石が検出された。他の柱穴から土師器坏(25)が出土している。出土遺物から、時期は中世と考えられる。

SB7(第7図、図版5)

I-2地区の南西側に位置する1間×1間の建物である。SB8・12・13、SK5と重複する。棟方向はN75°E。建物規模は桁行2.13m、梁行1.80m、面積3.83㎡。柱穴の規模は直径27~30cm、深さ30~51cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。

SB8(第8図、図版5)

I-2地区の南西側に位置する2間×1間の建物である。SB7・12・13、SK5と重複する。棟方向はN84°E。規模は、桁行が3.90m、梁行3.09m、面積が12.05㎡。柱穴の規模は直径21~30cm、深さ15~39cmである。土師器が出土しており、時期は

中世と考えられる。

SB9(第8図、図版5)

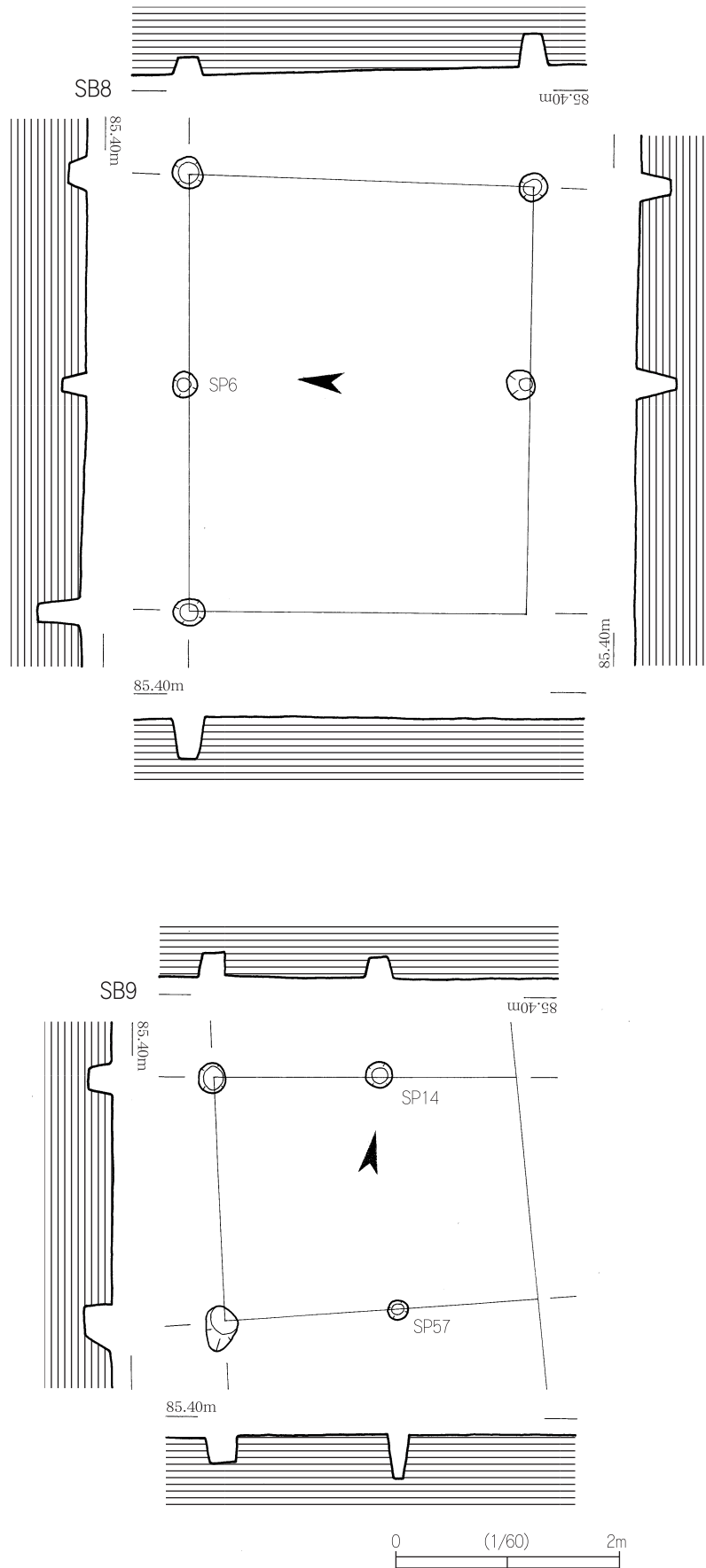
I-2地区の東側に位置する。建物の西側の4つの柱穴を確認したが、東側は調査区外へ及ぶため全体の規模は不明である。棟方向はN80°E。柱穴の規模は直径15~39cmで、深さ21~39cm。柱穴から打製石鏃(101)と土師器皿が出土した。土師器が多く出土したことから、時期は中世と考えられる。

SB10(第9図)

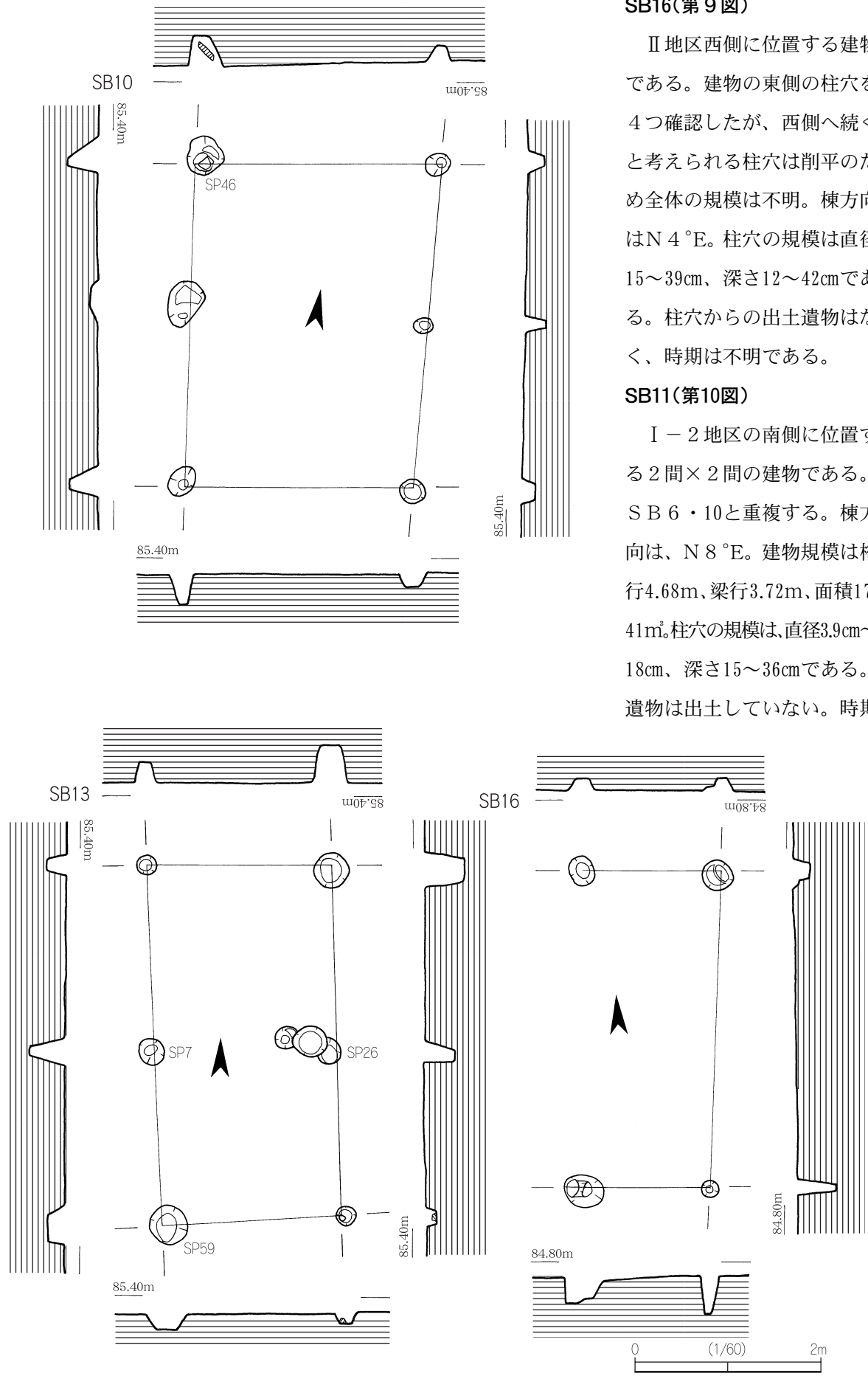
I-2地区の南側に位置する、2間×1間の建物である。SB6・11と重複する。棟方向は、N10°W。建物規模は桁行3.48m、梁行2.46m、面積8.56㎡。柱穴の規模は直径15cm~51cm、深さ6cm~33cmである。SB6内のSP46(図版7)から詰石と思われる石が検出された。他の柱穴から土師器皿が出土しており、時期は中世と考えられる。

SB13(第9図)

I-2地区の南西側に位置する2間×1間の建物である。SB7・8・12と重複する。棟方向はN2°E。建物規模は、桁行3.90m、梁行1.92m、面積7.49㎡。柱穴の規模は直径21cm~45cm、深さ15~45cmである。土師器鍋が出土しており、時期は中世と考えられる。



第8図 SB8・9実測図



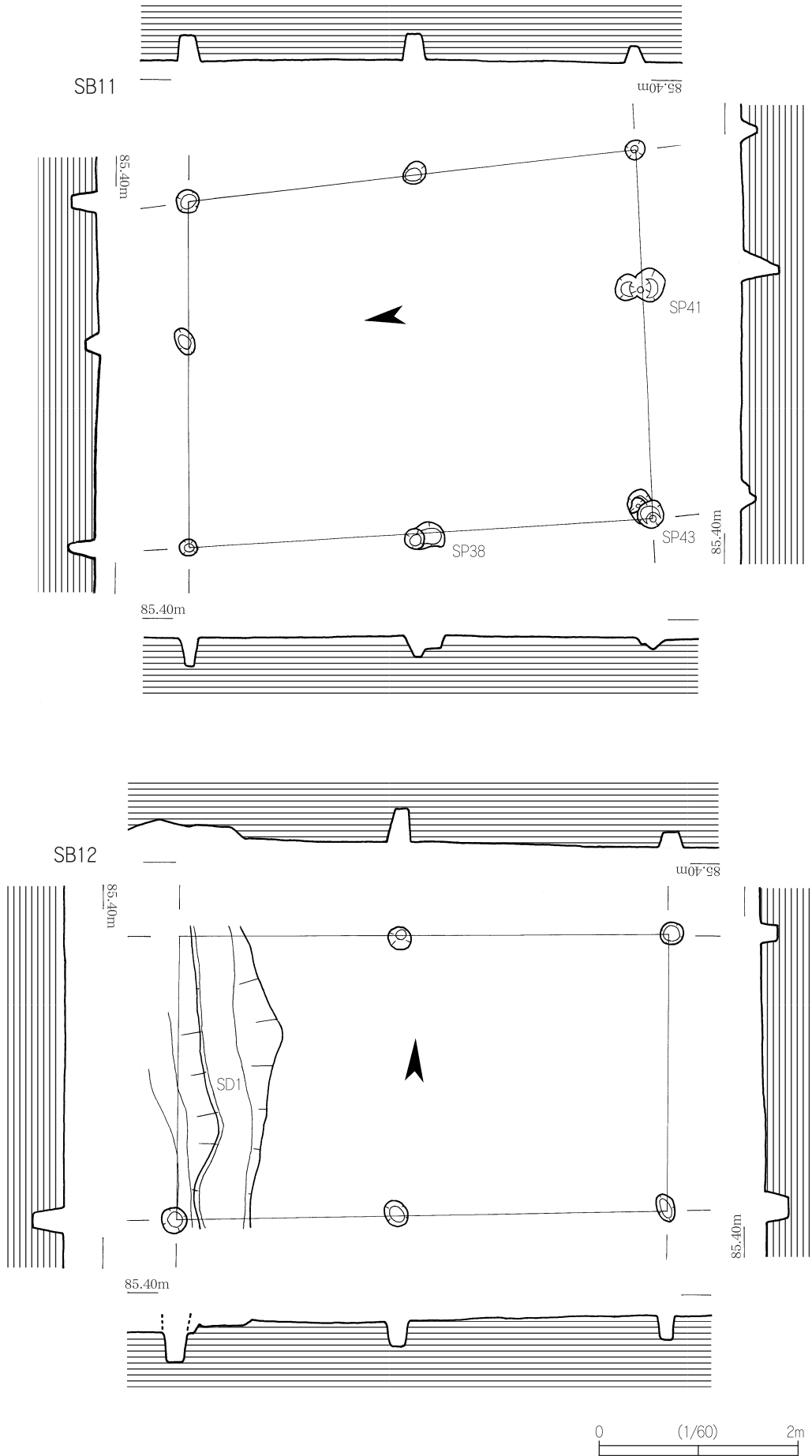
SB16(第9図)

Ⅱ地区西側に位置する建物である。建物の東側の柱穴を4つ確認したが、西側へ続くと考えられる柱穴は削平のため全体の規模は不明。棟方向はN4°E。柱穴の規模は直径15~39cm、深さ12~42cmである。柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

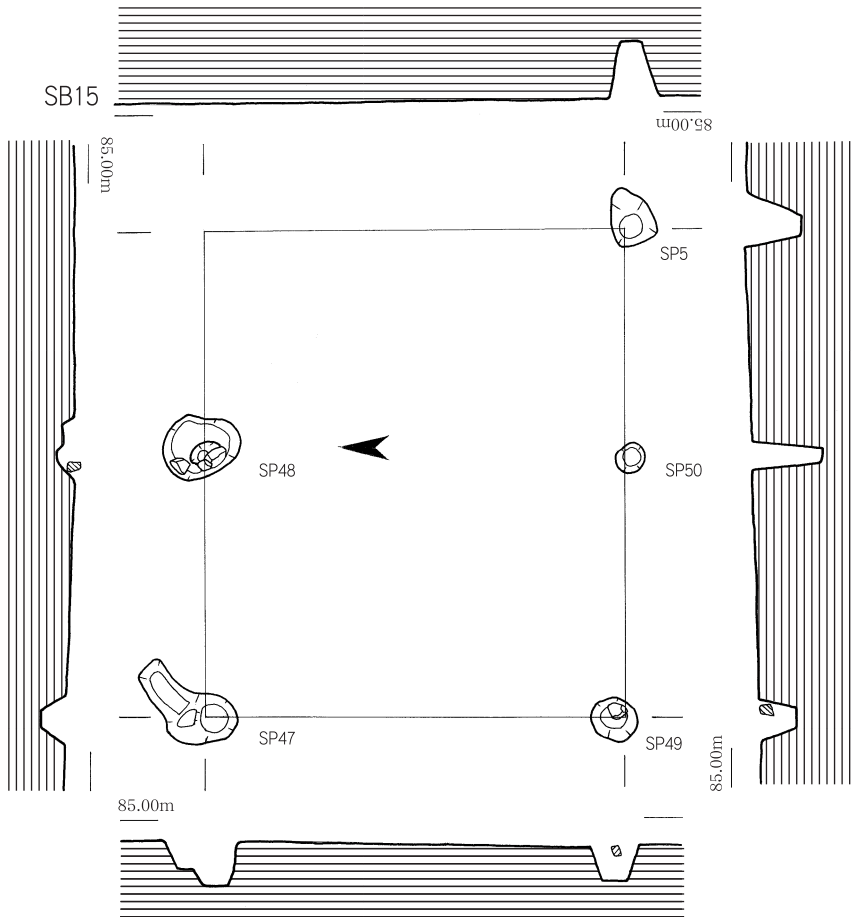
SB11(第10図)

I-2地区の南側に位置する2間×2間の建物である。SB6・10と重複する。棟方向は、N8°E。建物規模は桁行4.68m、梁行3.72m、面積17.41㎡。柱穴の規模は、直径3.9cm~18cm、深さ15~36cmである。遺物は出土していない。時期

第9図 SB10・13・16実測図



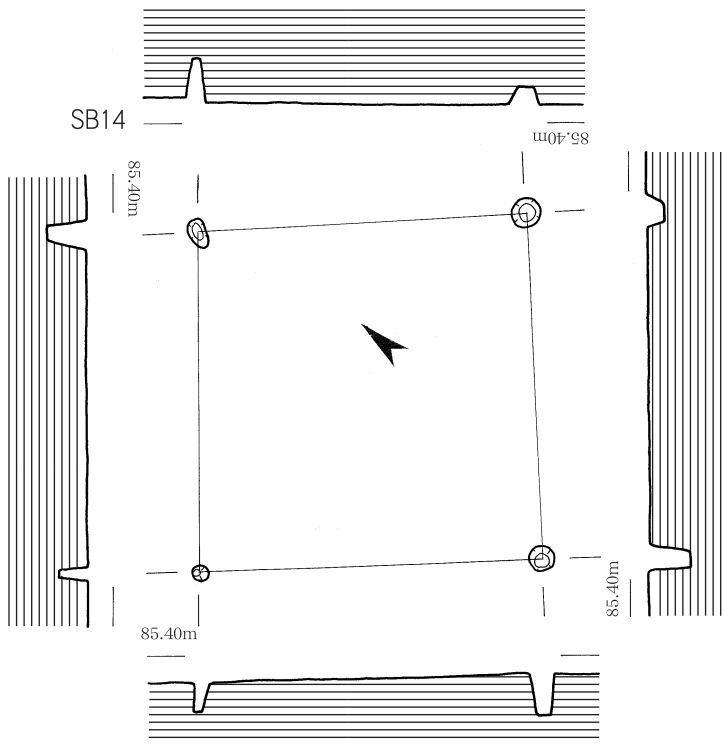
第10図 SB11・12実測図



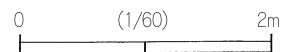
は不明である。

SB12(第10図)

I - 2 地区の南西側の建物である。建物を構成する5つの柱穴は確認できたが、残る北西端の柱穴はSD 2内にあり消失したものであると思われる。このことから、少なくとも2間×1間の建物であったと考えられる。SB7・8・13、SK5と重複する。棟方向はN89°E。建物規模は、桁行4.92m、梁行2.76m、面積13.58㎡。柱穴の規模は、直径18~24cm、深さ12~36cmである。土師器が出土したことから、時期は中世と考えられる。



SB17



第11図 SB15・14・17実測図

SB15(第11図)

II地区の南西側にある2間×1間の建物である。棟方向はN88°E。建物規模は、桁行3.87m、梁行3.30m、面積12.77㎡。柱穴の規模は、直径24～60cm、深さ12～46cm。土師器皿・坏・鍋、瓦質土器甕が出土したことから、時期は中世と考えられる。

SB14(第11図)

I-2地区の西側に位置する1間×1間の建物である。棟方向はN53°E。建物規模は、桁行2.73m、梁行2.70m、面積7.37㎡。柱穴の規模は直径9cmから24cm、深さ12～33cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。

SB17(第11図)

II地区北側に位置する建物である。建物の南側の柱穴を3つ確認したが、これ以外は調査区外へ続くため全体の規模は不明。棟方向はN76°E。柱穴の規模は直径18～21cm、深さ18cmから30cmである。遺物は出土していない。時期は不明である。

表1 掘立柱建物跡一覧表

地 区	遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		床面積 (㎡)	出土遺物	時 代	備 考
				桁 行	梁 行				
				建物の南西隅から(m)	建物の南西隅から(m)				
1	I-1・2 SB1	3×2	N7°E	4.77(1.53・1.44・1.80)	3.33(1.59・1.74)	15.88	なし	不明	南面に庇
2	I-1・2 SB2	2×1	N84°E	4.26(2.52・1.74)	3.21	13.67	なし	中世?	
3	I-1・2 SB3	2×2	N84°E	3.63(1.74・1.89)	3.03(1.53・1.50)	11.00	なし	不明	
4	I-2 SB4	2×2	N78°E	4.38(2.04・2.34)	2.73(1.32・1.41)	11.96	なし	不明	
5	I-2 SB5	2×1	N3°E	3.15(1.86・1.29)	1.98	6.24	なし	不明	柱間は南東隅からのデータ
6	I-2 SB6	2×1	N78°E	4.17(1.98・2.19)	1.89	7.88	土師器(坏)	14～15世紀	SB10・11と重複
7	I-2 SB7	1×1	N75°E	2.13	1.80	3.83	なし	中世	SB8・12・13、SK5と重複
8	I-2 SB8	2×1	N84°E	3.90(1.89・2.01)	3.09	12.05	土師器	14～15世紀	柱間は北東隅からのデータSB7・12・13、SK5と重複
9	I-2 SB9	1+α×1	N80°E	— (1.56)	2.19	—	打製石鏃 土師器(皿)	14～15世紀	調査区外へ続く
10	I-2 SB10	2×1	N10°W	3.48(2.04・1.44)	2.46	8.56	土師器(皿)	14～15世紀	SB6・11と重複
11	I-2 SB11	2×2	N8°E	4.68(2.25・2.43)	3.72(2.31・1.41)	17.41	なし	中世?	SB6・10と重複
12	I-2 SB12	2×1	N89°E	4.92(2.7・2.22)	2.76	13.58	土師器細片	14～15世紀	柱間は南東隅からのデータSB7・8・13、SK5、SD2と重複
13	I-2 SB13	2×1	N2°E	3.90(1.89・2.01)	1.92	7.49	土師器(鍋)	14～15世紀	SB7・8・12と重複
14	I-2 SB14	1×1	N53°E	2.73	2.70	7.37	なし	不明	
15	II SB15	2×1	N88°E	3.87(2.07・1.8)	3.30	12.77	土師器(皿、坏、鍋) 瓦質土器(甕?) 剥片	14～15世紀	
16	II SB16	1+α×1	N4°E	— (1.47)	3.42	—	なし	不明	西部は削平
17	II SB17	2×α	N76°E	3.45(1.83・1.62)	—	—	なし	不明	調査区外へ続く

伊領原遺跡

② 土坑

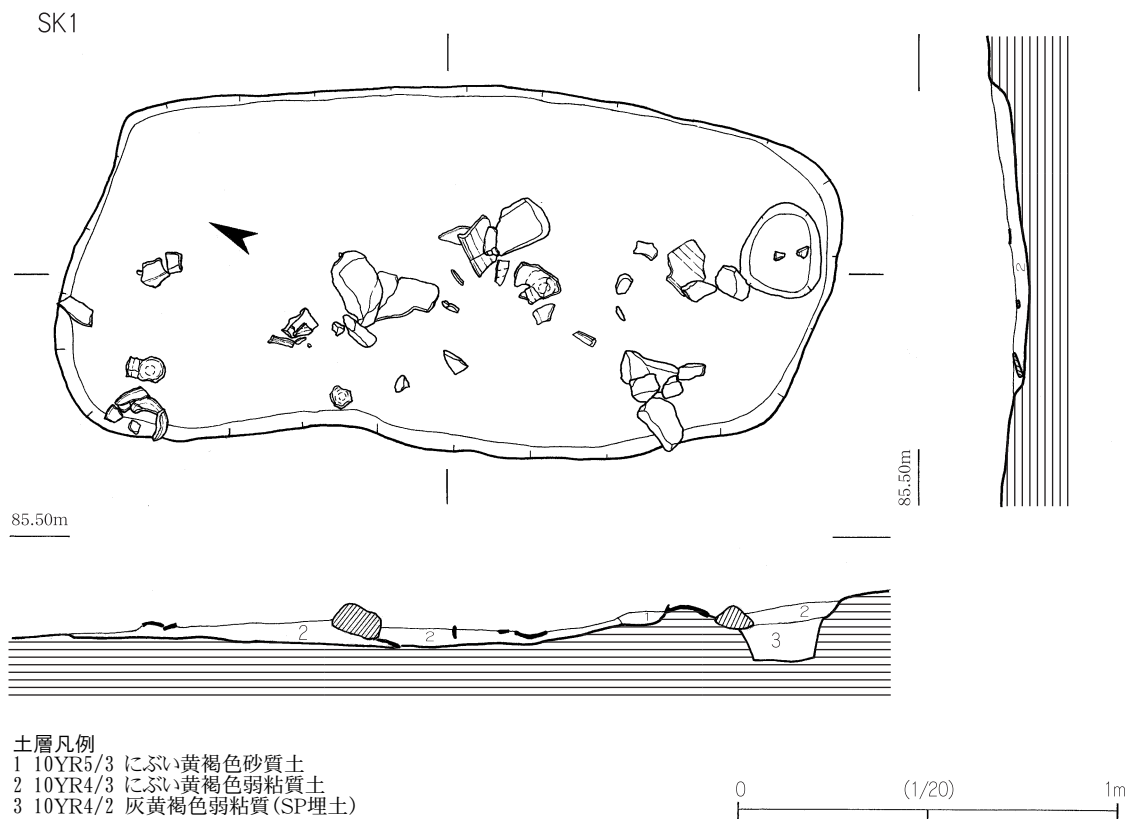
今回の調査で13基の土坑が確認された。調査区別にみるとⅠ－1地区が1基、Ⅰ－2地区が8基、Ⅱ地区が4基となり、Ⅰ－2地区が最も多い。平面形は隅丸方形が1基、不整形が5基、長円形が4基、円形が2基、楕円が1基で、不整形が最も多かった。出土遺物から、中世と考えられるものが9基検出され、遺物をともなわないものが4基検出された。深さも、1基を除いておそらく後世の削平を受けたためか、50cm以下の浅いものである。以下、代表的なものを取り上げる。

SK1(第12図、図版5)

Ⅰ－2地区の南東側に位置する隅丸方形の土坑である。規模は、長軸207cm、短軸99cm、深さ8cmを測る。土師器坏(14・15)・鍋(16~18)、備前系陶器甕(19)が出土した。時期は中世とみられる。また、土坑の形状や土師器坏の出土状況に加え、土壌理化学分析の結果から、土坑墓と推定される(付編2参照)。

SK3(第13図、図版5)

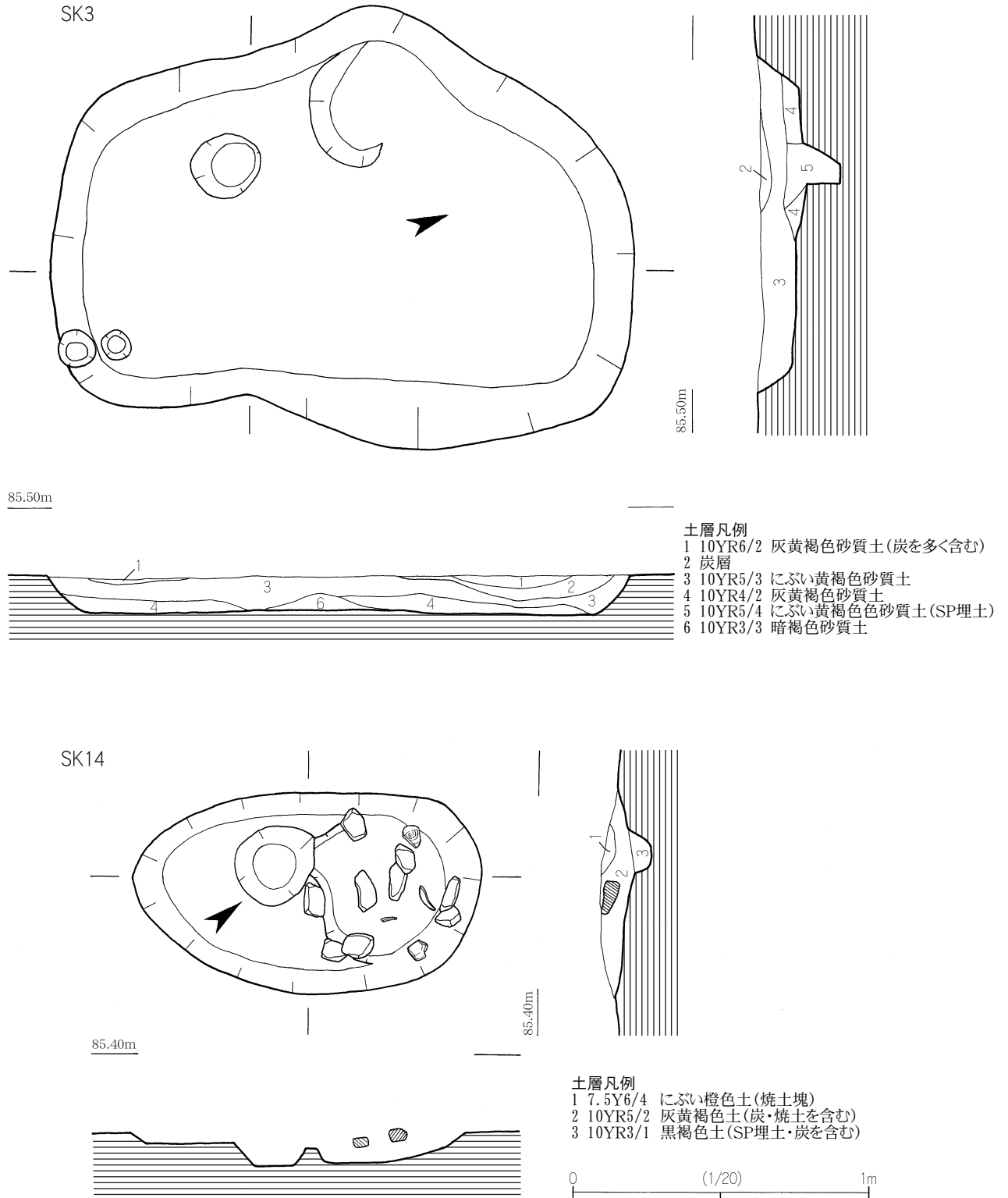
Ⅰ－2地区の南東側に位置する長円形の土坑である。規模は、長軸が196cm、短軸が150cm、深さ14cmを測る。上層の灰黄褐色砂質土中に炭を多く含み、上面にも多量の炭を検出した。西端に直径48cm、深さ15cmの柱穴があり、南端に直径20cm、深さ13cmと直径24cm、深さ11cmの柱穴が重複している。出土遺物はなく、時期も不明である。



第12図 SK1 実測図

SK14(第13図)

I-1地区の西側に位置する長円形の土坑である。規模は長軸118cm、短軸68cm、深さ12cmを測る。中央部に直径54cm、深さ8cmの小土坑があり、北東部には被熱痕のある石が散在し、埋土中に炭や焼土塊が混じる。土師器皿・坏(2・3)・鍋が出土した。時期は中世と考えられる。

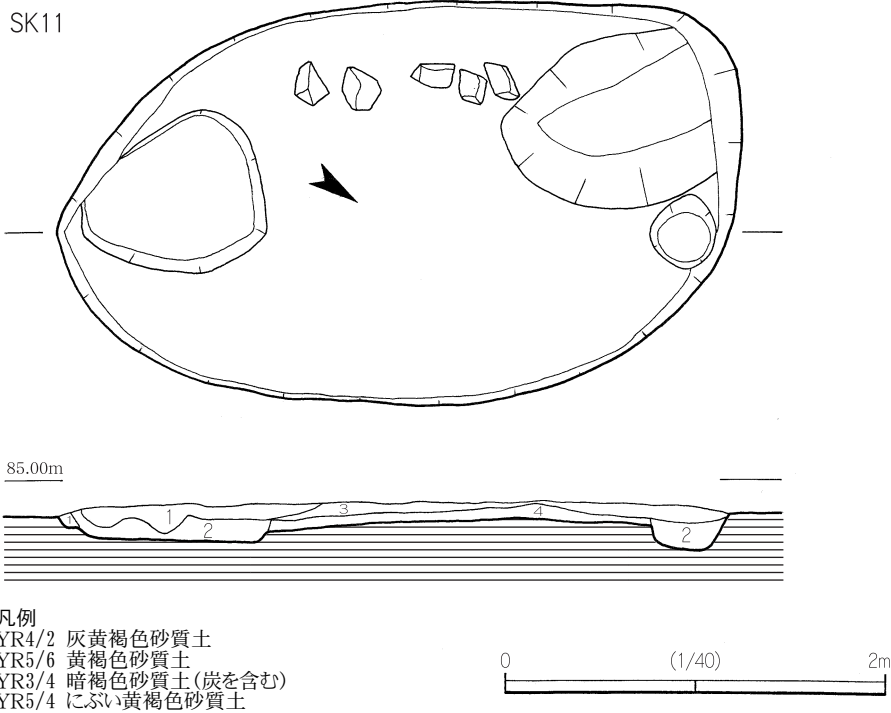
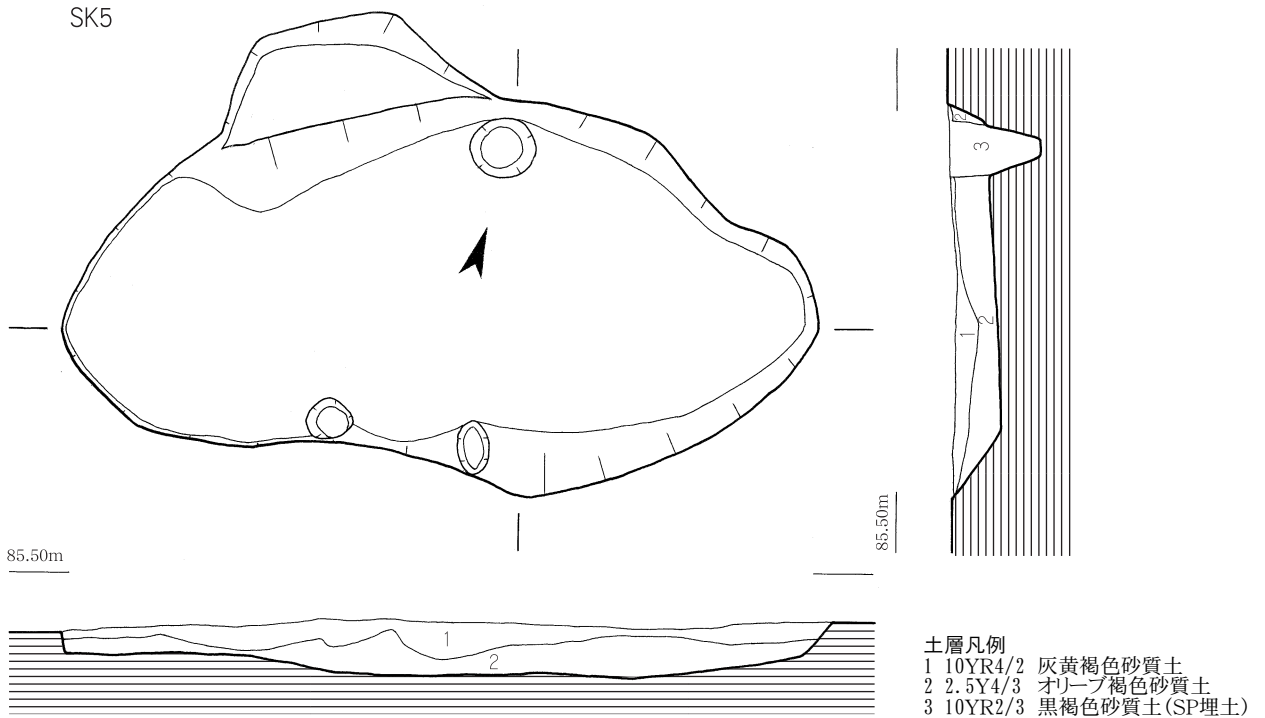


第13図 SK3・14実測図

伊領原遺跡

SK5 (第14図、図版6)

I-2地区の南西側に位置する不整形の土坑である。SB7・8・12と重複している。規模は、長軸396cm、短軸232cm、深さ30cm。北端に直径36cm、深さ30cm、南西端に直径24cm、深さ20cmの柱穴を切る。土師器鍋(7・8)が出土した。時期は、中世と考えられる。



第14図 SK5・11実測図

SK11(第14図、図版6)

Ⅱ地区の南西側に位置する長円形の土坑である。規模は、長軸360cm、短軸214cm、深さ13cmを測る。埋土上層の暗褐色砂質土中に炭を含む。また、北東端に直径36cm、深さ20cmの柱穴が重複する。土師器皿・坏(1)・鍋、瓦質土器甕、青磁、磁器紅皿(10)が出土した。時期は中世と考えられる。

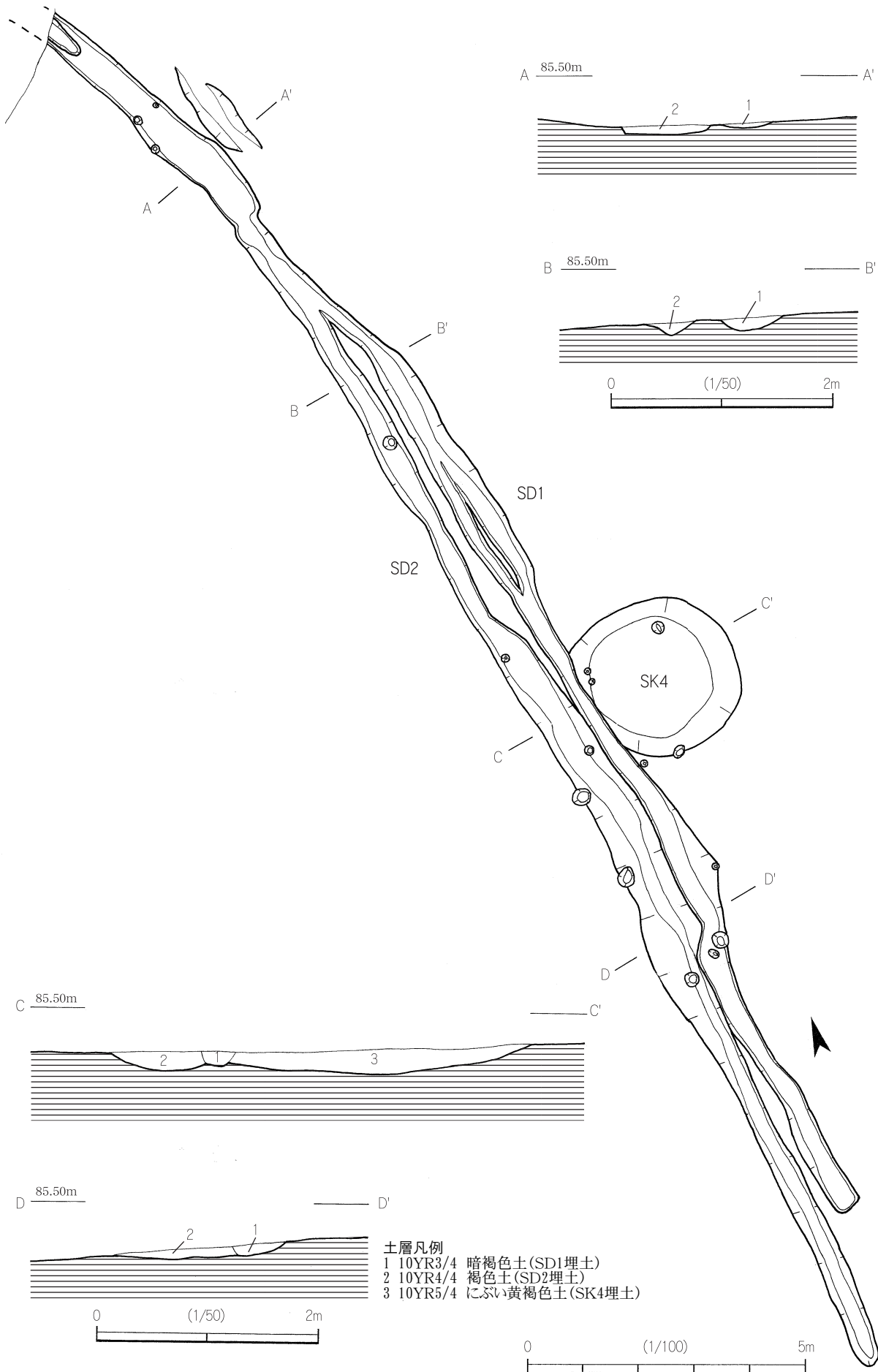
SK4(第15図、図版6)

I-2地区の西側に位置する円形の土坑である。規模は、長軸286cm、短軸268cm、深さ28cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色土の単層である。北東端に直径22cm、南端に直径24cm、西端に直径10cmの2つの柱穴が重複する。SD1に切られる。土師器皿・坏・鍋(4・5)が出土した。時期は中世と考えられる。

表2 土坑一覧表

	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
1	I-2	SK1	隅丸方形	207	99	8	土師器(皿・坏・鍋)、備前系陶器(甕?)	14~15世紀	墓(?)
2	I-2	SK2	不整形	354	138	14	土師器(鍋)、青磁(碗)	15世紀中ごろ	
3	I-2	SK3	長円形	196	150	14	なし	不明	上面に多量の炭を検出
4	I-2	SK4	円形	286	268	28	土師器(皿・坏・鍋)	14~15世紀	SD1に切られる
5	I-2	SK5	不整形	396	232	30	土師器(鍋)	14~15世紀	SB7・8・12と重複
6	Ⅱ	SK7	不整形	174	94	55	なし	不明	
7	Ⅱ	SK8	楕円	114	100	17	なし	不明	
8	I-2	SK10	長円形	126	86	28	なし	不明	
9	Ⅱ	SK11	長円形	360	214	13	土師器(皿・坏・鍋)、磁器(紅皿) 瓦質土器(甕・脚部)、青磁	15~16世紀	一部近世の混入あり
10	I-2	SK12	不整形	276	194	15	土師器(鍋)、備前系陶器	14~15世紀	
11	Ⅱ	SK13	不整形	140	104	21	金属片	不明	
12	I-1	SK14	長円形	118	68	12	土師器(皿・坏・鍋)、焼土塊	14~15世紀	
13	I-2	SK15	円形	82	72	10	土師器(鍋)、炭化物	14~15世紀	

伊領原遺跡



- 土層凡例
- 1 10YR3/4 暗褐色土(SD1埋土)
 - 2 10YR4/4 褐色土(SD2埋土)
 - 3 10YR5/4 にぶい黄褐色土(SK4埋土)

第15図 SD1・2実測図

③ 溝状遺構

今回の調査で5条の調査区外へ続く溝状遺構を検出した。遺構は、すべてI-2地区に集中し、屋敷を囲む溝の可能性がある。

SD1(第15図、図版6)

I-2地区の西側に位置し、I-2地区を南北に走る溝である。途中でSD2と重複し、SD2とSK4を切る。規模は、長さ26m、幅は最大53cm、深さ最大13cm。足鍋脚(21)が出土しており、中世の遺構と考えられる。

SD2(第15図、図版6)

SD1と並行して走る溝である。SD1に切られる。規模は長さ28.6m、幅最大103cm、深さ最大20cm。土師器坏・鍋が出土しており、中世の遺構と考えられる。

SD3(第16図、図版6)

I-2地区の中央に位置し、東西に走る溝である。SD4を切る。現存規模は長さ17.4m、幅最大58cm、深さ最大13cm。

SD4(第16図、図版6)

I-2地区の中央に位置し、SD3と並行して東西に走る溝である。SD3に切られる。現存規模は、長さ16.8m、幅最大80cm、深さ最大13cm。

④ 柱穴

今回の調査で、検出された柱穴は、I-2地区に集中している。ここでは、主なものを取り上げることにする。

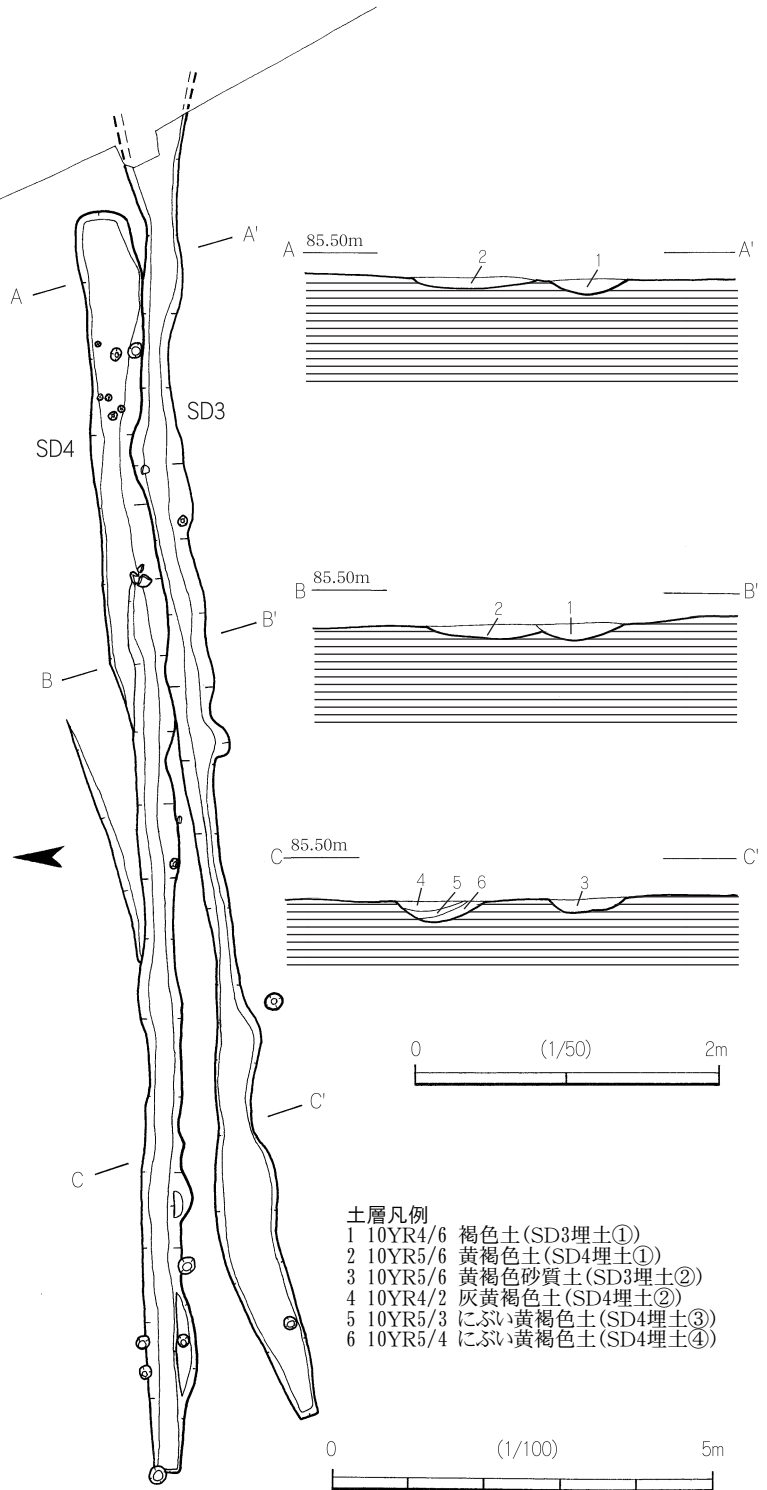
SP25(第17図、図版7)

I-2地区の西側に位置する。規模は直径35cm、深さ15cm。SP26を切る。埋土は灰黄褐砂質土の単層である。

SP26(第17図、図版7)

I-2地区の西側に位置する。規模は直径26cm、深さ33cm。SP25に切られる。埋土は灰黄褐砂質土の単層である。土師器鍋(29)が出土した。

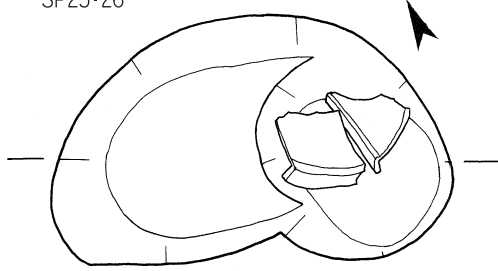
SP59(第17図)



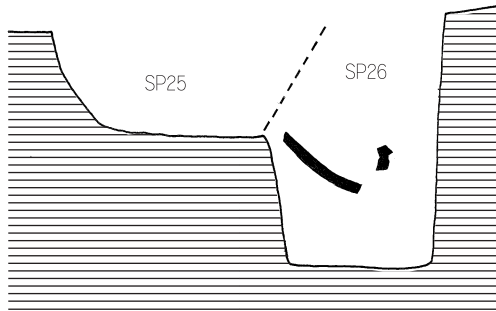
第16図 SD3・4実測図

伊領原遺跡

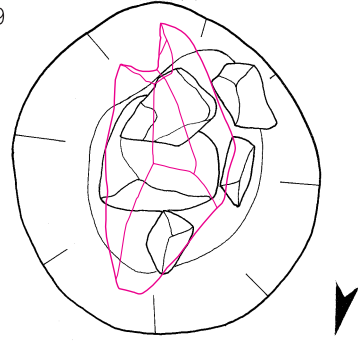
SP25・26



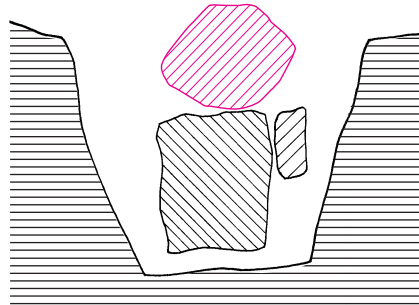
86.40m



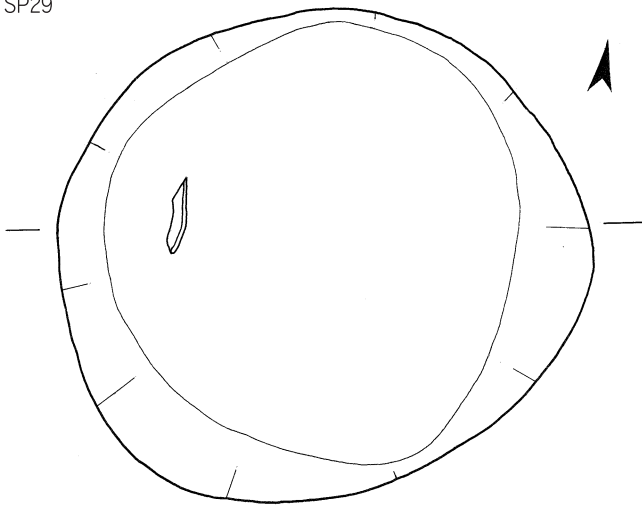
SP59



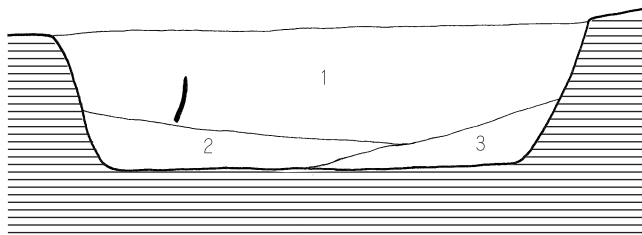
85.30m



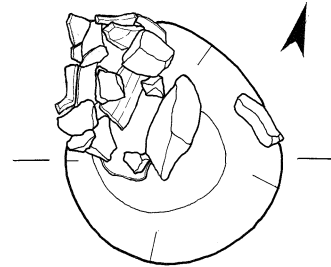
SP29



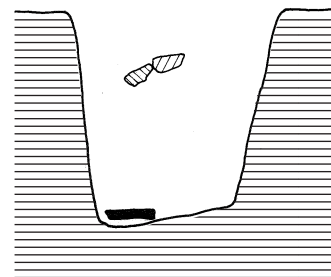
85.40m



SP60



85.30m



- 土層凡例
 1 2.5Y4/2 暗灰黄色弱粘質土(炭を含む)
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土
 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色弱粘質土

0 (1/10) 50cm

第17図 SP25・26・59・29・60実測図

I-2地区の西側に位置する。規模は直径44cm、深さ32cm。埋土は褐灰色弱粘質土の単層で、炭を多く含む。柱穴内の石は、地盤の弱い土壌を補う為に柱の根石とした可能性もある。

SP29(第17図、図版7)

I-2地区の中央に位置する。規模は直径70cm、深さ1.9cm。陶器の碗(28)が出土した。暗灰黄色弱粘質土の下位に炭が多く含まれる。時期は近世と思われる。

SP60(第17図、図版8)

I-1地区の東側に位置する。規模は直径28cm、深さ28cm。埋土は灰黄褐色土の単層である。土師器鍋(31・32・33)が出土した。

⑤ 不明遺構

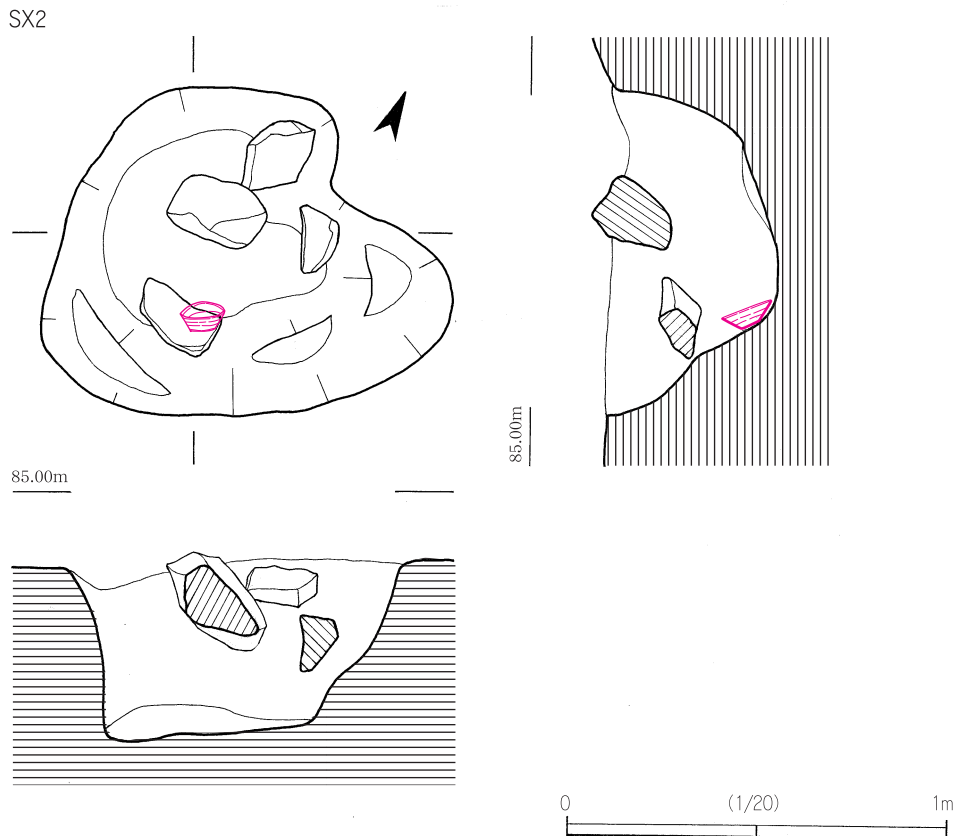
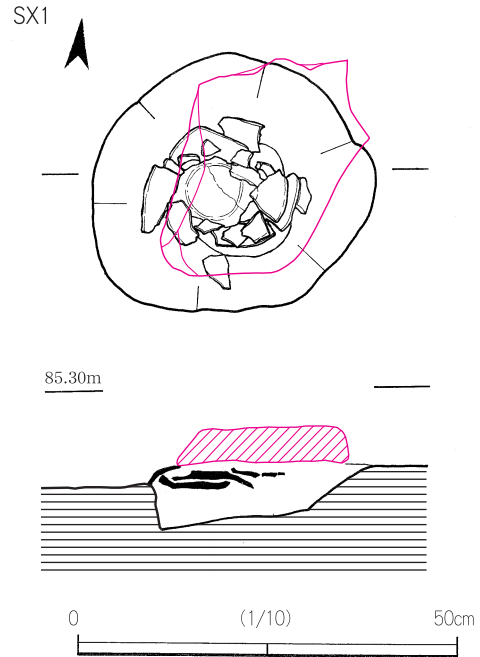
不明遺構としたものは、遺構の性格を特定できないもので、調査区内では2基確認された。

SX1(第18図、図版9)

I-1地区とI-2地区の境界付近に位置する。規模は直径37cm、深さ9cm。埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。平らな石の下から、土師器坏(34・35)が合わさった形で出土した。

SX2(第18図、図版9)

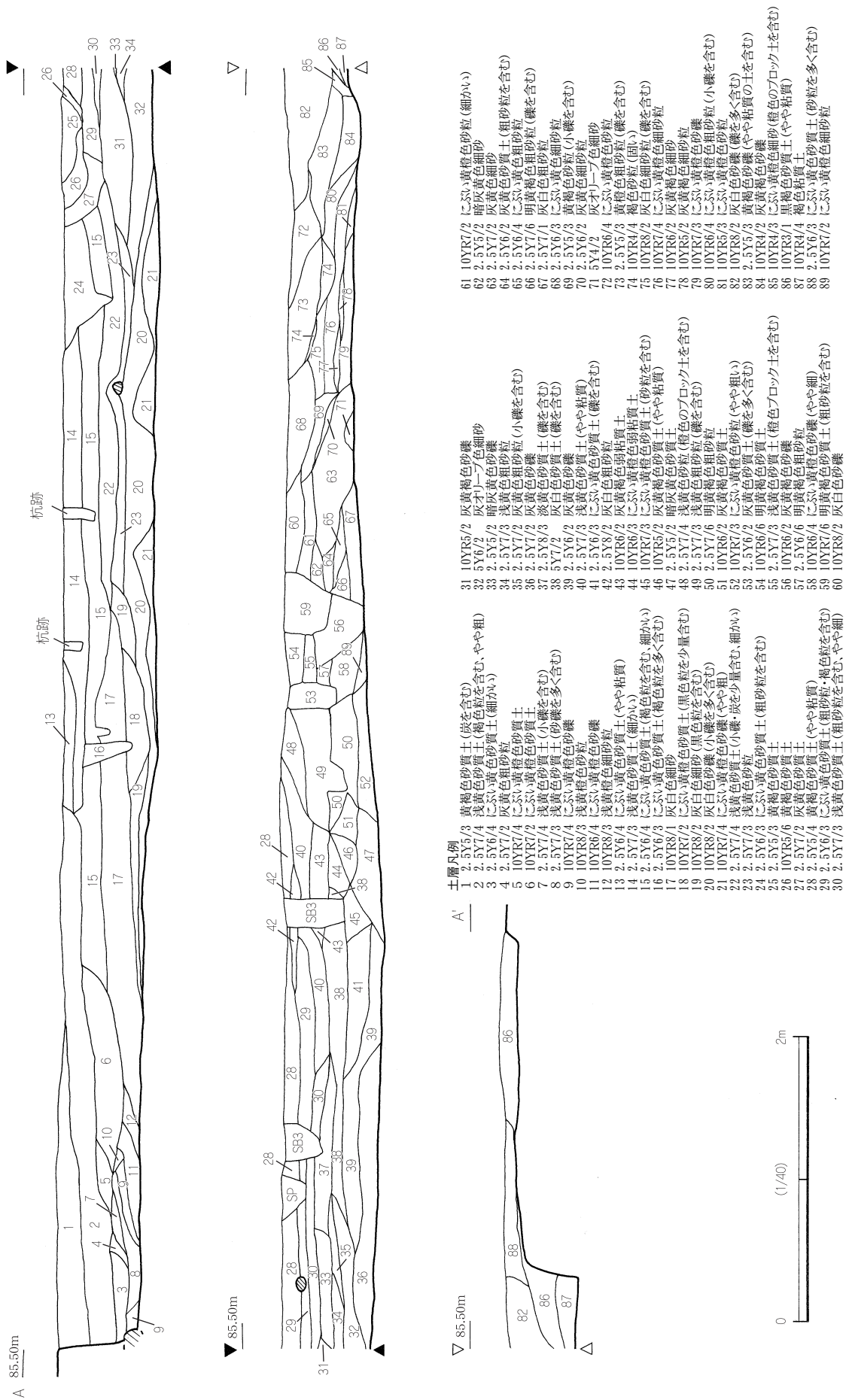
II地区に位置する。規模は直径88cm、深さ46cm。埋土は暗灰黄色砂質土の単層である。被熱痕のある石の下に、土坑底面に据えられた土師器坏(36)が出土した。



第18図 SX1・2実測図

伊領原遺跡

流路跡トレンチ 西壁



第19図 流路跡土層断面図

(2) 遺物

調査の結果、伊領原遺跡からは縄文土器、須恵器、土師器、瓦質土器、輸入磁器（青磁）、国産陶磁器、石製品（石鏃・石匙）、金属製品（鉄釘・煙管）等が出土した。中世の遺物が大半を占め、器種は土師器が中心であり、瓦質土器・輸入磁器は非常に少ない。

①土坑(SK)出土遺物(第20図、図版10)

1はSK11から出土した土師器坏である。やや厚手で、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面とも回転ナデ。2・3はSK14出土の土師器坏である。口縁部はやや外反し端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。4～9は土師器の鍋で、4・5はSK4、6はSK12、7・8はSK5、9はSK2から出土した。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は外折する。内外面とも回転ナデ。10はSK11出土の肥前磁器の紅皿である。外面は貝殻状の型押し成型で、内面および口縁端部に施釉する。SK11は中世の遺構であり、近世の混入品と思われる。11はSK2出土の青磁碗である。龍泉窯系青磁碗で外面には細描蓮弁文が施文される。

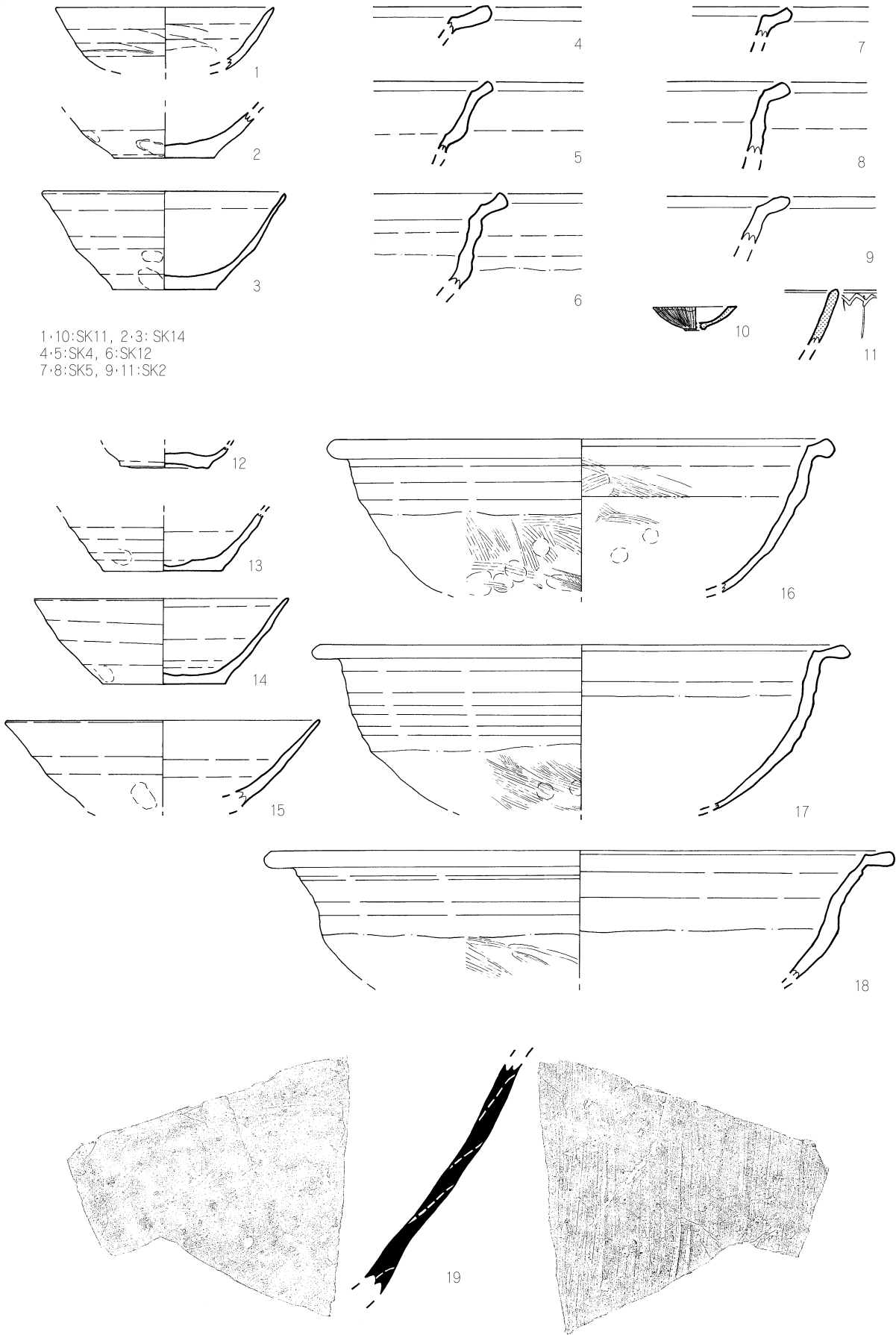
12～19はSK1出土遺物で、出土状況から一括性は高い。12は土師器皿で、底部外面は粗い回転糸切り痕が残る。13～15は土師器坏である。14はほぼ完形に近く、口径13.3cm・底径6.3cm・器高4.6cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。色調はにぶい黄橙色を呈する。16～18は土師器の鍋である。底部は半球状を呈し、口縁部は外折する。調整は底部外面がハケ目、底部内面はナデで体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデである。外面には煤が付着する。19は備前系の陶器で甕の胴部片と思われる。粘土帯の接合痕が顕著であり、調整は外面がヘラ状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のナデ。焼成は堅く締り、色調は灰色を呈する。

②溝(SD)・柱穴(SP)出土遺物(第21図、図版10～12)

20～22はSD出土遺物で、20・22はSD2、21はSD1から出土した。20は土師器の鍋で、底部外面は指頭痕が顕著である。21は瓦質土器の足鍋の脚部である。獣脚を呈し、指オサエにより成形する。22は土師器坏である。口縁端部は丸くおさめる。器壁はやや厚い。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り後板目圧痕が残る。

23～33はSP出土の遺物である。23はSP53出土の土師器の鍋である。外面には多量の煤が付着する。24はSP37出土の土師器皿である。底部外面は回転糸切り後ナデ。色調は橙色を呈し、胎土中に石英および黒雲母片を多く含む。25はSP3(SB6)出土の土師器坏で、底部外面は回転糸切り。26はSP1出土、27はSP4出土の土師器坏である。底部外面は回転糸切り。色調はにぶい橙色を呈するが、27の外面はやや黒褐色に近い。28はSP29出土の陶器の碗である。体部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面とも施釉する。29～33は土師器の鍋で、29はSP26(SB13)、30はSP15より出土した。31～33はSP60から出土しており、出土状況から一括性は高い。底部は半球状を呈し、体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は外折する。やや底部が深めで器形が「U」字形に近いもの(29・32)と体部が短めで器形が半球形に近いもの(31・33)が見られる。また29は内面屈曲部下に1条の沈線が巡り、31は口縁部がやや鏝状を呈し、上方へ湾曲する。調整は底部外面がハケ目、底部内面はハケ目またはナデ、体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデである。31の底部は内外面とも指

伊領原遺跡

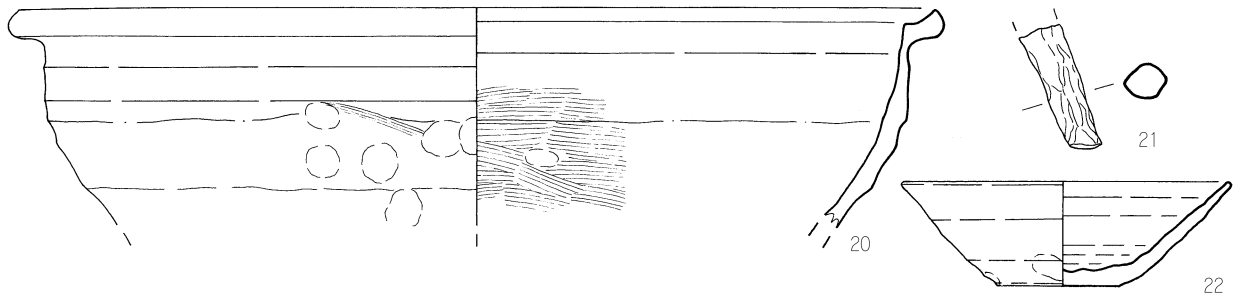


1・10:SK11, 2・3: SK14
 4・5:SK4, 6:SK12
 7・8:SK5, 9・11:SK2

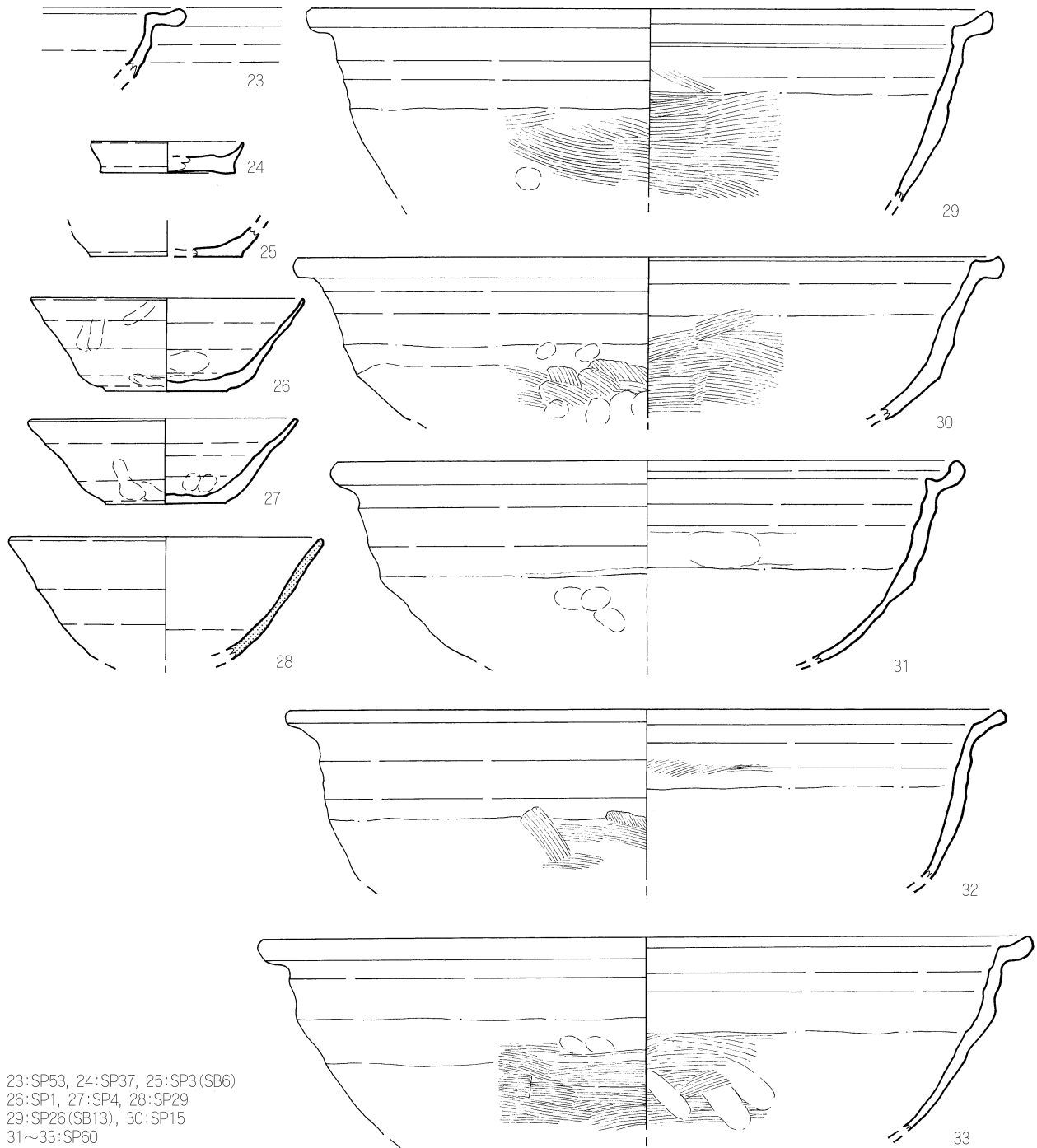
12~19:SK1

0 (1/3) 10cm

第20図 出土土器実測図①



20・22:SD2
21:SD1

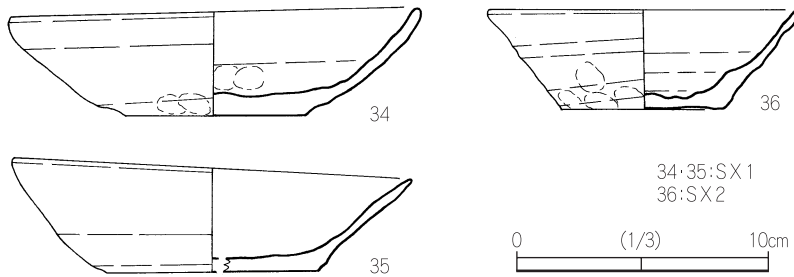


23:SP53, 24:SP37, 25:SP3(SB6)
26:SP1, 27:SP4, 28:SP29
29:SP26(SB13), 30:SP15
31~33:SP60

0 (1/3) 10cm

第21図 出土土器実測図②

伊領原遺跡



第22図 出土土器実測図③

頭痕が顕著である。

外面にはいずれも多量の煤が付着する。

③用途不明遺構(SX)

出土遺物(第22図、図版12)

34・35はSX1出土の土師器坏で、合わせ口の状況で

出土した(第18図参照)。34は口径15.8cm・底径7.0cm・器高4.2cm、35は口径15.4cm・底径8.3cm・器高4.5cmを測り、ともにほぼ完形である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめるが、一部面取りが見られる。器壁は厚い。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。胎土中には3mm大の長石を少量含む。色調は34はにぶい黄橙色、35は浅黄橙色を呈し、34の内外面には煤および炭化物の付着が見られる。36はSX2出土の完形の土師器坏である。口径12.0cm・底径6.3cm・器高3.9cmを測る。体部は若干外反気味に立ち上がり、口縁端部は一部面取りが見られる。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。口縁部は歪んでおり、全体的にロクロ目が顕著に残る。色調は灰黄褐色を呈する。胎土は赤色粒および雲母片を含む。

④ I-1 地区遺物包含層出土遺物(第23図、図版11・12)

37～48はI-1地区流路跡上層の遺物包含層から出土した。37・38は土師器皿である。底部内面はロクロ目が顕著で、内面の底部と体部の境は凹む。底部外面は板目圧痕がある。色調はやや浅黄橙に近いにぶい橙色を呈し、胎土は若干細砂粒を含むが精良である。39～41は土師器坏である。40は口縁部は外反し、端部は一部面取り。調整はいずれも内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。39は板目圧痕がある。39・40の外面には全体的に煤が付着する。42～48は土師器の鍋である。口縁部や器形に若干の違いが見られ、43～45は口縁部がやや鏝状を呈し、上方へ湾曲する。また47・48は口縁部が短く、器形は半球形に近い。調整は底部外面がハケ目、底部内面はハケ目またはナデで、体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデである。外面には多量の煤が付着する。

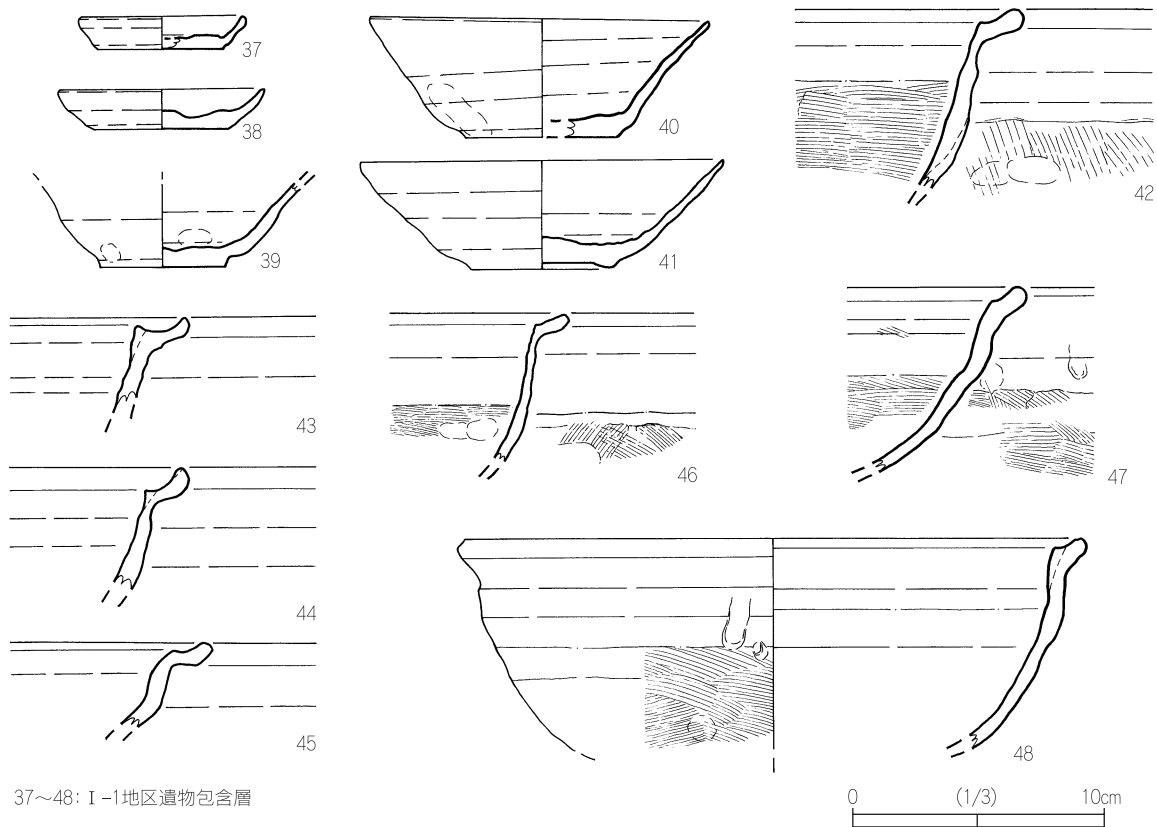
⑤遺構検出時出土遺物(第24・25図、図版13・14)

49～58はI-1地区遺構検出時出土遺物である。49～52は土師器皿である。49～51は体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面とも回転ナデで、49・50は内底面を指頭により整形し、やや平坦にする。底部外面は回転糸切りで、49・51は板目圧痕がある。50は内外面に煤が付着する。52は口縁部がやや外反し、端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデで、底部外面は回転糸切り。色調は灰白色に近い浅黄橙色を呈し、胎土は非常に精良である。53は土師器坏でTR11から出土した。体部は外反して立ち上がり、口縁端部は面取りを行う。内外面とも回転ナデで、体部外面はロクロ目が顕著に残る。底部外面は回転糸切り。色調は明褐灰色を呈し、胎土は雲母片を多く含むが精良である。54～56は土師器の鍋である。体部は外反して立ち上がり、口縁部は外折する。54・55は口縁部が上方へ湾曲する。57は青磁の碗である。龍泉窯系青磁碗で口縁部外面には雷文帯を持つ。雷文帯の下部にも線描の施文が見られるが、破片につき詳細は不明である。58は備前系の陶器で甕の底部片である。接合痕が顕著に残る。調整は内外面ともヘラ状工具によるナデで、外面は縦方向、内面

は横方向のナデである。底部外面はヘラ状工具による不整方向のナデが見られる。焼成は堅く締り、色調は灰色を呈する。

59～77はI-2地区遺構検出時出土遺物である。59は土師器皿で、底部外面は内面からの指オサエにより板目圧痕が強く残る。60～63は土師器杯である。60は口縁部は大きく外反し、端部は尖る。内外面とも回転ナデ。色調は浅黄橙色を呈する。61は体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。内外面とも回転ナデで、ロクロ目が顕著に残る。底部外面は回転糸切り。64は瓦質土器の鍋の口縁部片である。65は瓦質土器の播鉢で、口縁端部はやや拡張し平坦面をなす。内面には残存4条の卸目を施す。調整は外面がナデ、内面は横方向のハケ目である。66は瓦質土器の捏鉢と思われる。平底で体部は外反して立ち上がる。外面には指頭痕が顕著に残る。67は土師器の捏鉢と思われる。口縁端部内面は肥厚する。68は瓦質土器の火入れと思われる。調整は外面が縦方向のミガキ、内面は横方向のナデである。69～76は土師器の鍋である。底部は半球状を呈し、口縁部は外折する。口縁部や器形に若干違いが見られ、69は口縁部が短く、器形も半球形に近い。71・72は口縁部が上方へ湾曲する。73・75は口縁部が上方へやや湾曲し、端部は肥厚する。調整は底部外面がハケ目、底部内面はハケ目またはナデで、体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデである。73は底部内外面に指頭痕が顕著に残る。外面には多量の煤が付着する。77は備前系の陶器で甕の口縁部片である。口縁端部は玉縁をなす。焼成は堅く締り、色調は灰色を呈する。

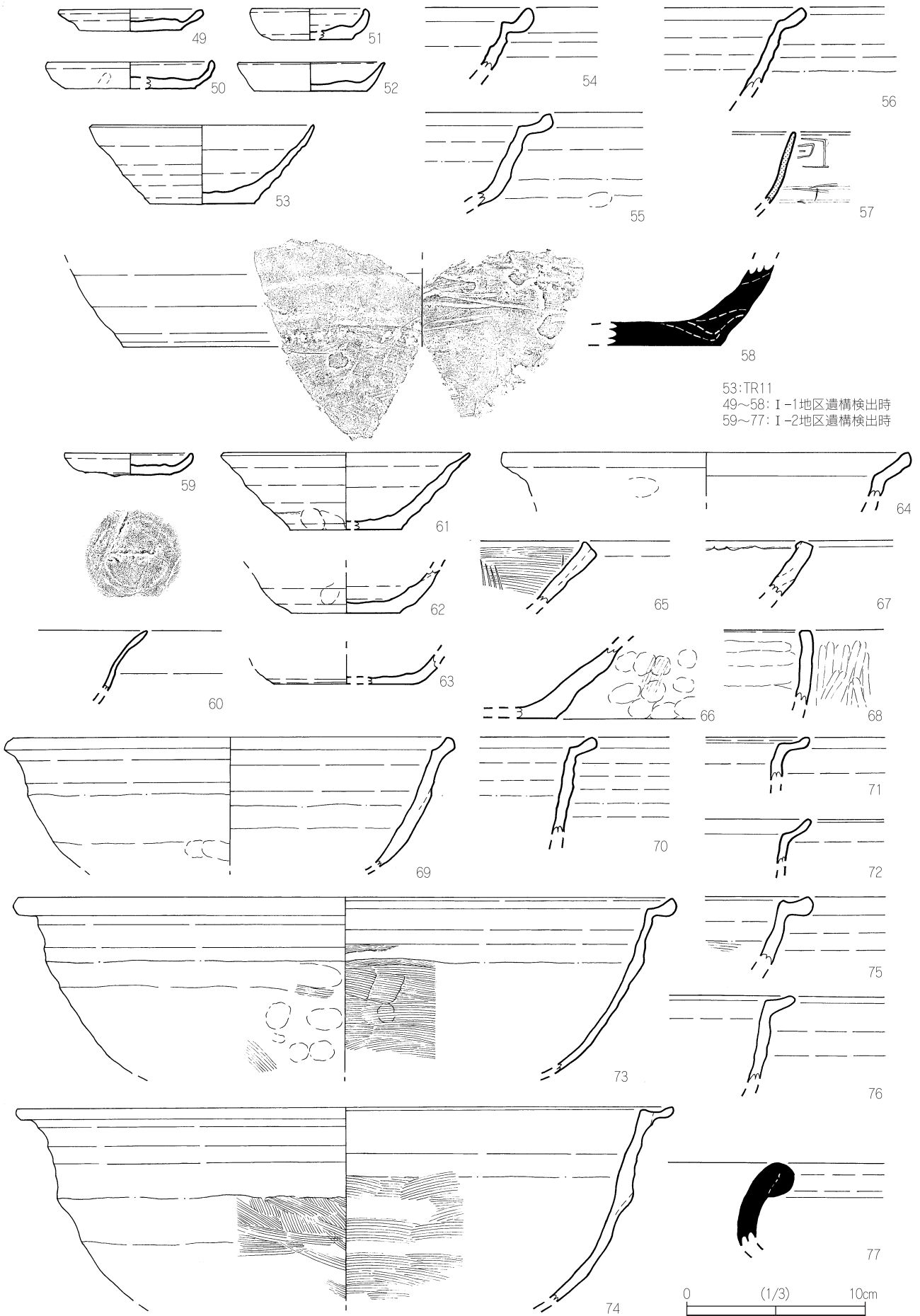
78～83はII地区遺構検出時出土遺物である。78は土師器の甕の胴部片である。口縁部との境は屈曲する。調整は内外面ともハケ目で、器壁は薄い。色調は橙色を呈する。79は土師器の高杯の脚部片である。80・81は須恵器の坏身で同一個体の可能性がある。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖



37～48: I-1地区遺物包含層

第23図 出土土器実測図④

伊領原遺跡



53:TR11
 49~58: I-1地区遺構検出時
 59~77: I-2地区遺構検出時

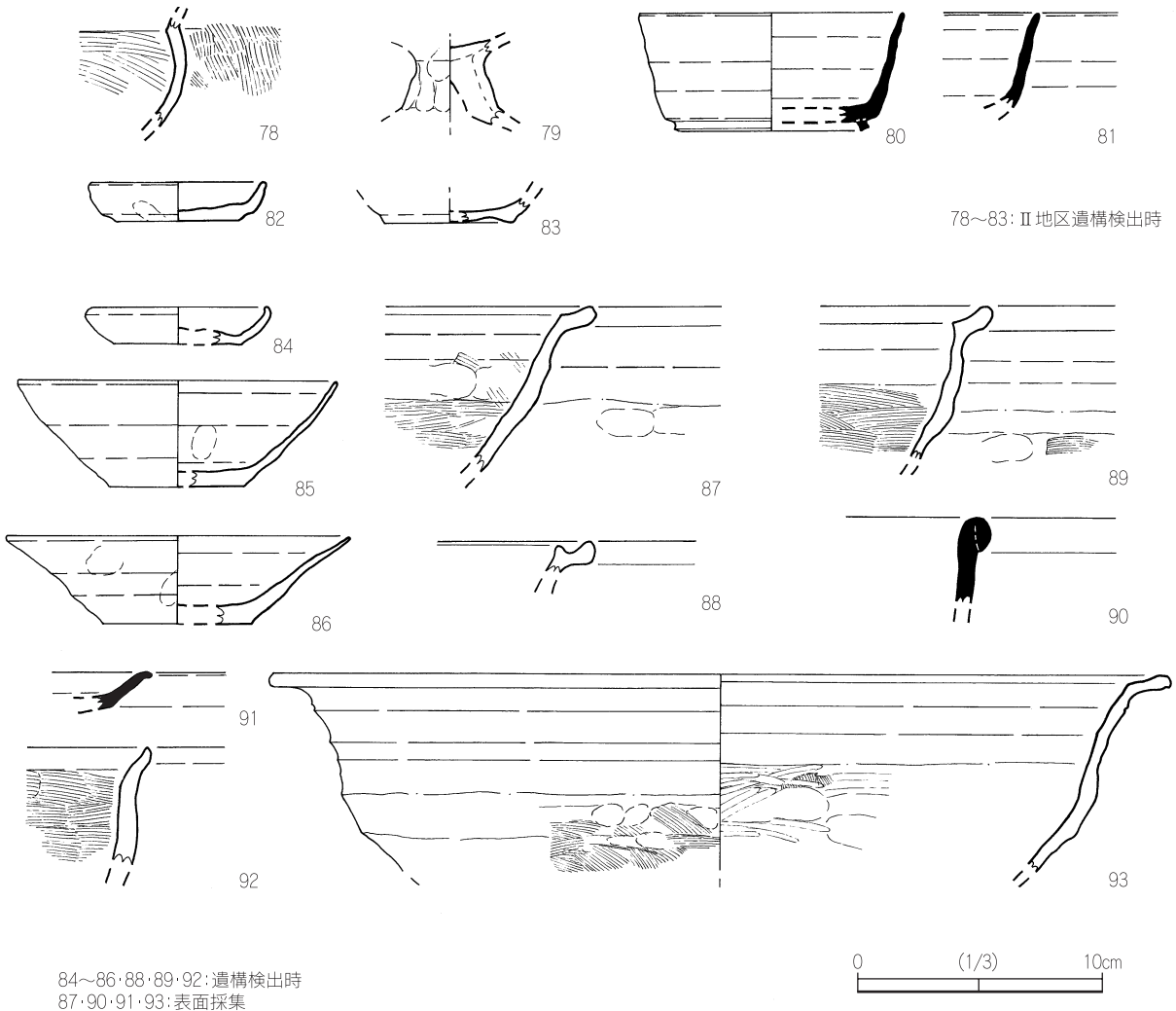
第24図 出土土器実測図⑤

る。底部外面には断面台形の高台を貼り付ける。調整は内外面とも回転ナデ。色調は灰色を呈する。82は土師器皿である。内外面とも回転ナデ、底部外面は回転糸切り。底部内面は指ナデ。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。83は土師器杯の底部片と思われ、底部外面は回転糸切り。

84~93は出土地区不明および表面採集の遺物である。84は土師器皿である。内外面とも回転ナデ、底部外面は板目圧痕がある。85・86は土師器杯である。86は体部は外反し、口縁端部は尖る。内外面とも回転ナデ、底部外面は回転糸切り。87~89は土師器の鍋である。底部の内外面には指頭圧痕が顕著である。90は備前系の陶器の壺で、口縁端部は玉縁をなす。色調は黒褐色を呈し、外面には自然釉が付着する。91は須恵器の皿と思われる。口縁端部は外反する。焼成は悪く、外面の色調は灰黄色を呈する。92は瓦質土器の鍋である。口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめる。外面は摩滅により調整不明、内面は横方向のハケ目。93は土師器の鍋である。底部は半球状を呈し、体部はやや外反して立ち上がり、口縁部は外折する。調整は底部外面がハケ目、底部内面はナデ、体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデ。

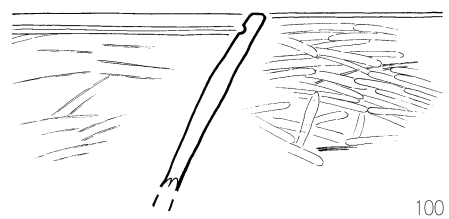
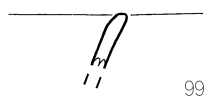
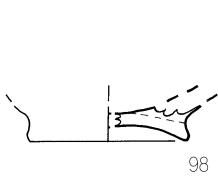
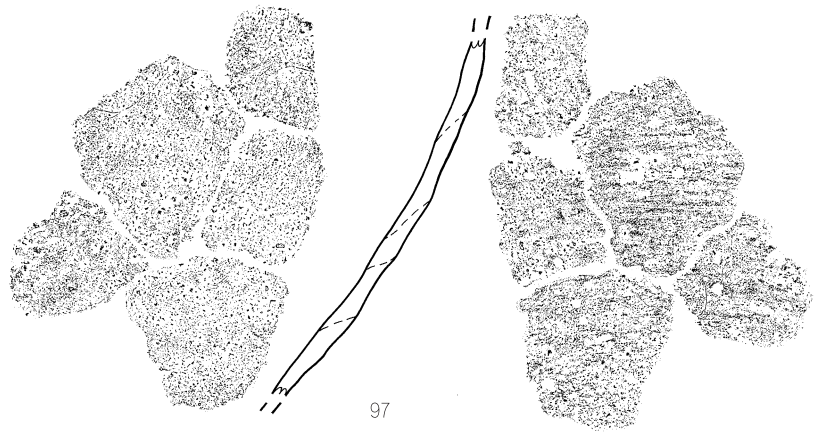
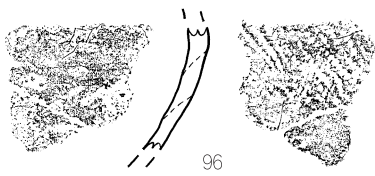
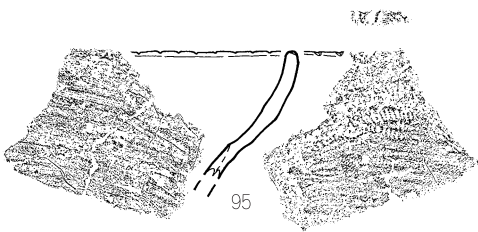
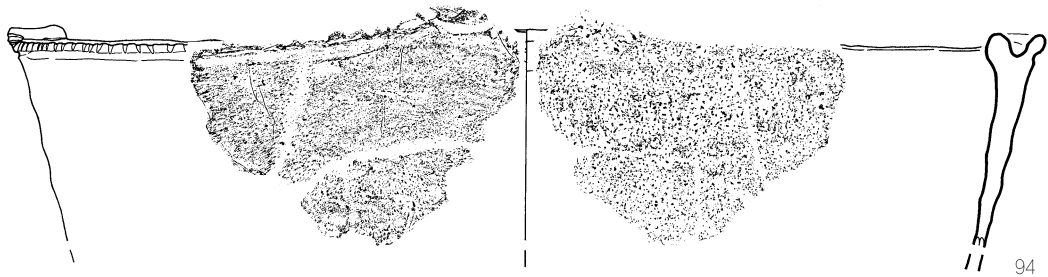
⑥ I - 2 地区縄文遺物包含層出土遺物(第26図、図版15)

94~100は I - 2 地区の縄文遺物包含層から出土した縄文土器である。94~99は深鉢、100は浅鉢でいずれも粗製土器である。94は粗製深鉢の口縁部で波状口縁をなす。波頂部は肥厚し、三角錐状の刺突文を施文する。接合しない同一個体の口縁部片が複数有り、残存状況から波頂部は4ヵ所と推定で



84~86・88・89・92: 遺構検出時
87・90・91・93: 表面採集

第25図 出土土器実測図⑥

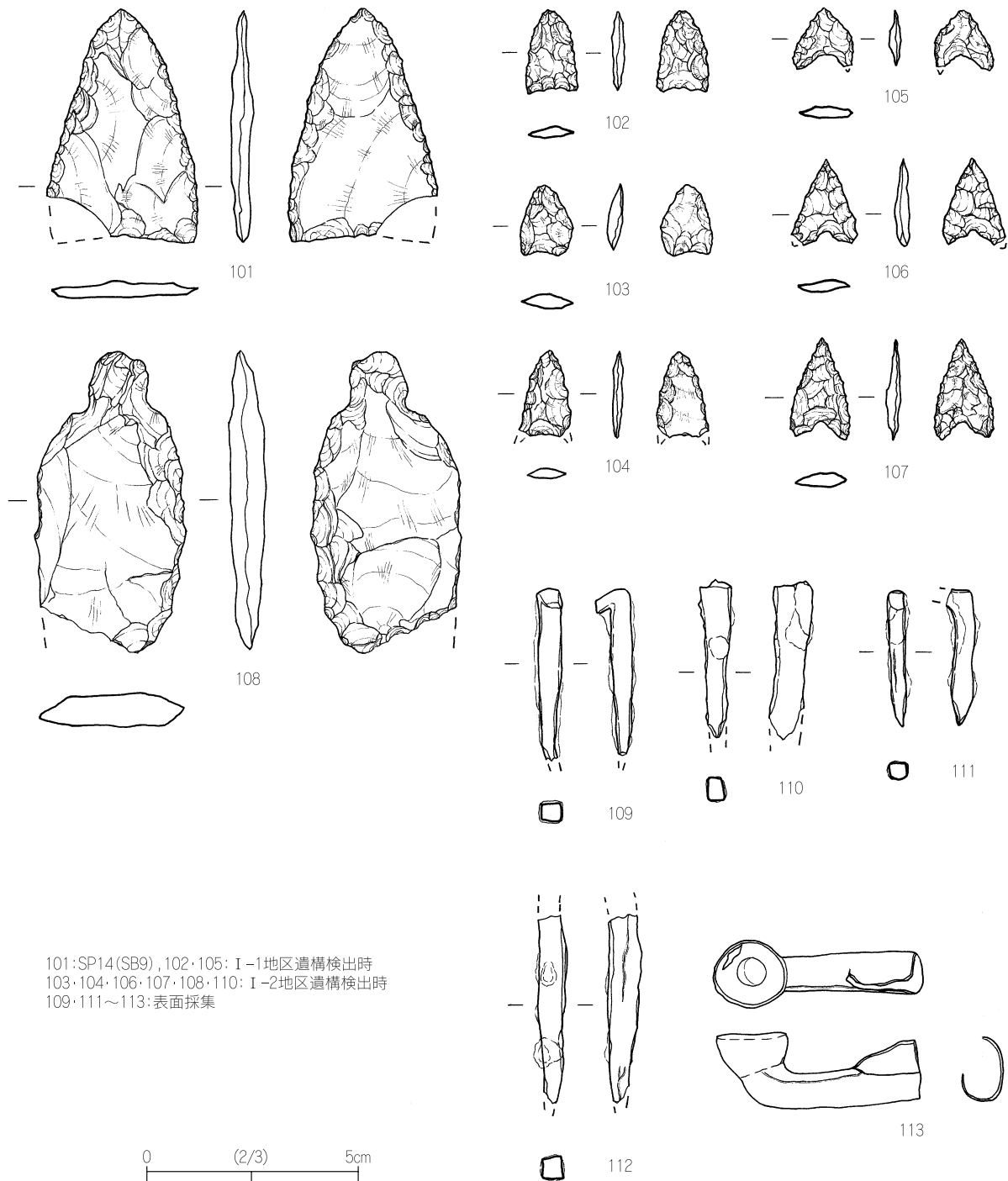


94~100: I-2地区縄文遺物包含層

0 (1/3) 10cm

第26図 出土土器実測図⑦

き、波頂部間には渦巻状の内文が施文される。口唇部には1条の沈線が巡り、波頂部および内文間をつなぐ。口縁端部外面は突帯状の肥厚帯を持ち、刻目が一巡する。調整は内外面とも巻貝条痕である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英・長石を多量に含む。95は粗製深鉢で胴部は外反して立ち上がり、口縁部は内湾する。口唇部は刻目を施す。口縁部外面は巻貝押圧による擬似縄文が見られる。調整は内外面とも巻貝条痕で、内外面の一部に煤または炭化物の付着が見られる。96は粗製深鉢の肩部片で、外面上半には擬似縄文による文様帯がある。調整は内外面とも巻貝条痕。97は粗製深鉢の胴部片で、接合痕が顕著である。調整は外面が巻貝条痕、内面はナデ。98は粗製土器の底部片で、浅めの上げ底を呈する。99は粗製深鉢の口縁部片と思われる。平口縁で、調整は内外面とも横ナデ。色調



第27図 出土石製品・金属製品実測図

伊領原遺跡

は外面が浅黄色、内面は灰黄褐色を呈する。100は粗製浅鉢である。口縁部は外反し、端部は面取りを行う。口縁端部内面には1条の沈線が巡る。調整は内外面ともミガキで、摩滅が激しい。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は橙色を呈する。

⑦石製品・金属製品(第27図、図版16)

101～107は石鏃で、いずれも凹基無茎式の打製石鏃である。101はSP14 (SB9) 出土で、最大長5.4 cmを測り、大型である。周縁部は細かい調整を行い、刃部を形成している。102～104は抉りが浅めで、103の形状はやや丸みをもつ。103・104は全体的に摩滅している。105～107は抉りが深い。105は長さが短く、正三角形に近い形状を持つ。108は縦型の石匙である。先端部は欠損する。向かって右側面は両面から細かい調整を行い、刃部を形成する。

109～112は鉄釘である。いずれも断面形は長方形を呈する。109・111の頭部は「L」字状に屈曲し、112の頭部は平坦である。113は煙管の雁首である。側面に接合痕が見られる。

表3 石製品観察一覧表

BN	挿図番号 図版番号	出土地点	器種	石質	完 未	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
101	第27図-101 図版16-101	SP14 (SB9)	打製石鏃	安山岩	完	5.4	3.5	0.5	8.5	大型の凹基無茎式の打製石鏃。基部の一部を欠損。
102	第27図-102 図版16-102	I-1地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	1.9	1.2	0.3	0.7	凹基無茎式の打製石鏃。
103	第27図-103 図版16-103	I-2地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	1.7	1.2	0.4	0.6	凹基無茎式の打製石鏃。全体的に磨滅している。
104	第27図-104 図版16-104	I-2地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	(2.0)	(1.2)	0.2	0.4	凹基無茎式の打製石鏃。基部の一部を欠損。
105	第27図-105 図版16-105	I-1地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	1.4	1.4	0.3	0.3	凹基無茎式の打製石鏃。抉りが深い。基部の一部を欠損。全体的に磨滅。
106	第27図-106 図版16-106	I-2地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	(2.0)	(1.5)	0.4	0.6	凹基無茎式の打製石鏃。基部の一部を欠損。
106 -2	— —	I-2地区遺構検出時	剥片	安山岩	—	2.0	1.2	0.2	0.5	
107	第27図-107 図版16-107	I-2地区遺構検出時	打製石鏃	安山岩	完	2.4	1.5	0.4	0.7	凹基無茎式の打製石鏃。抉りが深い。
108	第27図-108 図版16-108	I-2地区遺構検出時	石匙	安山岩?	完	(7.1)	3.5	0.8	21.1	縦型の石匙。刃部を欠損。
114	— —	SD5	剥片	安山岩?	—	3.9	1.2	0.6	2.4	
115	— —	SP48 (SB15)	剥片	安山岩?	—	1.8	1.8	0.2	0.8	
116	— —	I-1地区遺物包含層	剥片	安山岩	—	—	—	—	1.1	剥片2点。一部刃部状の剥離面有り。
117	— —	I-2地区遺構検出時	石材	水晶	—	1.9	1.0	0.8	1.7	
118	— —	I-2地区遺構検出時	剥片	安山岩	—	—	—	—	9.7	剥片8点
119	— —	遺構検出時	剥片?	水晶	—	1.7	1.4	1.0	2.1	一部自然面が残る。
120	— —	I-1地区トレンチ2	火打石	チャート	—	1.3	0.9	0.6	0.9	
121	— —	表面採集	石材	水晶	—	3.0	2.7	1.0	13.8	一部剥離面有り。
122	— —	I-2地区遺構検出時	石材	泥質片岩	—	7.9	7.0	0.8		上下端に打ち欠きらしき痕跡有り。

3 まとめ

発掘調査の結果、掘立柱建物17棟、土坑13基（うち1基は土坑墓と推定される）、溝状遺構5条、柱穴多数等の遺構が検出された。遺物では、縄文土器、須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器、石製品（石匙、石鏃）、金属製品（釘、煙管）などが出土した。遺構の時期としては、出土遺物等から14～15世紀頃と考えられ、17棟の掘立柱建物群を溝が囲むようにしていることから、中世に営まれた屋敷地を構成する集落跡と推定することができる。

伊領原遺跡を特徴づける17棟の掘立柱建物は、I-1地区にまたがるものを含めて、ほとんどがI-2地区に集中している。建物の規模は1×1間、2×1間、2×2間の小規模なものが多いが、3×2間のSB1は比較的規模も大きく、南面に庇を付設していることから、建物群の中では中心的な役割を果たしていたのではないかと考えられる。配置状況から、重複していたと思われる建物も数棟あり、ほぼ同一地に複数期にわたって建て替えが行われていたと思われる。

なお、I-2地区の掘立柱建物跡群を取り囲む形で南北と東西に二本ずつ溝が走っている。南北に走る溝SD1とSD2はほぼ並行して走っており、途中でSD1がSD2とSK4を切る形になっている。同じように、東西を走る溝SD3とSD4はほぼ並行して走っており、途中でSD3がSD4を切っている。これら南北と東西の溝が直行する形で走っており、内側に建物群が集中していることから、建物群と外部を画する溝であった可能性が考えられる。

さらに、SB1の北側からは、土壌分析の結果、墓の可能性が高い土坑SK1が検出されている。土坑内からは土師器の皿、坏、鍋などが出土している。建物を構成している柱穴や、建物群を取り囲んでいる溝からも中世の遺物が出土していることから、中世の一時期に溝で囲まれた区画内に建物と墓が営まれており、断定することはできないが中世集落の要素を備えた屋敷地であったとみなすことができる。県内各地でも山口市堂道遺跡、防府市下右田遺跡、下関市豊浦町船頭遺跡等で類例が確認されているが、近隣では、昨年度調査を行った柳井市日積の尾崎原遺跡でも同じような要素を備えた屋敷地跡が確認されている。

したがって、少なくとも今回調査を行った伊陸低地と伊陸低地の周辺部に発達している伊陸丘陵、あるいは昨年度調査を行った日積丘陵のある柳井市の内陸部においては、立地条件の違いは見られるものの、中世においていくつかの単位の集落が存在し、人々が継続的に生活を営んでいたことをうかがわせる。

そのほかの特徴的な遺構として、I-1地区のSX1とII地区のSX2がある。SX1は、2枚の土師器の坏の口縁部を合わせるようにして据えられ、その上に石で蓋をしたような状況で検出されている。SX2は、被熱痕のある石の下から、ほぼ完形の土師器が据えられたような状況で検出されている。いずれの遺構も用途は不明であるが、意図的に遺物が埋められた状態で検出されていることから、埋納（祭祀）遺構のひとつではないかと考えられる。具体的には、敷地の安堵や地鎮のための土地や家屋への祭祀が目的ではないかと思われる。また、SX1については、江戸時代以降多数検出される「胞衣や臍の緒を納めて人通りの多いところに埋めると子供が立派に成長する」という胞衣埋納遺構とも考えられる。出産・育児への祭祀は普遍的なものであるとすると、中世における事例のひとつとしてその可能性も考えられるのではなかろうか。

伊領原遺跡

また、SD4の北側からは縄文後期の土器片が出土している。遺構は確認できなかったが、流れ込みか、あるいは客土による包含層を形成しており、周辺に縄文時代後期の遺跡が存在している可能性が考えられる。

さらに、調査区を東西に横断している2本の流路跡であるが、中世の遺構が流路に掘り込まれる状況で検出されていることから、中世以前に四割川の支流である舞谷川の氾濫によって形成された砂礫堆積層が旧流路ではないかと思われる。北側の流路の両岸は遺構面と判断した黒色の砂質土が広がっており、火山灰土の可能性もあると考えられたが、分析の結果、周囲の碎屑物が堆積したものであるとの結果が報告された。また、南側の流路跡の東部では、砂礫堆積層の上に10～20cm程度の砂質土が堆積しており、中世の土師器片が多数出土した。

遺物に関しては、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外側に折れ、内面はナデ、外面は回転ナデ後中位から底部までハケ目の調整が施されている土師器の鍋が出土している。このような特徴をもった土師器鍋は山口県東部でみられ、近隣の遺跡では先述した尾崎原遺跡、向田遺跡（柳井市伊保庄）、冷泉家北遺跡（玖珂郡周東町祖生）等から類似した遺物が出土している。

そのほか注目される遺物として、備前系陶器（19・58・77・90）が出土している。77・90は、口縁部にあたり、玉縁状に折り返していることから、14世紀に相当するもの⁽¹⁾と考えられる。伊領原遺跡のある柳井市伊陸や周東町祖生にまたがる氷室岳周辺には、備前焼に酷似する「嶽山壺」とよばれるやきものが分布しており、備前系陶器との関連等今後詳しく調査していく必要があるであろう。また、青磁椀（11、57）も出土しており、広範囲で流通したと確認されている青磁等の輸入磁器が柳井市の内陸部にも持ち込まれていたと考えられる。

遺物全体を通してみると、中世の土師器は鍋、坏、皿を中心に出土している。特に鍋は山口県東部にみられる特徴を示しており、当該集落で生活を営んでいた集団の性格や社会情勢を、遺物からも知る手がかりにつながるであろう。

今回の発掘調査は、これまで本格的な調査が行われていなかった伊陸盆地の歴史を解明する上で、貴重な資料を提供することとなった。今後、発掘調査が進み、調査事例の少ない柳井市内陸部における中世史の全貌や特性が明らかになるものと期待したい。

註

- (1) 伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登「中世陶器の物流－備前焼を中心にして－」（『日本考古学協会 2004年度広島大会研究発表資料集』2004年）による備前焼分類試案のⅢA期にあたる。

IV 木焼遺跡

1 調査の方法と経過

木焼遺跡は、伊陸低地の周辺に発達している伊陸丘陵の裾に位置する。北東にはこの丘陵地内の平野面を北流する四割川を、さらに対岸には伊領原遺跡を見下ろすことができる。調査区は、棚田の様相を呈しており、伊領原遺跡と同じく、調査前の現地水田区画に従い、西側高所からⅠ地区、Ⅱ地区とした(第28図)。標高はⅠ地区が約90m、Ⅱ地区が約87mで、ともに南北に細長くほぼ平坦面をなしている。

調査は、伊領原遺跡と並行して行い、Ⅰ地区より順にトレンチを設定して遺構面の確認を行った。その結果、盤土下5～20cmのところに遺構面を確認した。また、Ⅰ地区の北東端から南西端にかけては、帯状に連なる町だおしによる客土層が確認された。この結果を受けて、重機による表土除去を行い、さらに不明瞭な場所には追加トレンチを設定して、遺構の検出、掘り込み作業を進めた。

Ⅰ地区では、北側に弱粘質土の遺物包含層が確認され、土師器、瓦質土器、陶磁器などが出土した。Ⅱ地区からは中央東端部に遺物包含層が確認され、北端部からは掘立柱建物跡が1棟検出された。また、検出時に石鏃等も出土したが、遺構は掘立柱建物跡が1棟のみで、柱穴等からはほとんど遺物が出土しなかった。Ⅰ・Ⅱ地区とも、北側に安定した黄褐色土の地山面が広がり、遺構や遺物が集中して検出されており、調査区の北側に遺跡が広がっている可能性が考えられる。しかし、今回の調査区は丘陵の裾に位置しており、町だおしの跡が見られることから、小規模の水田を整地によって大きく作り替えたため、広範囲にわたって削平を受けており、遺構・遺物とも乏しい結果となった。

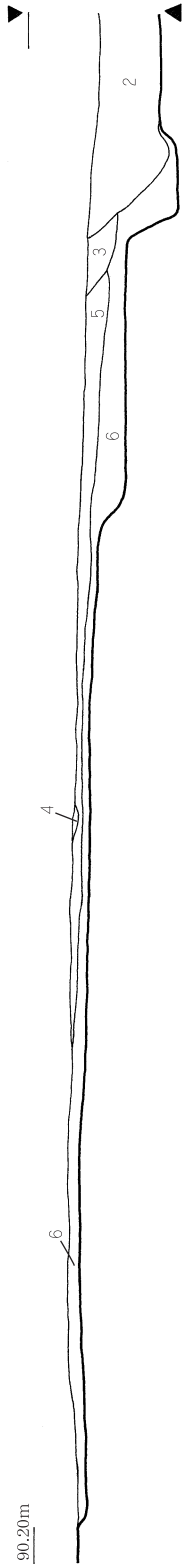


第28図 調査区設定図

木焼遺跡

TR2 北壁

A 90.20m



▼ 90.20m

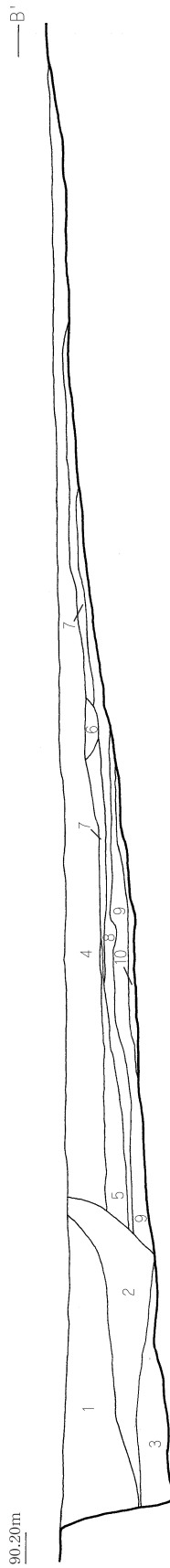
— A'

土層凡例

- 1 2と6の混合土(町だおし・客土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土(町だおし)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色弱粘質土
- 5 10YR5/6 黄褐色砂質土(マンガンを少量含む)
- 6 10YR6/6 明黄褐色砂質土(マンガンを多く含む、やや粘質)

TR6 北壁

B 90.20m

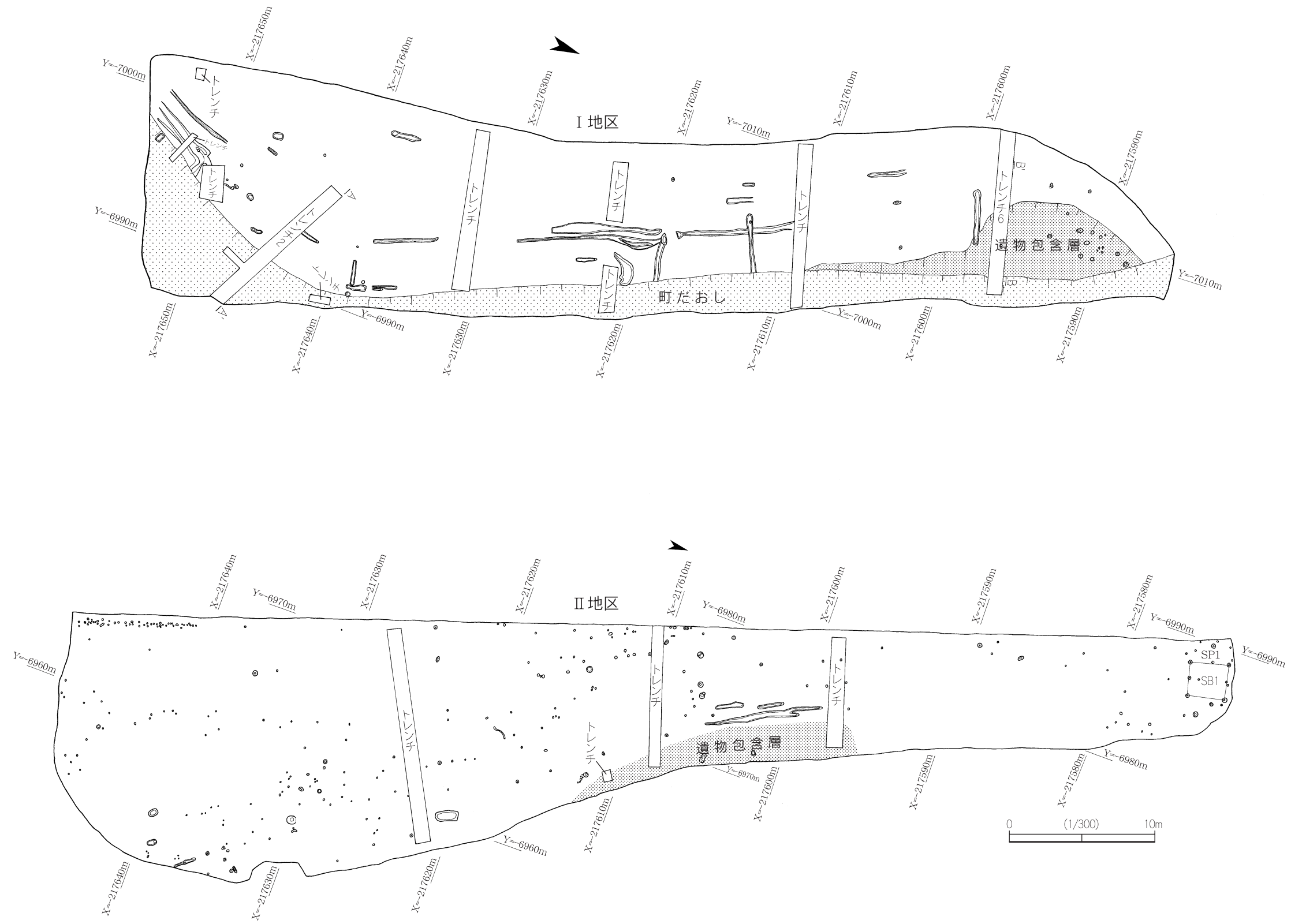


土層凡例

- 1 2と7の混合土(町だおし・客土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土(町だおし)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質土(町だおし)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色弱粘質土(遺物包含層)
- 5 10YR5/1 褐色弱粘質土(遺物包含層)
- 6 10YR4/4 褐色弱粘質土
- 7 10YR6/6 明黄褐色砂質土(マンガンを含む)
- 8 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土(マンガンを含む)
- 9 10YR5/6 黄褐色砂質土
- 10 10YR6/4 にぶい黄褐色弱粘質土(マンガンを多く含む)



第29図 トレンチ土層断面図



第30図 遺構配置図

2 調査の成果

(1) 遺構

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡 1 棟が検出された。遺構の残存状況は悪く、遺跡が丘陵の裾部に位置していることや、遺跡内に町だおしが I 地区を中心に広がっていることから、近代以降に水田拡張のため広範囲に削平を受けたと考えられる。I 地区の北側と II 地区の東側には、遺物包含層がみられ中世の遺物が多くみられることから、遺構は中世の所産と考えられる。

①掘立柱建物跡

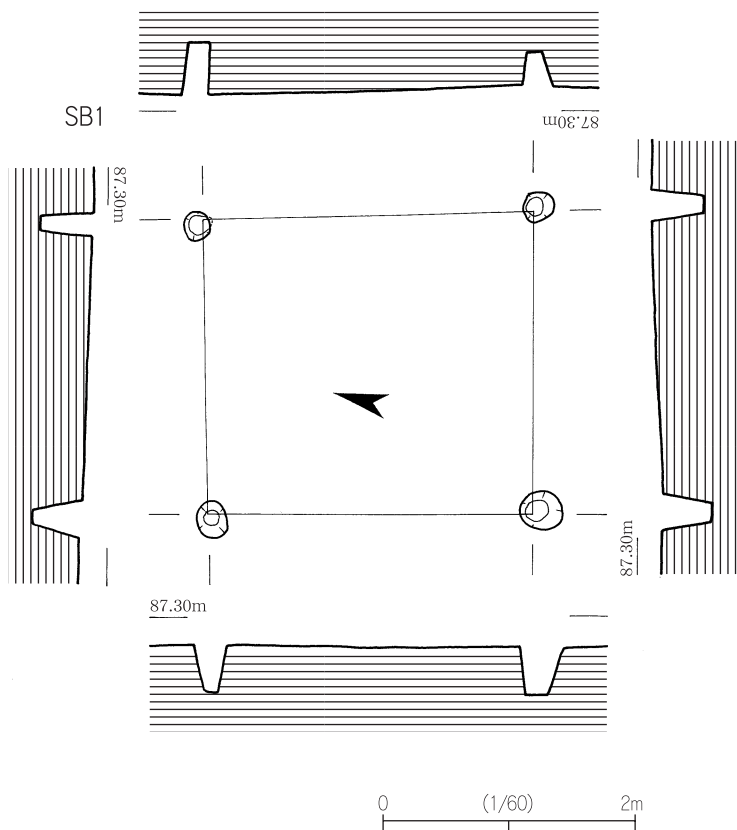
今回の調査で多数の柱穴が検出され、その中から 1 棟を復元することができた。

SB1 (第31図、図版19)

II 地区の北端に位置する建物である。現状では 1 間×1 間の建物と考えられるが、調査区外へ続く可能性もある。棟方向は N13° W。桁行 2.58m、梁行 2.43m、面積 6.27m²。柱穴の規模は直径 16~30cm、深さ 39~42cm。柱穴から土師器細片が出土した。時期は中世と考えられる。

②遺物包含層 (第29図、図版19)

I 地区の北側に位置する。トレンチを設定して、土層を確認したところ地山面の上に最大 34cm、東側ほど厚く堆積していた。堆積の状況から、東側は町だおしの客土により切られている。この土層から土師器片、陶器片、石鏃などがまとまって出土した。また、包含層の下より直径 18cm~40cm、深さ 11~29cm の柱穴が 17 個検出された。II 地区でも中央部東端に規模は南北方向に 10.2m、東西方向に 1.25m の包含層が確認された。



第31図 SB1 実測図

木焼遺跡

(2) 遺物

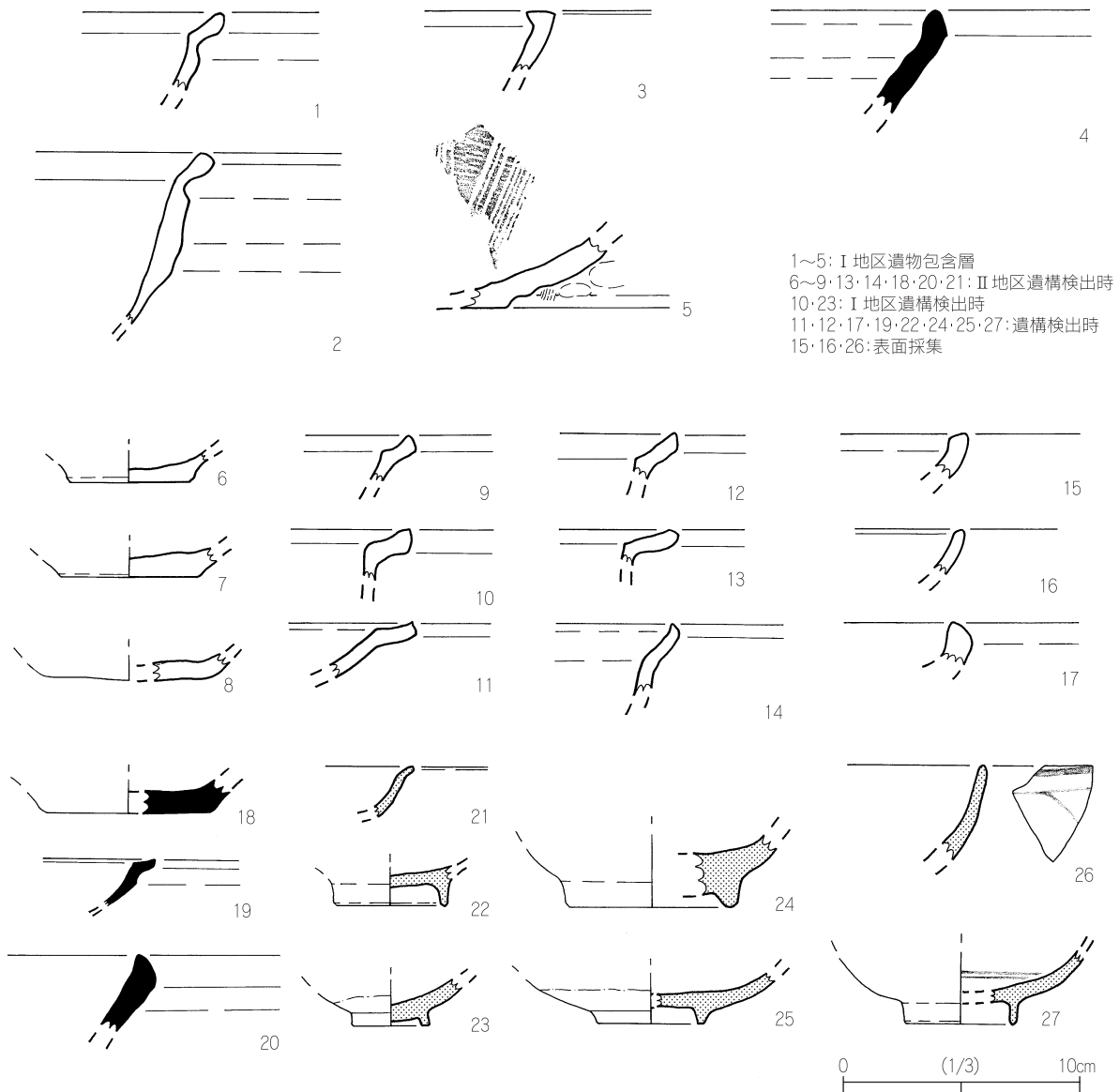
調査の結果、木焼遺跡からは土師器、瓦質土器、須恵器、輸入磁器（青磁）、国産陶磁器、石製品、銭貨が出土した。全体的に遺物量は少なく、また残存状況も悪く、小片が多い。なお遺構出土遺物はわずかで、また細片であるため、実測に耐えるものはなかった。

① I 地区遺物包含層出土遺物(第32図、図版20)

1・2は土師器の鍋である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外折する。全体的に摩滅が激しい。3・5は瓦質土器の挿鉢である。3は口縁端部内面に断面三角形の肥厚帯を貼り付ける。5の内面には残存9条の卸目がある。4は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部外面は自然釉が付着する。

②遺構検出時出土・表面採集遺物(第32図、図版20)

6～8は土師器皿である。7の底部外面には回転糸切り痕が残る。9～14は土師器の鍋である。15～17は土師器の鉢である。15は口縁端部内面に肥厚帯を持つ。18・19は須恵器で、器種は不明。18は底部外面に回転糸切り痕が残る。20は東播系須恵器の捏鉢で、口縁端部外面には自然釉が付着する。21・22・24は青磁の碗である。23は国産磁器で、青磁釉がかかる。25は磁器の碗で、見込みは蛇の目釉剥

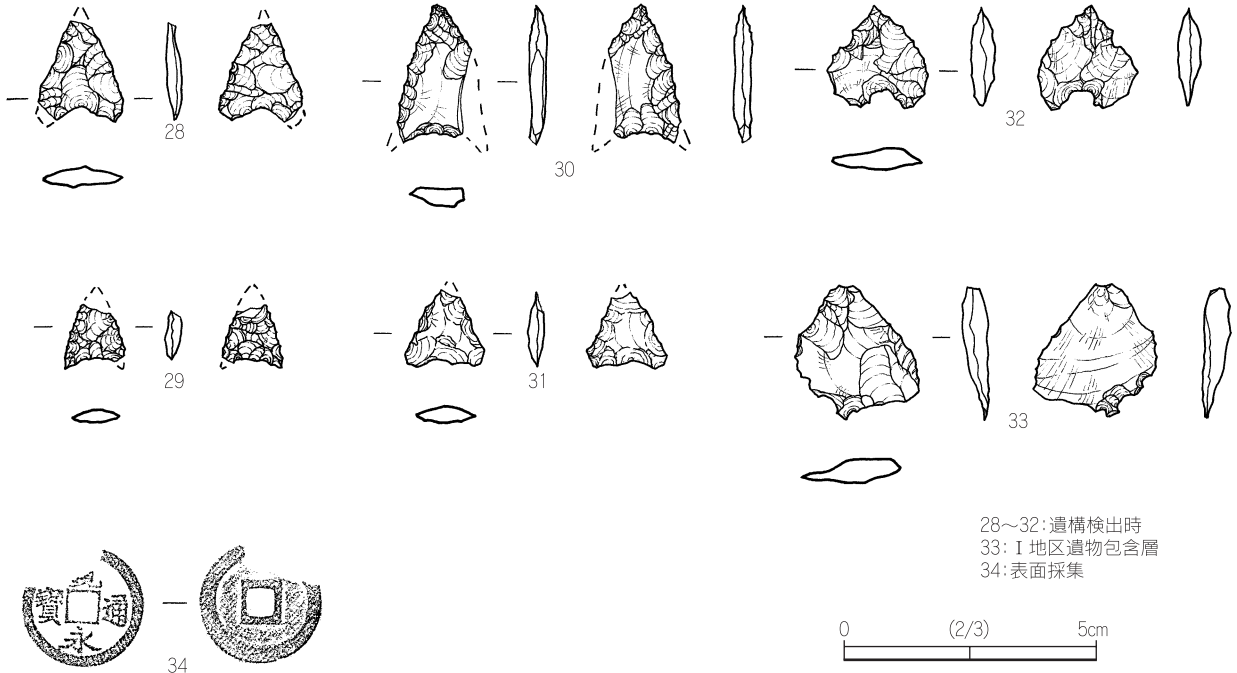


第32図 出土土器実測図

ぎ。26は染付の碗である。27は肥前磁器の染付青磁碗で外面は青磁釉をかける。内面の見込みに二重
 圈線が施文される。

③石製品・金属製品(第33図・図版20)

28~31は凹基無茎式の打製石鎌で、32は玉葱形を呈する。33はスクレイパーである。34は寛永通宝
 で、古寛永銭である。35はいずれも火打石で石材はチャートである。



第33図 出土石製品・金属製品実測図

表4 石製品観察一覧表

BN	挿図番号 図版番号	出土地点	器種	石質	完 未	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
28	第33図-28 図版20-28	I地区遺構検出時	打製石鎌	黒曜石 (姫島産)	完	(2.0)	(1.7)	0.3	0.8	凹基無茎式の打製石鎌。先端 及び基部の一部を欠損。
29	第33図-29 図版20-29	遺構検出時	打製石鎌	安山岩	完	(1.3)	(1.2)	0.3	0.4	凹基無茎式の打製石鎌。先端 及び基部の一部を欠損。
29-1	—	遺構検出時	剥片	安山岩	—	1.5	0.7	0.2	0.2	
29-2	—	遺構検出時	剥片	安山岩?	—	1.5	1.2	0.2	0.4	
29-3	—	遺構検出時	剥片	安山岩?	—	1.5	1.2	0.2	0.4	
30	第33図-30 図版20-30	遺構検出時	打製石鎌	黒曜石 (姫島産)	完	(2.7)	(1.5)	0.3	1.4	凹基無茎式の打製石鎌。側面 および基部の一部を欠損。
31	第33図-31 図版20-31	遺構検出時	打製石鎌	安山岩?	完	(1.5)	1.6	0.4	0.5	凹基無茎式の打製石鎌。先端 を欠損。全体的に磨滅している。
32	第33図-32 図版20-32	遺構検出時	打製石鎌	黒曜石 (姫島産)	完	2.0	2.0	0.5	1.4	凹基無茎式の打製石鎌。玉葱 形を呈する。
33	第33図-33 図版20-33	I地区遺物包含層	スクレイパー	黒曜石 (姫島産)	完	2.6	2.5	0.5	2.1	剥片の一部を加工し、刃部を 形成。
33	—	I地区遺物包含層	剥片	黒曜石 (姫島産)	—	2.0	2.0	0.6	1.9	一部自然面が残る。
36-1	—	I地区遺構検出時	剥片	安山岩	—	3.5	1.7	0.6	3.1	
36-2	—	I地区遺構検出時	剥片	黒曜石 (姫島産)	—	2.5	2.4	0.6	3.4	
35-1	—	遺構検出時	火打石	チャート	—	1.9	1.3	1.1	2.9	
35-1	図版20-35	遺構検出時	火打石	チャート	—	2.5	1.5	0.6	1.9	
35-2	—	遺構検出時	石材	チャート?	—	4.5	3.5	1.4	17.9	
35-3	—	遺構検出時	剥片	泥岩	—	1.6	1.2	0.4	0.7	
35-4	—	遺構検出時	剥片	黒曜石 (姫島産)	—	2.5	1.0	1.0	2.0	

3 まとめ

発掘調査により、遺構として確認されたのは掘立柱建物跡 1 棟、柱穴数十個である。遺物は土師器、瓦質土器、陶磁器、石製品（石鏃）、金属製品（銭貨、煙管）などが出土している。遺物のほとんどは遺物包含層、または検出中からのものである。遺構や遺物には恵まれなかったものの、遺跡の中心となる時期は伊領原遺跡とほぼ同時期の14～15世紀頃と考えられる。

今回の調査で唯一確認された掘立柱建物跡（SB 1）はⅡ地区の北側から検出された。規模は1×1間である。しかし、Ⅱ地区の北側には遺物を伴う柱穴が1個検出されるとともに、比較的深い柱穴がSB 1の周辺から検出している。さらにⅠ地区の北側で確認された遺物包含層は、黄褐色弱粘質土でマンガンを多く含んでおり、東側に向かって深く堆積している。この包含層の下からも柱穴が数個検出されていることから、遺跡の本体は調査区より北に位置しており、SB 1も北に延長する可能性が考えられる。

一方、Ⅰ地区中央部では、南北に走る溝状遺構の痕跡が確認できるが、深さが約5cm程度と浅く、遺物も伴っていない。また、南部でも溝状遺構が認められるが深さ、規模とも不十分なもので、遺物もほとんど出土しなかった。同様にⅡ地区中央部から南部にかけても、柱穴が多数検出されたが、浅いものが多く、遺物もほとんど出土していない。

これは、調査区が東向きの山の斜面の裾に立地していることから、かつて小さな棚田であった水田を造成するためかなりの遺構が削平を受けたものと考えられる。それを裏付けるように耕土除去後、Ⅰ地区東側の北東端から南西端にかけて、明瞭な町だおしの痕跡を確認した。

遺物では、中世の遺物が大半を占める中で東播系須恵器（4・20）が出土している。瀬戸内海に面した柳井地域は海上交通の要衝であり、広く流通した東播系須恵器が柳井市内陸部にも持ち込まれていたと考えられることができる。備前系陶器等ともあわせて、当時の物資の流れを知る上での手がかりになるであろう。また、石鏃が5点、剥片が1点出土している。遺構面検出中からの出土であるが、伊陸地区では、縄文時代の石鏃が出土しており、伊領原遺跡からも縄文土器が出土したことから今後、縄文時代の遺跡の発見にも期待される。

伊陸の名は、「正任記」の文明十年(1478)に登場しており、氷室岳周辺には未調査のものも含めて、大内氏の家臣関連の居城跡が多く分布している。したがって、遺跡の全体像を把握することはできないが、伊領原遺跡とほぼ同時期に生活を営んでいた小集団の集落跡の一部ではないかと推測できる。今回の調査では、伊領原遺跡とあわせて、中世における人々の活発な活動を垣間見ることができたといえよう。

V 松ヶ谷遺跡

1 調査の方法と経過

松ヶ谷遺跡は、伊領原遺跡・木焼遺跡から南西方向に約3km離れた四割川の源流に近く、小高い山の谷間に形成された舌状丘陵の先端部に位置している。北向きの斜面に立地しており、標高は約160mである。

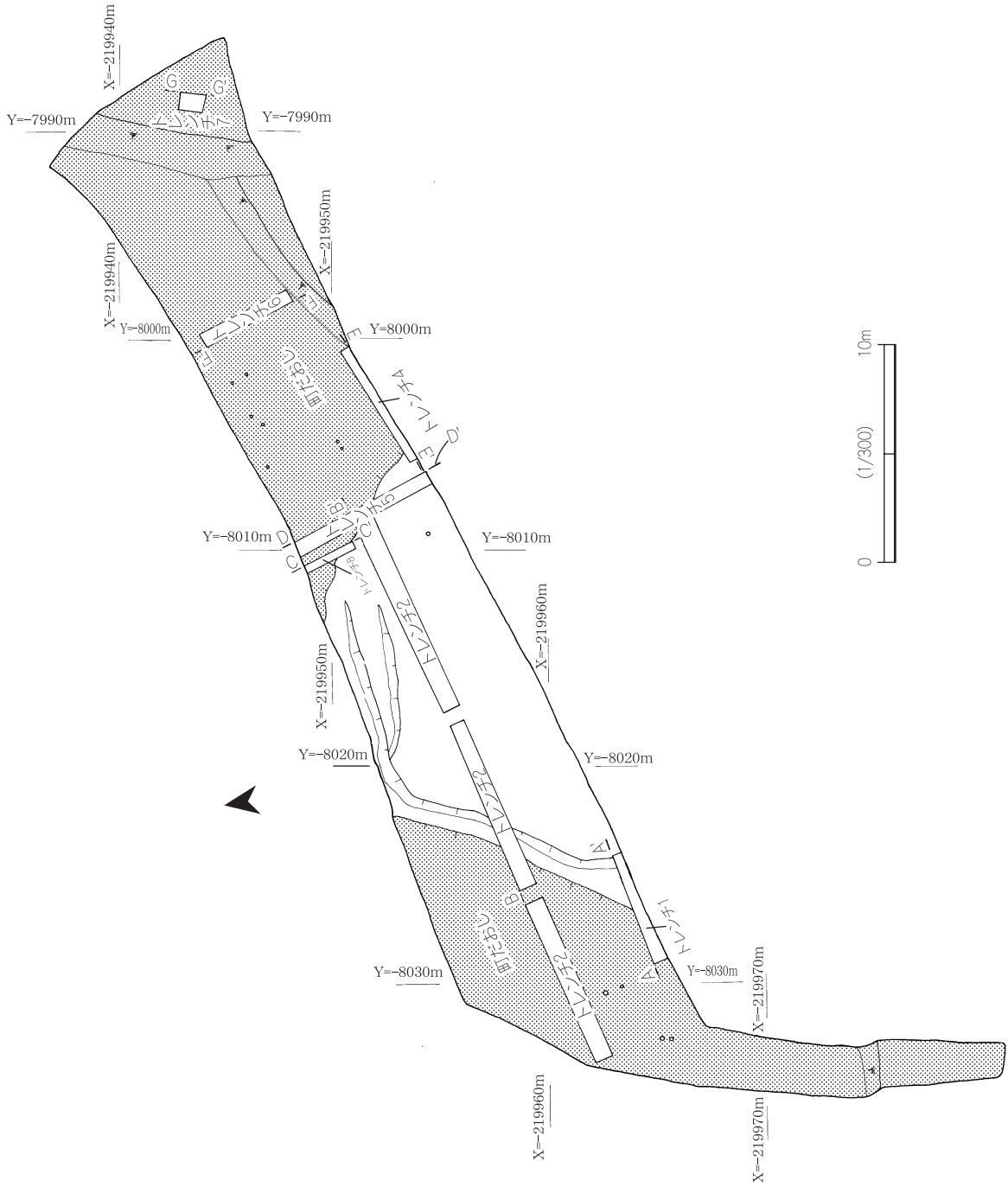
調査は、伊領原遺跡の掘り込み作業と並行して行い、調査区を東西に縦断する形でトレンチを設定した。その結果、盤土下5～20cmの比較的浅い位置で遺構面を確認した。この結果を受けて、重機による表土除去を行った。調査区の中央部には黄褐色土が広がり、東西両端部には灰黄色土の広がりを確認した。さらに、遺構面を再確認するために数カ所トレンチを設定して調査したところ、東西両端部の灰黄色土層の下に暗灰黄色土が広がっていた。この面は、遺構面と見られる黄褐色土層より下部に広がる層と合致しており、後世の水田化のため削平を受けているものと考えられる。したがって中央部を中心に遺構検出、掘り込み作業を行い、東西両端部は深い谷であったところを町だおしによる客土が堆積した状況から、旧地形までの検出は断念した。

調査区高位面側で行われた予察調査では、遺構や遺物が検出されていることから、遺跡の本体は今回の調査区より高位面側にあったと考えられる。先端部にあたる中央部のみが今回の調査対象となったため、遺構は柱穴数個を数えるに留まり、遺物も少ないものとなった。



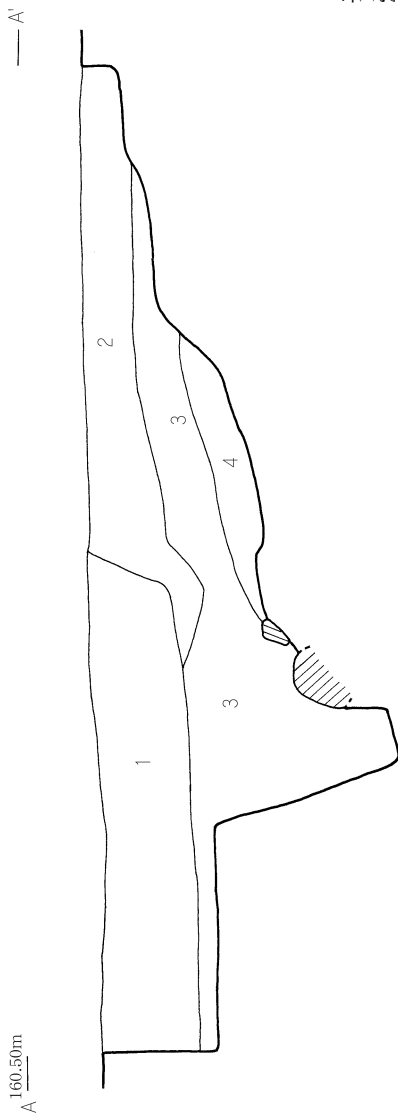
第34図 調査区設定図

松ヶ谷遺跡



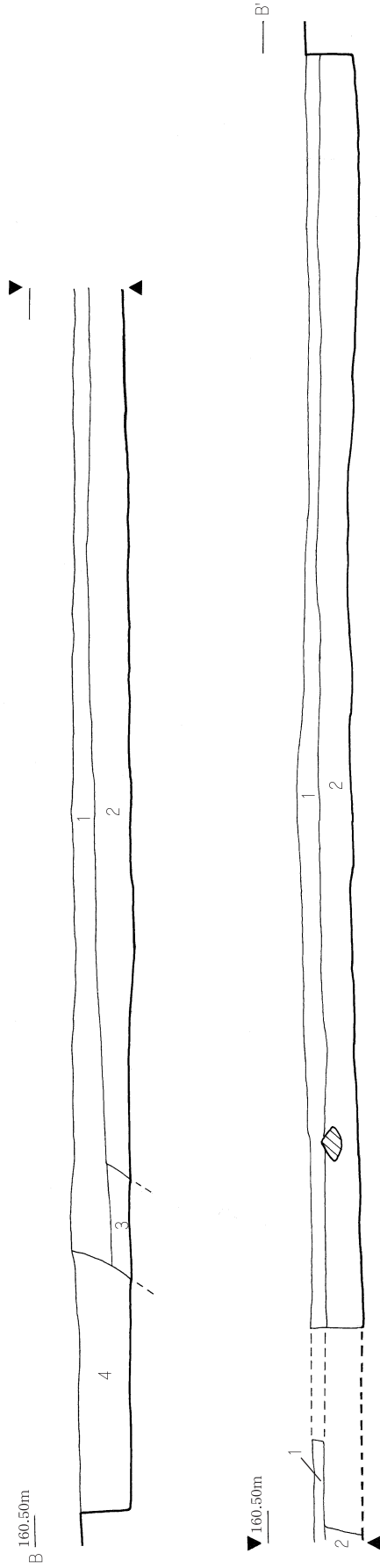
第35図 遺構配置図

TR1 北壁



- 土層凡例
 1 2と4と地山の混合土(町だおし・客土)
 2 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
 3 2.5Y5/3 黄灰色強粘質土
 4 2.5Y5/2 暗灰黄色強粘質土

TR2 北壁



- 土層凡例
 1 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
 2 10YR5/8 明褐色弱粘質土(礫を含む、地山)
 3 2.5Y5/3 黄灰色強粘質土
 4 1・2・暗灰黄色強粘質土の混合土(町だおし・客土)

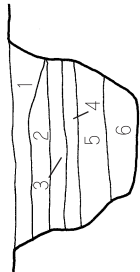


第36図 トレンチ土層断面図①

松ヶ谷遺跡

TR7 東壁

C 163.00m

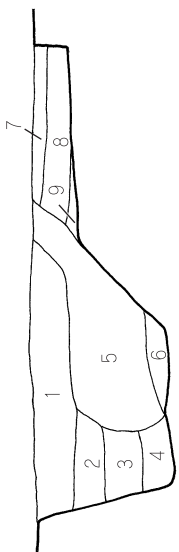


土層凡例

- 1 盛土
- 2 10YR4/1 褐色弱粘質土(炭を含む)
- 3 10YR5/2 灰黄色弱粘質土
- 4 2.5Y6/2 灰黄色弱粘質土(砂粒を含む)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土(砂粒を含む)
- 6 2.5Y5/3 黄褐色砂質土(やや粘質)

TR8 東壁

C 160.50m

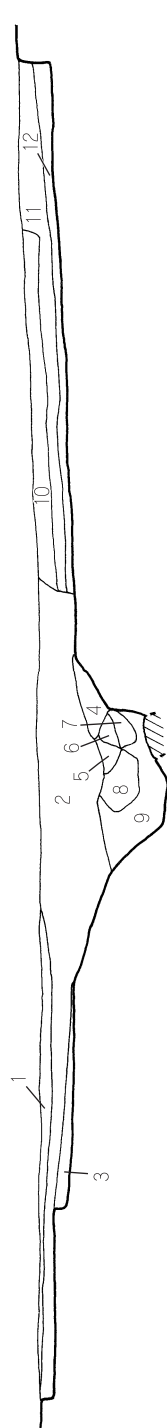


土層凡例

- 1 10YR5/6 黄褐色弱粘質土(灰白色粘土混じり、町だおし・客土)
- 2 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 3 10YR5/2 灰黄色弱粘質土(砂粒を多く含む)
- 4 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色強粘質土
- 6 2.5Y5/3 黄褐色弱粘質土(砂粒を含む)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
- 8 10YR5/2 灰黄色弱粘質土
- 9 10YR5/8 明褐色弱粘質土(礫を含む、地山)

TR5 東壁

D 160.50m



土層凡例

- 1 10YR5/6 黄褐色弱粘質土(灰白色粘土少量含む、町だおし・客土)
- 2 10YR5/6 黄褐色弱粘質土(灰白色粘土混じり、町だおし・客土)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(やや粘質)
- 4 2.5Y6/3 黄褐色弱粘質土
- 5 2.5Y5/4 黄褐色弱粘質土
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土
- 7 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
- 8 2.5Y5/3 黄褐色弱粘質土
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色強粘質土
- 10 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
- 11 10YR5/8 明褐色弱粘質土(礫を含む、地山)
- 12 7.5YR4/6 褐色砂質土(マンガン・礫を含む、地山)

TR4 南壁

E 160.50m



土層凡例

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土
- 2 7.5YR5/8 明褐色弱粘質土
- 3 10YR5/2 灰黄褐色弱粘質土(砂粒を多く含む)
- 4 10YR5/6 黄褐色弱粘質土(灰白色粘土混じり、町だおし・客土)
- 5 10YR5/2 暗灰黄色弱粘質土
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 7 10YR5/8 黄褐色強粘質土
- 8 10YR5/6 黄褐色強粘質土(灰白色粘土混じり、町だおし・客土)
- 9 2.5Y6/1 黄灰色強粘質土
- 10 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土(やや粘質)
- 11 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(マンガン・石を多く含む)
- 12 10YR5/8 明黄褐色弱粘質土(礫を含む、地山)
- 13 7.5YR4/6 褐色砂質土(マンガン・礫を多く含む、地山)

TR6 西壁

F 160.50m



土層凡例

- 1 2.5Y6/2 灰黄色砂質土と灰白色粘土の混合土(町だおし・客土)
- 2 10YR7/4 にぶい黄褐色粗砂粒(花崗岩風化?)
- 3 10YR5/6 黄褐色強粘質土(灰白色粘土混じり、町だおし・客土)
- 4 2.5Y6/1 黄灰色粘土



第37図 トレンチ土層断面図②

2 調査の成果

(1) 遺構

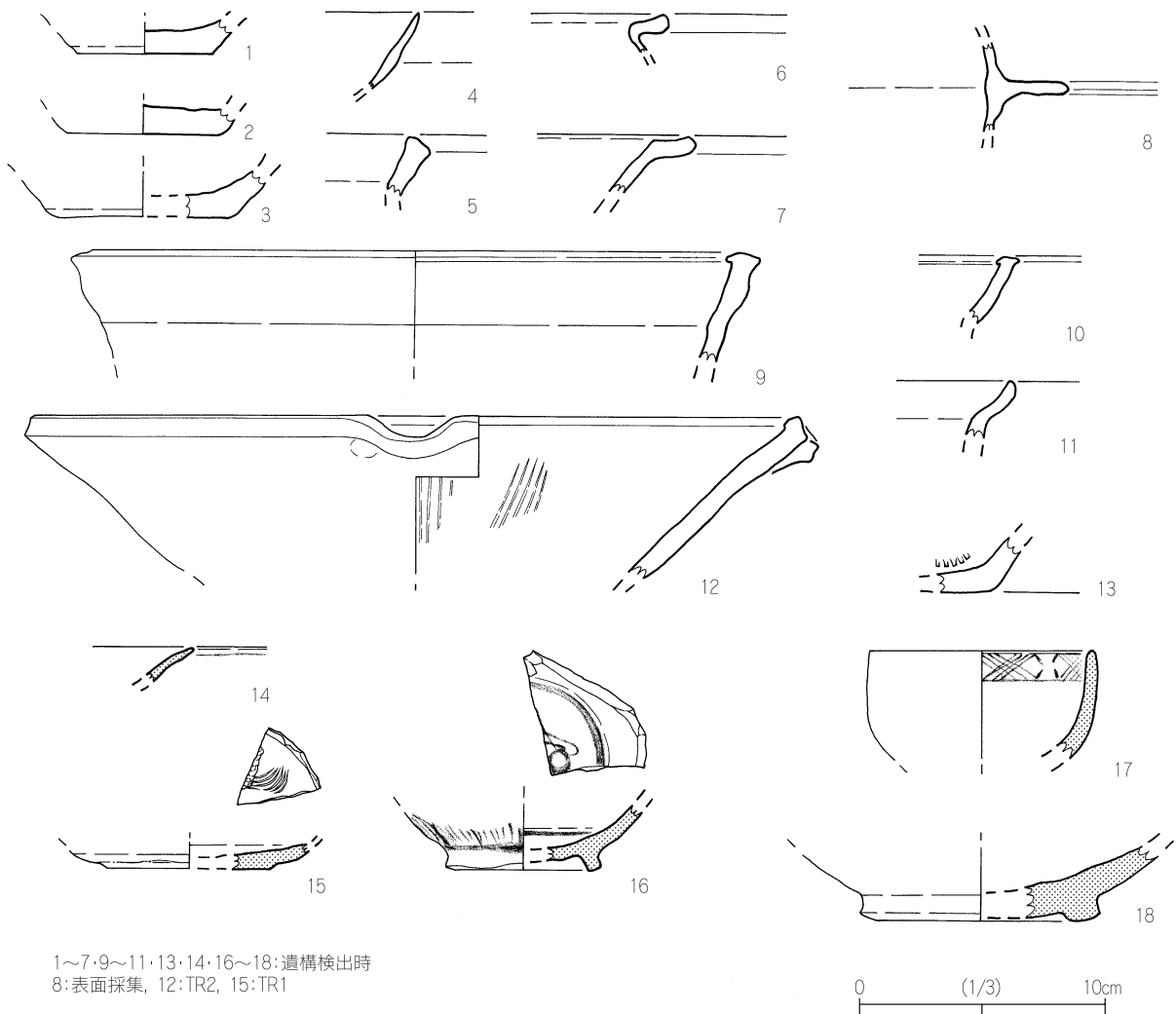
今回の調査は、狭い範囲での調査となり、遺跡本体の先端部と推定される中央部から段状遺構が検出された。また、東西両端部からは柱穴が十数個検出されたが、いずれも遺物を伴うものはなかった。

(2) 遺物

調査の結果、松ヶ谷遺跡からは土師器、瓦質土器、輸入磁器（青磁・染付）、国産陶磁器、石製品（石鏃）、金属製品（煙管・銭貨）が出土した。全体的に遺物量は少なく、また残存状態も悪く小片が多い。遺物はすべて遺構検出時出土または表面採集である。

①遺構検出時出土・表面採集遺物(第38図、図版26)

1～3は土師器皿または坏である。底部の切り離しは摩滅により不明である。4は土師器坏で口縁端部は尖り気味におさめる。器壁は薄い。調整は内外面とも回転ナデである。5～7は土師器の鍋である。5は口縁端部が内外面に肥厚し、面を持つ。6は口縁部が外折する。7は体部はやや外反して立ち上がり、口縁部は外折する。内外面とも摩滅が激しい。8は土師器の羽釜または土瓶の鏝部と思われる。調整は内外面とも回転ナデで、鏝部は貼り付け。外面の鏝より下位には多量の煤が付着している。9～11は瓦質土器の鍋である。9・10は口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は内外面へ拡張する。11は口縁部が外折する。12は土師器の羽釜または土瓶の鏝部と思われる。調整は内外面とも回転ナデで、鏝部は貼り付け。外面の鏝より下位には多量の煤が付着している。13は土師器の鍋の口縁部。14は土師器の鍋の口縁部。15は土師器の鍋の口縁部。16は土師器の鍋の口縁部。17は土師器の鍋の口縁部。18は土師器の鍋の口縁部。



1～7・9～11・13・14・16～18:遺構検出時
8:表面採集, 12:TR2, 15:TR1

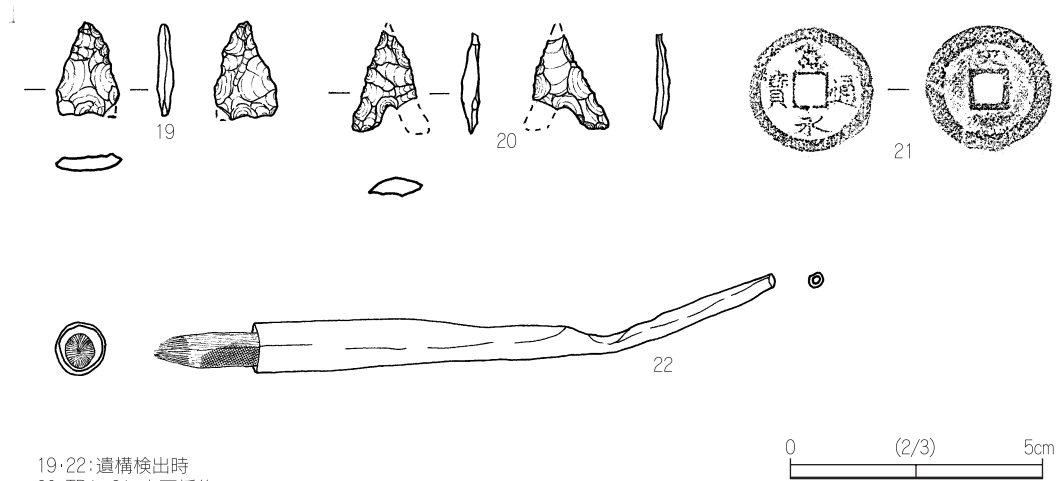
第38図 出土土器実測図

松ヶ谷遺跡

る器形を呈する。調整は内外面とも横ナデである。11は口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめる。調整は内外面とも横ナデ。12・13は瓦質土器の播鉢である。12は体部は外反して立ち上がり、口縁端部内面に断面台形の肥厚帯を貼り付ける。注口部を持ち、内面には残存5条1単位の卸目を施す。全体的に、摩滅・剥離が激しい。13は底部片で残存5条の卸目がある。14・15は青磁の皿である。14は口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめる。釉はオリーブ黄色、胎土は灰白色を呈する。15は内面見込みに櫛描の施文が見られる。釉は灰オリーブ色、胎土は灰白色を呈する。底部外面は釉剥ぎ。16は染付の碗で、外面には芭蕉葉文、内面見込みにには圏線と文様（不明）が呉須により施文される。内外面とも全面施釉である。釉は灰白色、胎土は淡黄色を呈する。17は肥前磁器の青磁染付碗である。口縁端部内面には四方櫛の文様帯が施文され、外面は青磁釉を施す。18は陶器の鉢と思われる。底部外面には断面台形の高台を持つ。内面に藁灰釉を施す。外面はにぶい褐色を呈し、高台内面は露胎で回転ヘラケズリ痕がある。器壁は厚い。

②石製品・金属製品(第39図、図版26)

19・20は凹基無茎式の打製石鎌である。19は抉りが浅く、全体的に摩滅が激しい。やや赤みを持ち、明褐灰色を呈する。安山岩製と思われる。20は抉りが深く、「U」字形を呈する。安山岩製である。21



第39図 出土石製品・金属製品実測図

表5 石製品観察一覧表

BN	挿図番号 図版番号	出土地点	器種	石質	完 末	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
19	第39図-19 図版26-19	遺構検出時	打製石鎌	安山岩?	完	(1.8)	(1.2)	0.3	0.7	凹基無茎式の打製石鎌。基部の一部を欠損。全体的に磨滅している。
20	第39図-20 図版26-20	TR1	打製石鎌	安山岩	完	(2.0)	(1.3)	0.3	0.4	凹基無茎式の打製石鎌。抉りが深い。先端及び基部の一部を欠損。
24	— —	遺構検出時	剥片	安山岩?	—	4.2	3.6	0.6	8.7	一部刃部状の剥離面有り。
23	— 図版26-23	表面採集	火打石	チャート	—	1.5	1.5	1.0	2.1	
23	— —	表面採集	剥片	黒曜石 (姫島産)	—	1.9	0.6	0.4	0.4	

は銭貨で、寛永通宝である。新寛永銭であり、背面には「文」字をもつ。22は煙管の吸口である。小口には木製の羅字の一部が残存しており、表面には漆が塗布されている。23は火打ち石で、石材はチャートと思われる。

3 まとめ

今回の調査では、調査区が遺跡本体の縁辺部にあたり、また地形的制約等により検出された遺構は柱穴数個のみであった。また、遺物の出土点数も少なかったが、土師器、瓦質土器など中世のものが中心に出土しており、時期としては16世紀頃が主体と考えられる。さらに、陶磁器、石製品（石鏃）、金属製品（銭貨、煙管）なども出土しており、縄文時代から近世にわたってこの地周辺で人々が生活していた状況を断片的ながらうかがうことができよう。

調査区は舌状丘陵の先端部にあたる北向きの傾斜地に立地し、東西両端部は谷となって急激に落ち込んでいることが確認された。谷であったと思われる部分は全調査区の3分の2程度あり、わずかに残った中央部からは、やや北側から段状の落ち込みや一部で柱穴を確認した。また、東側の谷の埋土からは規模も小さい柱穴が数個検出されたが、遺物は出土しなかった。後世の水田造成等によって遺構の大半が削平されたものとみられるが、この地に中世集落が営まれていた痕跡をうかがい得るものである。

今回は地形的な制約の多い狭い範囲での調査となり、残念ながら満足のいく資料を得られたとはいえない。松ヶ谷遺跡のある松山地区では、これまで本格的な発掘調査が行われておらず、今後、予察調査の行われた本遺跡の高位面を含めて、新たな発掘調査の進展によって当地の歴史が解明されることを期待したい。

参考文献

- 柳井市史編纂委員会 『柳井市史』通史編 1984
- 柳井市史編纂委員会 『柳井市史』総論編 1988
- 山口県教育委員会 『未指定文化財総合調査報告書 史跡—中世—編』 1985
- 山口県史編さん委員会 『山口県史』資料編 考古1 2000
- 山口県史編さん委員会 『山口県史』資料編 考古2 2004
- 勸山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 『四割遺跡』 1991
- 勸山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 『興ヶ原遺跡』 1992
- 勸山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 『冷泉家北遺跡』 1997
- 勸山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター・柳井市教育委員会 『中院遺跡』 2003
- 勸山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター 『尾崎原遺跡・大里遺跡・北智雲院遺跡』 2005
- 山口県教育委員会 『生産遺跡分布調査報告書 窯業』 1983
- 岩崎仁志 「防長地域の中世陶器窯」『陶埴 第13号』 2000
- 伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登 「中世陶器の物流—備前焼を中心にして—」『日本考古学協会 2004年度 広島大会 研究発表資料集』 2004
- 松岡睦彦 「山口県域における古代中世の土器」『山口考古創立10周年記念特集号』 1983
- 久世康博 「京都市域における舞納（祭祀）遺構の集成」『研究紀要 第5号』 1999
- 備前市教育委員会ほか 「記念銘史料にみる近世1期の大甕（壺）の変遷」『備前焼記念銘土型調査報告』 1988

付編 1

氷室岳周辺にみられる「嶽山壺」について

1 はじめに

「嶽山壺」は氷室岳（別名嶽山と呼ばれている）周辺の柳井市伊陸や周東町祖生に伝世されている備前系の陶器である。器種は甕や壺が主体を占めており、15～16世紀の備前焼に酷似している。

地元では、この「嶽山壺」を氷室岳山腹から山麓まで転がして運んでも壊れなかったものが伝世しているとの伝説も残っており、地元の象徴として扱われている。

2 「嶽山壺」について

伊領原遺跡の発掘調査から、備前系陶器の胴部片の一部、玉縁状の折り返しがみられる口縁部の一部が出土した。平成8年度に実施された冷泉家北遺跡（周東町祖生）からも備前系陶器の肩部片が出土している。また、冷泉家北遺跡に隣接する冷泉氏館跡から備前焼甕と壺（未報告）が出土している。今回は周東町祖生や柳井市に伝世している「嶽山壺」6点と冷泉氏館跡出土の備前焼甕・壺から、断片的ではあるが「嶽山壺」の特徴を述べてみたい。

(1) 周東町祖生別西 西円寺(西本尚史氏)所蔵 大甕

口径約40cm、器高約74cm、底径約25cm、肩部径約60cmを測る。口縁端部は断面が長い扁平な玉縁状をなし、口縁部は外反する。口縁端部外面には凹線状の横ナデを行う。胴部がやや長めの器形を呈する。16世紀後半～17世紀初頭頃（V B期）の備前焼の大甕の特徴をもつ。

(2) 周東町祖生別東 藤井照子氏所蔵 壺

口径約12cm、器高約24cm、底径約12cm、肩部径約18cmを測る。口縁部は断面三角形の玉縁状を呈し、短く外反する。胴部の内外面にロクロ目（接合痕）が顕著である。肩部には櫛描きの波状文と直線文がみられる。15世紀～17世紀初頭（IV～V期）のものか？

(3) 周東町祖生末南 村上融氏所蔵 大甕

口径約60cm、器高約93cm、底径約30cm、肩部径約80cmを測る。口縁端部は断面が長い扁平な玉縁を呈し、口縁部は外反する。口縁端部外面には凹線状の横ナデを行う。肩部外面には「二石入」の銘と格子状の窯印がある。16世紀後半～17世紀初頭（V B期）の備前焼の大甕の特徴をもつ。

(4) 柳井市柳井 柳井西福祉センター所蔵 大甕

口径約30cm、器高約60cm、底径約25cm、肩部径約48cmを測る。口縁端部は断面が扁平な長楕円形の玉縁をなし、口縁部はほぼ直立する。肩部には「+」と「-」を組み合わせたような窯印がある。底部外面には下駄印らしき痕跡が認められる。15世紀中～後半頭（IV B期）の備前焼の甕の特徴をもつ。

(5) 柳井市日積 旧大里小学校(柳井市教育委員会)所蔵 壺

口径24.2cm、器高54.7cm、底径23.5cm、肩部約45cmを測る。口縁端部は断面がやや長い扁平な玉縁をなし、口縁部は直立気味である。口縁端部外面には凹線状の横ナデを行う。焼歪みがあり、全体的にいびつでつくりもやや粗い。肩部に窯印が刻まれる。形部には三角形の窯印がある。16世紀後半～17世紀初頭（V B期）の備前焼の大甕の特徴をもつ。底部外面には下駄印がある。

(6) 周東町祖生 冷泉氏館跡出土 大甕・壺(未報告資料)

大甕：口径40.1cm、器高68.5cm、底部35.5cm、肩部65.8cmを測る。口縁端部は玉縁をなす。底部外面はいびつで、肩部には自然釉が付着する。14世紀～15世紀前半頃（IV A期）の特徴をもつ。

壺：口径12.6cm、器高22.9cm、底径14.6cm、肩部径20.8cmを測る。口縁端部は薄い玉縁をなし、口縁部は短く外反する。内面は粘土帯の接合痕が顕著である。14世紀～15世紀頃（IV期）のものか？

(7)柳井市伊陸 藤中輝子氏所蔵 壺

口径約25cm、器高約36cm、底径約18cm、肩部径約34cmを測る。瓦質土器の壺である。肩部は張り出し、底部はやや広めの器形を呈する。肩部にはやや無造作なヘラ描き沈線が3周している。在地産と思われるが、13世紀～14世紀頃（II～III期）の備前焼の特徴がみられ、祖形は備前焼を模した可能性がある。

3 むすび

今回の資料調査では、備前からの移入品もしくは、備前の陶工によって焼かれたと思われるものがほとんどであった。しかし、約50個近く伝世しているといわれるもののうち6点と発掘調査によって出土したものを実見、計測、聞き取り調査を行ったものに過ぎない。「嶽山壺」が備前からの移入品か、伝承にあるように氷室岳中腹あるいは周辺で備前の陶工によって焼かれたのか結論づけるにはまだまだ資料不足の感は否めない。

今後さらに氷室岳周辺の調査によって窯跡の発見、備前との関係など、あらたに「嶽山壺」に関する資料が蓄積されることによって、山口県の中世窯業の解明に大きな役割を果たすものとする。

(参考文献)

伊藤晃・上西節雄『日本陶磁全集10 備前』1977 岡山県教育委員会『山崎古窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告167 2002 伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登「中世陶器の物流－備前焼を中心にして－」『日本考古学協会 2004年広島大会 研究発表資料』2004 重根弘和「中世備前焼に関する考察－製作技法から－」『古文化談義』第54集 2005 中近世備前焼研究会『第3回中近世備前焼研究会資料』2000 備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会『備前焼研究最前線Ⅱ』備前市歴史民俗資料館紀要7 2005 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60 1991



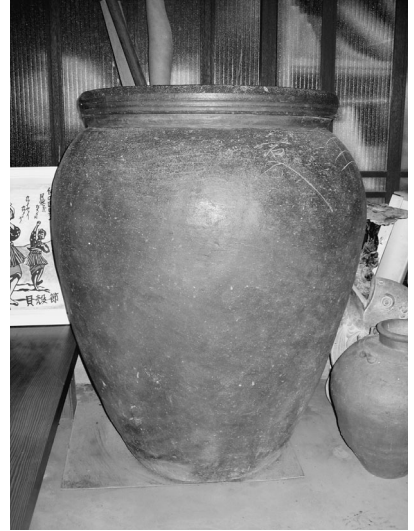
「嶽山壺」の分布(山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書 窯業』1983をもとに作成)



(1)西円寺(西本尚史氏)所蔵 大甕



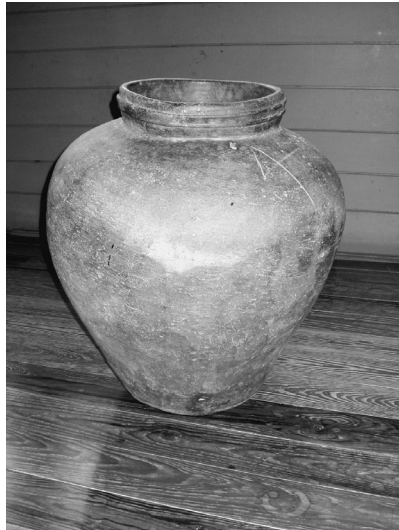
(2)藤井照子氏所蔵 壺



(3)村上融氏所蔵 大甕



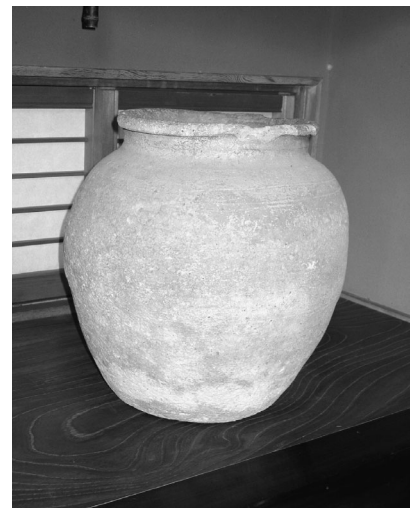
(4)柳井西福祉センター所蔵 大甕



(5)旧大里小学校(柳井市教育委員会)所蔵 壺



(6)周東町祖生 冷泉氏館跡出土 大甕・壺



(7)藤中輝子氏所蔵 壺

付編 2

伊領原遺跡 リン酸・カルシウム分析及び火山灰分析報告書

平成18年 1月 (2006年)

応用地質株式会社

1 試料と分析方法

試料は、次の表 1-1 に示す伊領原遺跡出土遺構及びその覆土より採取した土壌 8 試料である。

表 1-1 分析試料一覧

試料番号	調査区	試料採取位置	採取日	分析項目
1	I-2地区	SK 1 埋土 1	20050628	リン酸・カルシウム分析
2	I-2地区	SK 1 埋土 2	20050628	リン酸・カルシウム分析
3	I-2地区	SK 1 杯の埋土	20050707	リン酸・カルシウム分析
4	I-2地区	SK 1 土坑周辺	20050628	リン酸・カルシウム分析
5	I-2地区	流路跡トレンチ 土壌 (上層86層)	20051011	火山灰分析
6	I-2地区	流路跡トレンチ 土壌 (下層87層)	20051011	火山灰分析
7	II地区	トレンチ12	20051011	火山灰分析
8	II地区	トレンチ13	20051011	火山灰分析

1.1 土坑覆土の試料と分析方法

1.1.1 試料

分析の対象とされた遺構は、調査区東側北部の I-2 地区より検出された土坑 SK 1 である。SK 1 は、縦(北北西方向)約 2 m、横約 1 m の隅丸長方形の平面形を呈し、皿・坏などの完形に近い土器が出土していることなどから、土坑墓の可能性があるとされている。土器は、土坑の南側、中央付近、中央付近からやや北側、北西隅にそれぞれまとまって出土している。

試料は、土坑南側の土器出土位置付近の覆土から「埋土 1」、土坑中央付近からやや北側の土器出土位置付近の覆土から「埋土 2」、土坑北西隅から出土した坏の内部から「坏の埋土」がそれぞれ採取され、さらに、土坑北西端から 50cm ほど離れた位置の土壌から「周辺の土」として 1 点の試料が採取された。分析は、これら計 4 点の試料を対象とする。

1.1.2.分析方法

リン・カルシウム分析および腐植含量の分析を行う。リン酸は特に骨中に多量に含まれ、土壌中では比較的拡散・移動しにくいいため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法である。ただし、土壌中のリン酸には植物質由来のものも多いため、植物遺体に由来するリン酸の影響を調べるために植物質起源の腐植含量を合わせて分析する。得られた腐植含量とリン酸含量の関係から動物質起源のリン酸の富化を検討する。さらに、今回はリン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析する。

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解ーバナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解ー原子吸光法、腐植含量はチューリン法(土壤標準分析・測定法委員会,1986)でそれぞれ行う。

1.2 旧河道堆積物の試料と分析方法

1.2.1.試料

試料は、調査区東側中央付近のⅠ－Ⅱ地区流路跡トレンチ、調査区西側のⅡ地区トレンチ12および同トレンチ13の3箇所検出された旧河道跡の堆積物より採取された。このうち、Ⅰ－Ⅱ地区流路跡トレンチでは、土壌(上層)と土壌(下層)の2点の試料が採取されている。試料の外観は、いずれも褐～灰黄褐色を呈するシルト混じりの砂であるが、Ⅰ－Ⅱ地区流路跡トレンチ下層は比較的シルト分が多く、Ⅱ地区トレンチ12は逆にシルト分が非常に少ない特徴がある。

1.2.2.分析方法

重軽鉱物分析による試料の鉱物組成を明らかにし、試料の採取された堆積層がテフラ層であるかを判断した。その結果、当初テフラ層と考えられた各試料は、テフラ層ではないと判断されたため、粒度分析を行い試料の粒度組成を検討した。なお粒度分析は、Ⅰ－Ⅱ地区流路跡トレンチの2点の試料と特に砂質であるⅡ地区トレンチ12の試料の計3点を選択して分析した。

2. 分析結果と考察

2.1 土坑覆土

2.1.1 結果

分析結果一覧を表2-1に示す。腐植含量は、埋土1を除く3点で1%前後の値を示すが、埋土1では約0.7%と若干低い値である。リン酸含量は、坏の埋土で最も高く約0.9%を示し、埋土1および埋土2では0.5～0.6%でそれより低く、周辺の土では約0.1%とさらに低い値を示す。カルシウム含量では、周辺の土が最も高い約1.4%を示し、次いで埋土2の約0.8%が高く、埋土1および坏の埋土は0.6%前後である。

表2-1 土壤化学分析結果

試料番号	試料名	土性	土色	腐植含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)
1	埋土1	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐	0.69	0.50	0.63
2	埋土2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.96	0.64	0.80
3	杯の埋土	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	1.08	0.93	0.57
4	周辺の土	LiC	10YR3/1 黒褐	0.90	0.11	1.41

注。(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

(2)土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。

SL・・・砂壤土(粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%)

LiC・・・軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)

2.1.2 考察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)、これらの事例から推定される

天然賦存量の上限は約 $3.0P_2O_5mg/g$ 程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5P_2O_5mg/g$ (川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では $6.0P_2O_5mg/g$ を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 $1\sim 50CaOmg/g$ (藤貫, 1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

今回の土坑の埋土試料3点は、いずれもリン酸含量およびカルシウム含量ともに上述した天然賦存量の範囲内にある。ただし、周辺の土との比較からは、腐植含量の差に比べてリン酸含量の差が大きく、しかも埋土(特に坏の埋土)の試料の方がリン酸含有量の高い。したがって、土坑の埋土には、土坑周囲の土よりもリン酸含有量が富化するような状況のあったことがうかがえる。このことから、直ちに土坑が土坑墓であったと断定することまではできないが、それを支持する結果であることは言える。なお、含有量自体が低いことは、時間の経過によるリン酸分が拡散したことなどが考えられる。

2.2. 旧河道堆積物

2.2.1 重軽鉱物分析

結果を表2-2および図2-1に示す。4点の試料はともにほぼ同様の重軽鉱物組成を示す。その概要は、角閃石が最も多くこれに少量または微量の斜方輝石、単斜輝石、黒雲母、珪線石(結晶の変質が進んでいるため偏光顕微鏡下での特徴が捉えにくい)および不透明鉱物を伴い、微量のジルコンとザクロ石が含まれる。一方、軽鉱物組成では、長石類が石英よりもやや多く含まれる。なお火山ガラスは、I-2地区流路跡トレンチ上層の試料とII地区トレンチ12の試料に極めて微量認められたのみである。また処理後に得られた $1/8mm$ 以下の砂粒中には多量の風化した黒雲母の細片が含まれている。

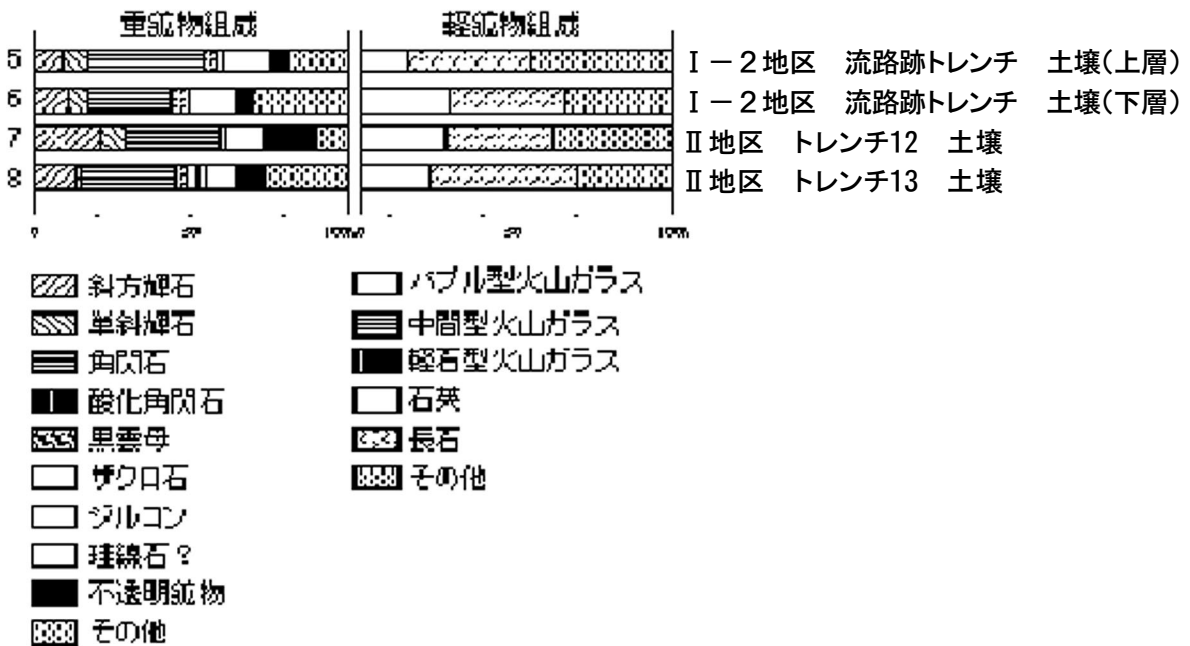


図2-1 重軽鉱物組成

表 2-2 重軽鉱物分析結果

試料番号	試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ザクロ石	ゾイサイト	ジルコン	珪線石?	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
5	I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(上層)	22	18	93	0	12	2	2	3	38	15	45	250	0	0	1	39	99	111	250
6	I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(下層)	25	17	65	3	12	1	0	1	39	13	74	250	0	0	0	71	92	87	250
7	II地区 トレンチ12 土壌	52	20	75	0	2	5	0	2	30	43	21	250	1	0	0	69	87	93	250
8	II地区 トレンチ13 土壌	32	5	74	0	9	10	0	5	24	23	68	250	0	0	0	55	119	76	250

2.2.2 粒度分析

結果を表 2-3 に示す。3 点の試料ともに細砂分が最も多いが、I-2 地区流路跡トレンチ上層では、細砂に次いで粗砂が多く、同下層ではシルト分が多い。II 地区トレンチ12の試料では、細砂および粗砂の割合が他の 2 点の試料よりもさらに多く、両者合わせて90%以上になる。

表 2-3 粒度分析結果

試料番号	試料名	粒 径 組 成				
		粗 砂 (%)	細 砂 (%)	シルト (%)	粘 土 (%)	土 性 (%)
5	I-2 地区 流路跡トレンチ 土壌(上層)	28.0	50.5	12.4	9.1	SL
6	I-2 地区 流路跡トレンチ 土壌(下層)	15.3	45.6	23.3	15.8	CL
7	II地区 トレンチ12 土壌	29.7	61.0	6.9	2.4	S

注. (1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

(2)土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。

SL・・・砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

CL・・・埴壤土(粘土15~25%、シルト20~45%、砂30~65%)

S・・・砂土(粘土0~5%、シルト0~15%、砂85~100%)

2.2.3 考察

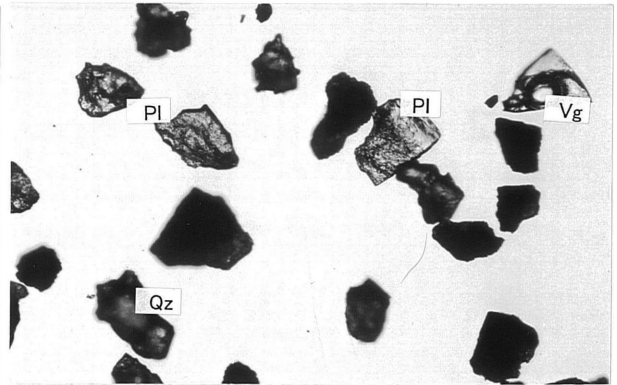
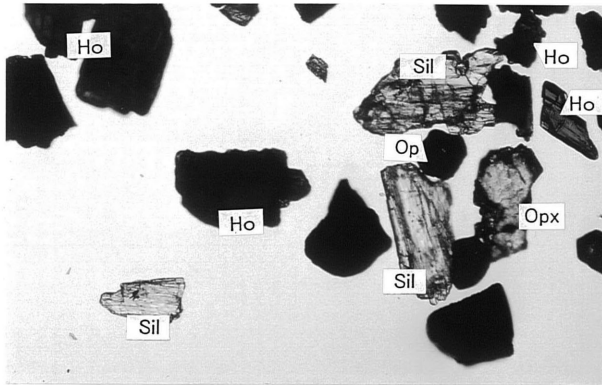
重軽鉱物分析の結果から、4 点の試料はいずれもテフラではないと判断される。したがって、テフラの降下年代による検討はできない。今回の 4 点の試料は、粒度分析が示すように細砂を主体とした堆積物であり、碎屑物の中によく光を反射するものが多く含まれるため、一見、細粒の火山ガラスを含むテフラであるような外観を呈している。しかしながら、これは細粒の黒雲母片に起因したものである。このような外観が、発掘調査所見において火山灰の可能性があるとされた理由の 1 つであるとも考えられる。なお、I-2 地区流路跡トレンチ上層およびII 地区トレンチ12の試料に認められた火山ガラスについては、極めて微量なために、形態以外の特徴(例えば屈折率など)を捉えることができない。したがって、これら火山ガラスの由来するテフラも不明である。

今回の 4 点の試料は、砂を主体とする粒径組成であることにより、旧河道が埋積する過程において、

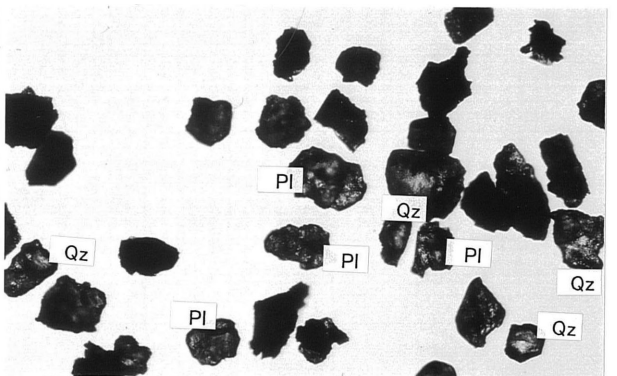
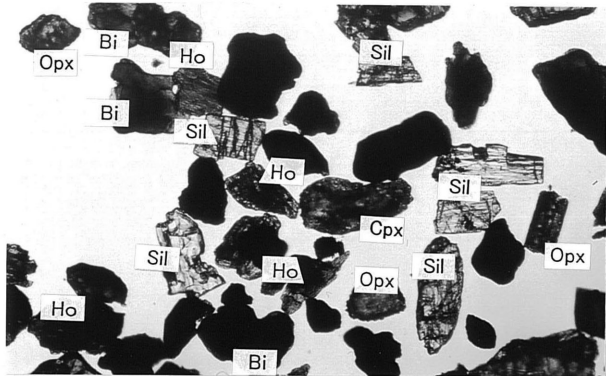
河道周囲の碎屑物が流水により運搬され、堆積したものと考えてよい。したがって、その碎屑物は、遺跡の位置する伊陸盆地を取り巻く山地を構成している地質に由来する。伊陸盆地周辺の地質については、東元ほか(1983)述べられており、盆地の北側および西側の山地には主に中生代白亜紀の広島花崗岩類が分布し、盆地の南側および東側の山地には同じ白亜紀の領家花崗岩類が分布している。試料中に認められた重鉱物のうち、輝石類以外の重鉱物は、いずれも上述の文献における盆地周囲の岩石に含まれているものである。なお、試料中に含まれる輝石類の起源としては、第四紀更新世以降に伊陸盆地に降下堆積した火山噴出物が想定される。すなわち前述した軽鉱物中に極めて微量含まれる火山ガラスは、輝石類の由来を示唆しているとも考えられる。前述したようにテフラの特定はできないが、地理的な位置関係を考慮すれば、輝石類および火山ガラスは、九州に分布する火山を給源とするテフラに由来する可能性がある。今後、伊陸盆地内でも地形や堆積条件によりテフラの降下堆積物が検出される可能性は十分にあると考えられる。

<引用・参考文献>

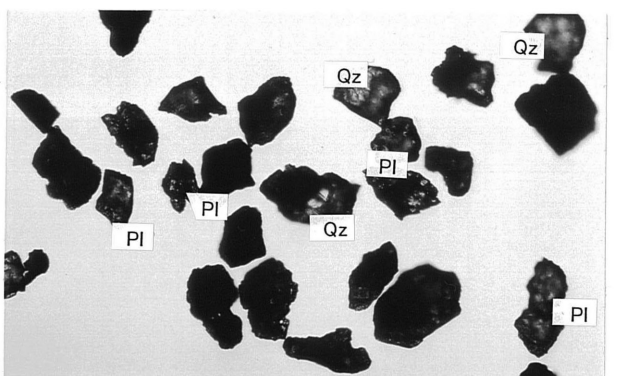
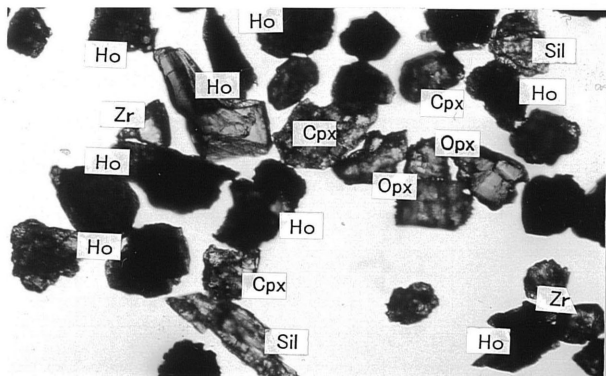
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Bowen,H.J.M.,1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-.浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壤の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳,学会出版センター,309p.
- 土壤標準分析・測定法委員会編,1986,土壤標準分析・測定法.博友社,354p.
- 土壤養分測定法委員会編,1981,土壤養分分析法.養賢堂,440p.
- 藤貫 正,1979,カルシウム.地質調査所化学分析法,52,57-61.
- 東元定雄・濡木輝一・原 郁夫・佃 栄吉・中島 隆,1983,岩国地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,79p.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久,1991,九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編,1957,農芸化学実験書 第1巻.産業図書,411p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編 土壤調査ハンドブック,博友社,39-40.



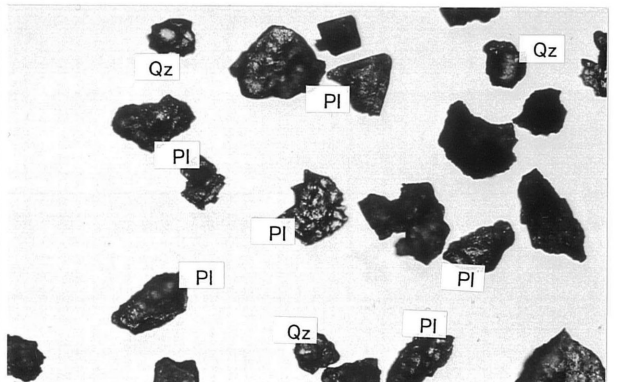
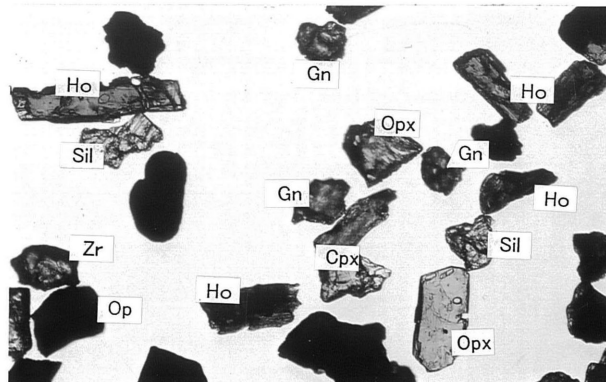
1.重鉱物(5; I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(上層)20051011) 2.軽鉱物(5; I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(上層)20051011)



3.重鉱物(6; I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(下層)20051011) 4.軽鉱物(6; I-2地区 流路跡トレンチ 土壌(下層)20051011)



5.重鉱物(7; II地区 トレンチ12 土壌 20051011) 6.軽鉱物(7; II地区 トレンチ12 土壌 20051011)



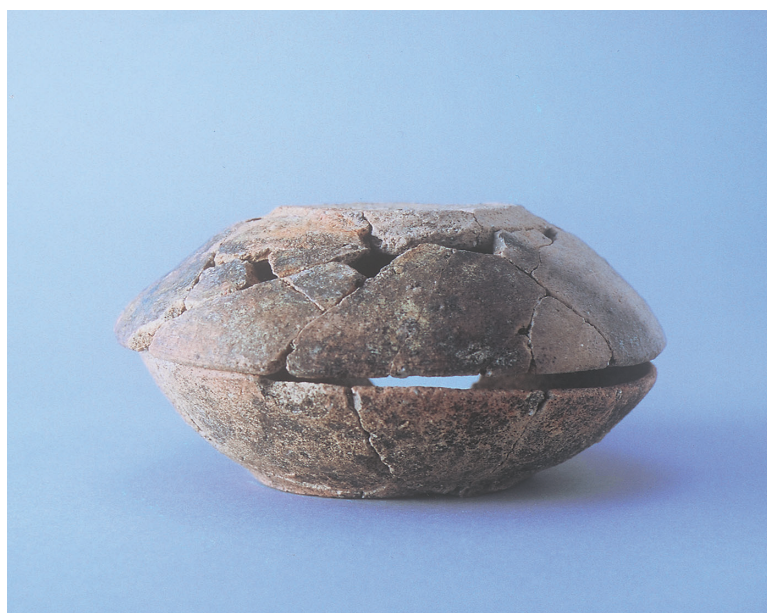
7.重鉱物(8; II地区 トレンチ13 土壌 20051011) 8.軽鉱物(8; II地区 トレンチ13 土壌 20051011)

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Bi: 黒雲母 Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Ho: 角閃石
Zr: ジルコン Gn: ザクロ石 Sil: 珪線石 Op: 不透明鉱物 Vg: 火山ガラス

0.5mm

図版1 重軽鉱分析の顕微鏡写真(左側:重鉱物、右側:軽鉱物)

伊 領 原 遺 跡 図 版





調査区遠景（東から）

図版 2



調査区全景（東から）



I-1地区 完掘状況（東から）

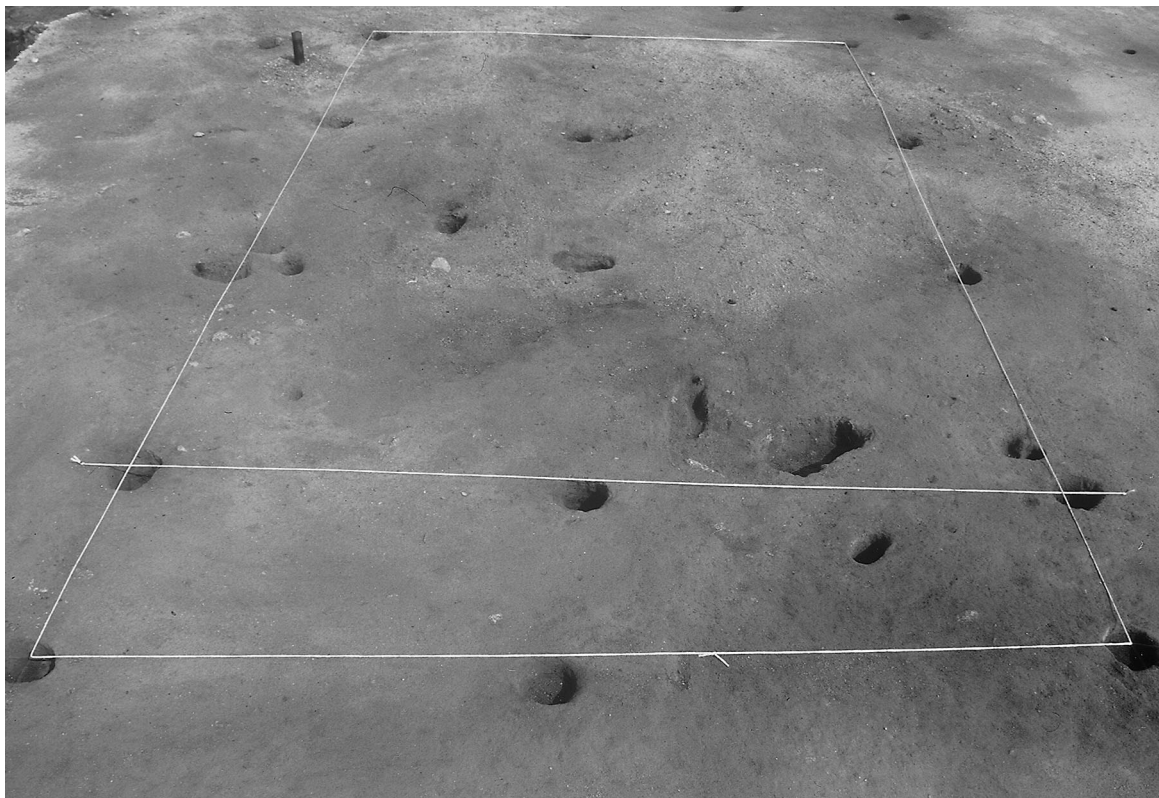


I-2・II地区 完掘状況（東から）

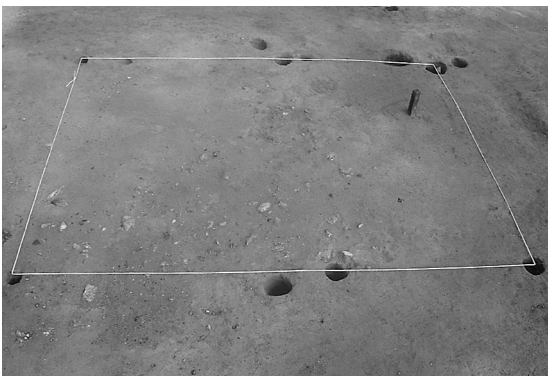


I-2地区掘立柱建物群（東から）

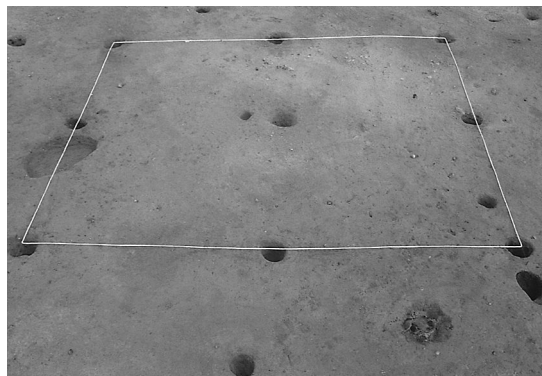
図版4



SB1 完掘状況（南から）



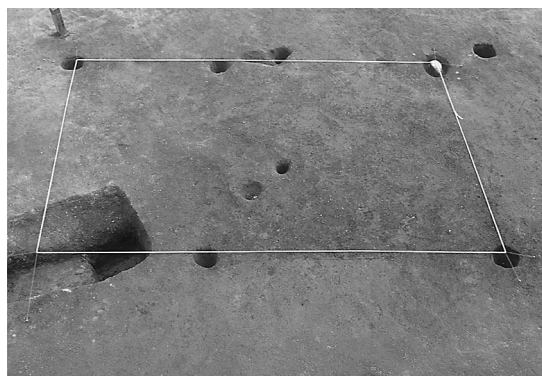
SB2 完掘状況（南から）



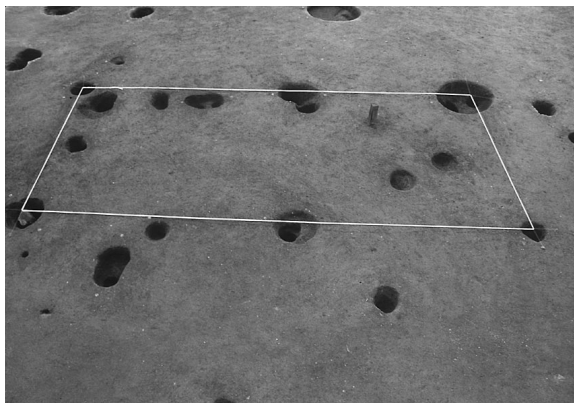
SB3 完掘状況（南から）



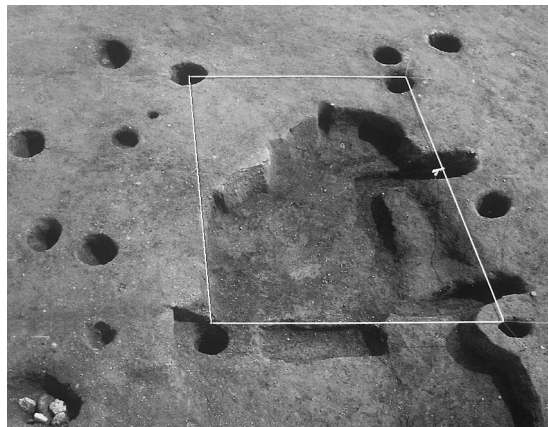
SB4 完掘状況（南から）



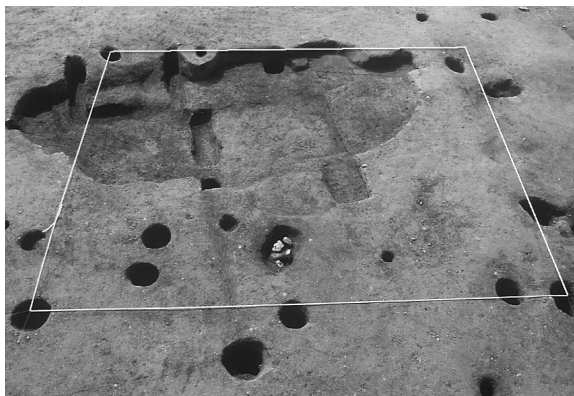
SB5 完掘状況（西から）



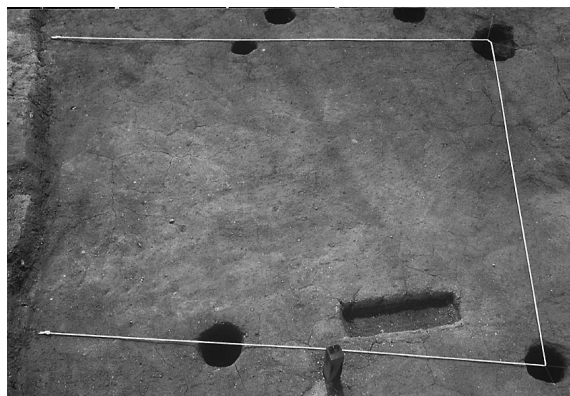
SB6 完掘状況（北から）



SB7 完掘状況（西から）



SB8 完掘状況（北から）



SB9 完掘状況（北から）



SK1 遺物出土状況①（東から）



SK1 遺物出土状況②（東から）

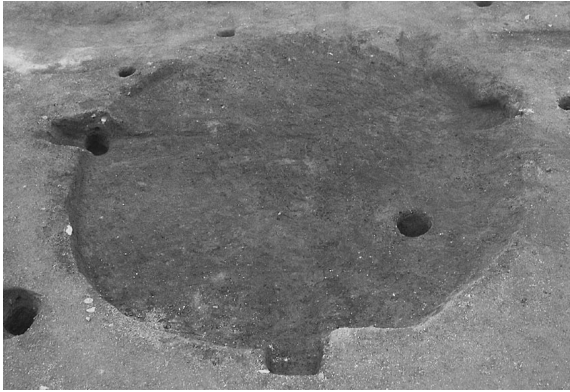


SK1 完掘状況（東から）



SK3 検出状況（南から）

図版 6



SK4 完掘状況（東から）



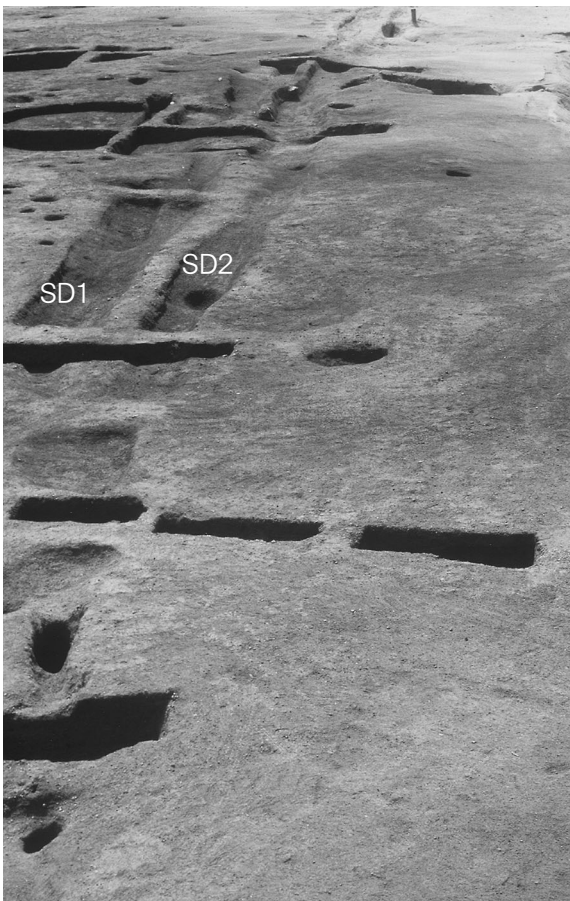
SK11 完掘状況（南から）



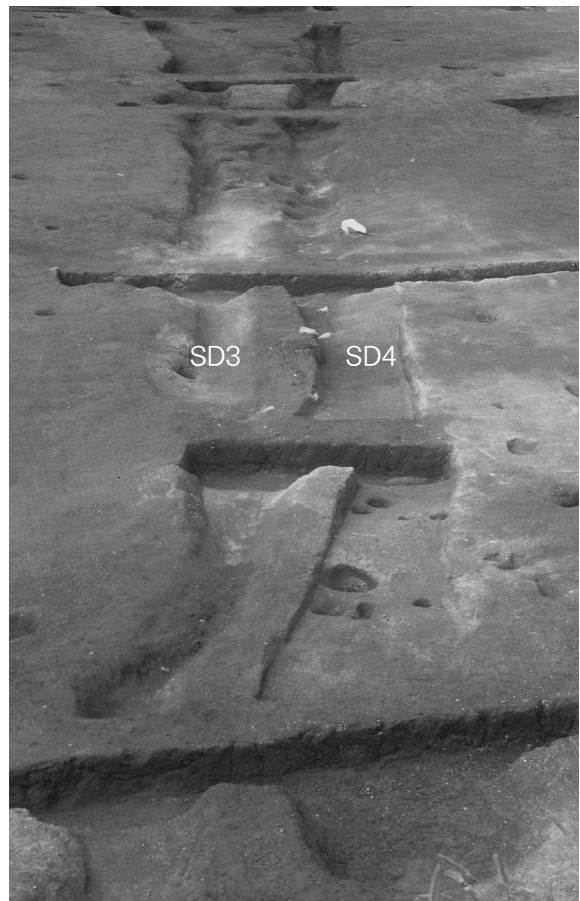
SK5 検出状況（西から）



SK5 完掘状況（東から）



SD1・2 検出状況（北から）



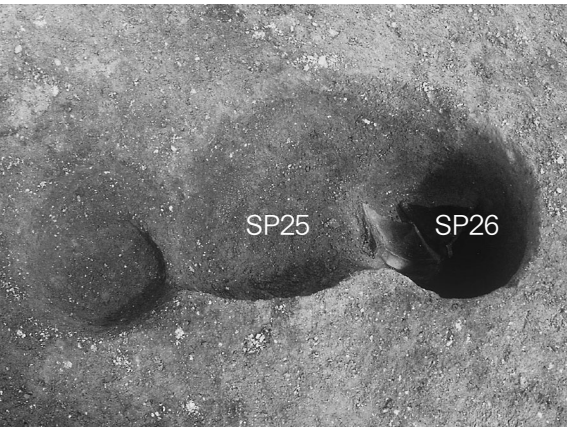
SD3・4 検出状況（東から）



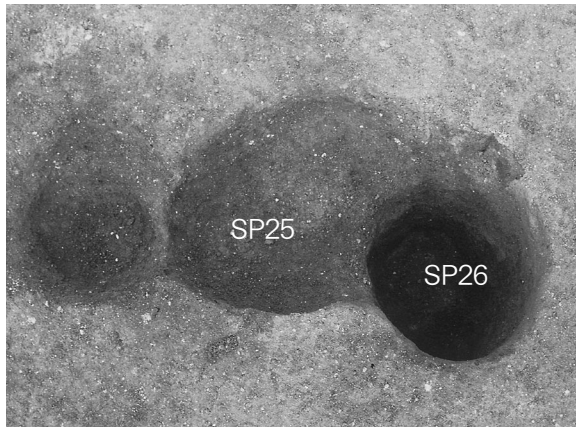
SP4 遺物出土状況（北から）



SP7 遺物出土状況（東から）



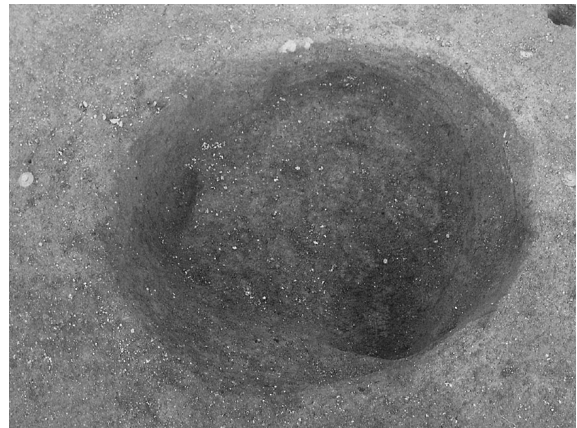
SP25・26 遺物出土状況（南から）



SP25・26 完掘状況（南から）



SP29 遺物出土状況（東から）



SP29 完掘状況（東から）



SP46 遺物出土状況（北から）



SP52 遺物出土状況（南から）

図版 8



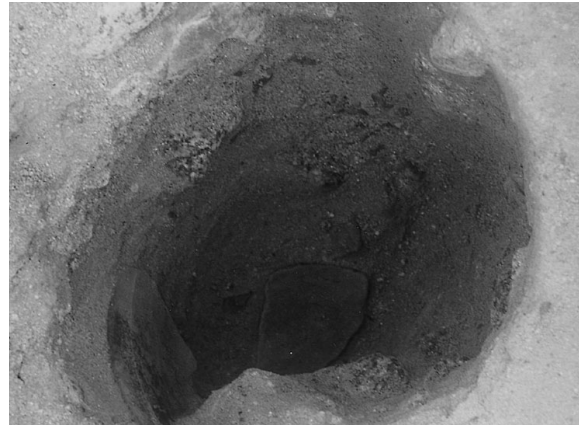
SP54 遺物出土状況（南から）



SP58 遺物出土状況（北から）



SP60 遺物出土状況①（西から）



SP60 遺物出土状況②（西から）



I-2地区縄文遺物包含層 遺物出土状況（東から）



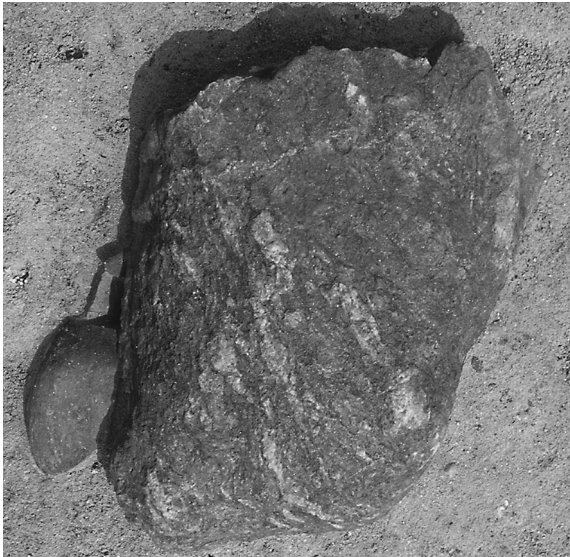
I-2地区縄文遺物包含層 遺物出土状況（東から）



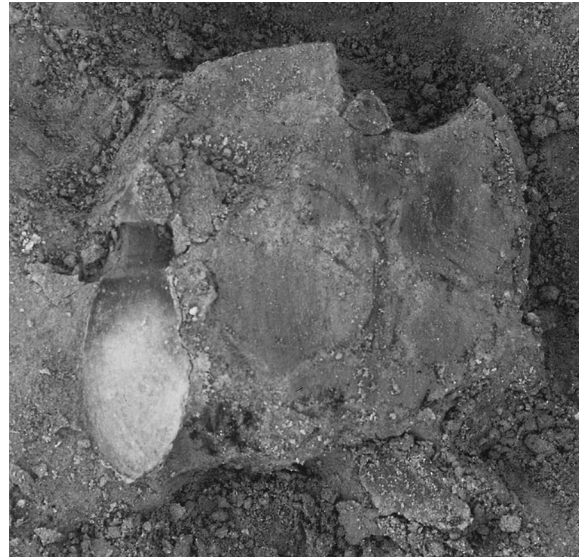
I-2地区縄文遺物包含層 遺物出土状況（東から）



I-2地区 遺物出土状況（南から）



SX1 遺物出土状況①（西から）



SX1 遺物出土状況②（西から）



SX1 遺物出土状況③（西から）



SX2 遺物出土状況①（東から）

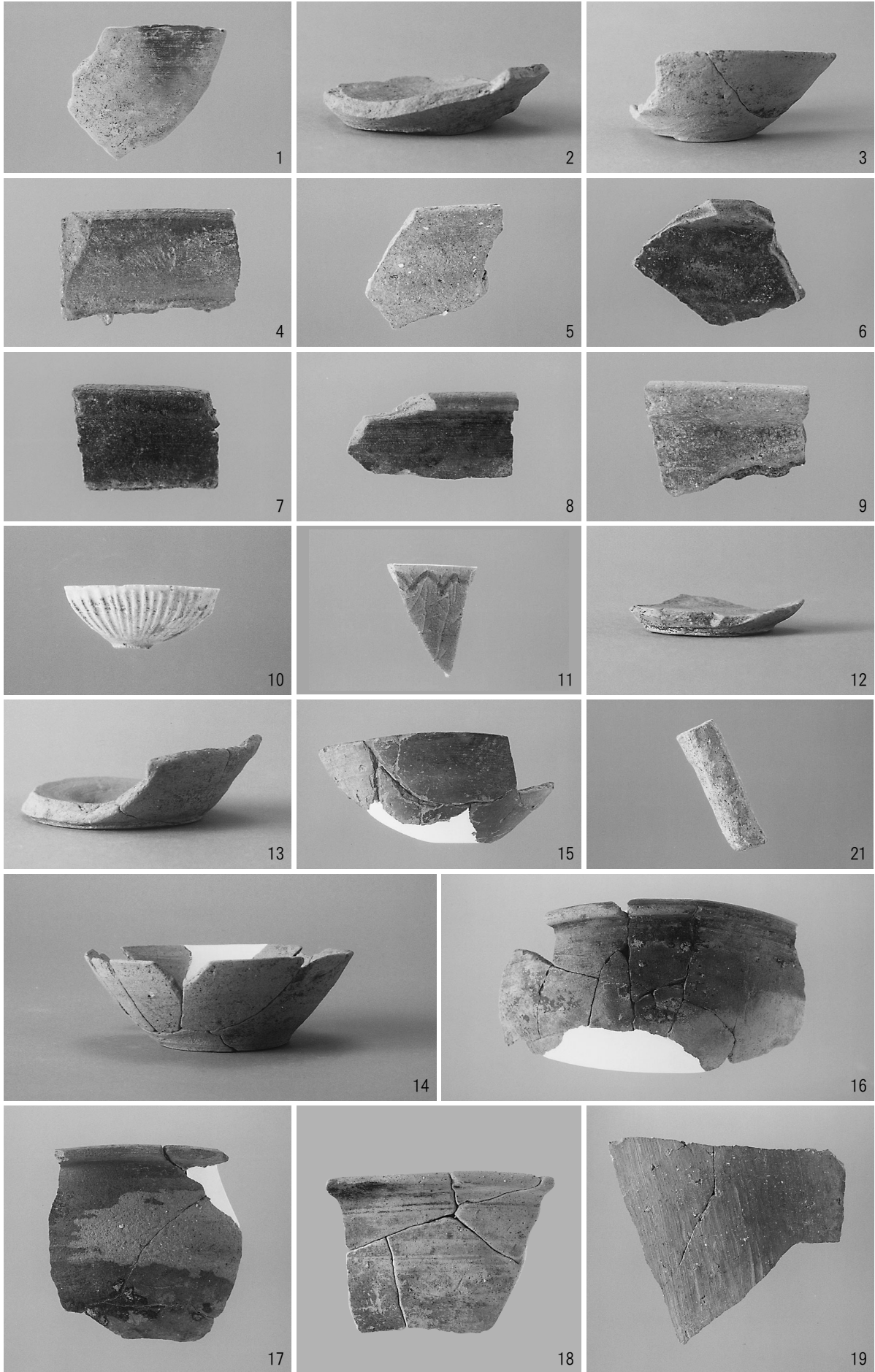


SX2 遺物出土状況②（東から）

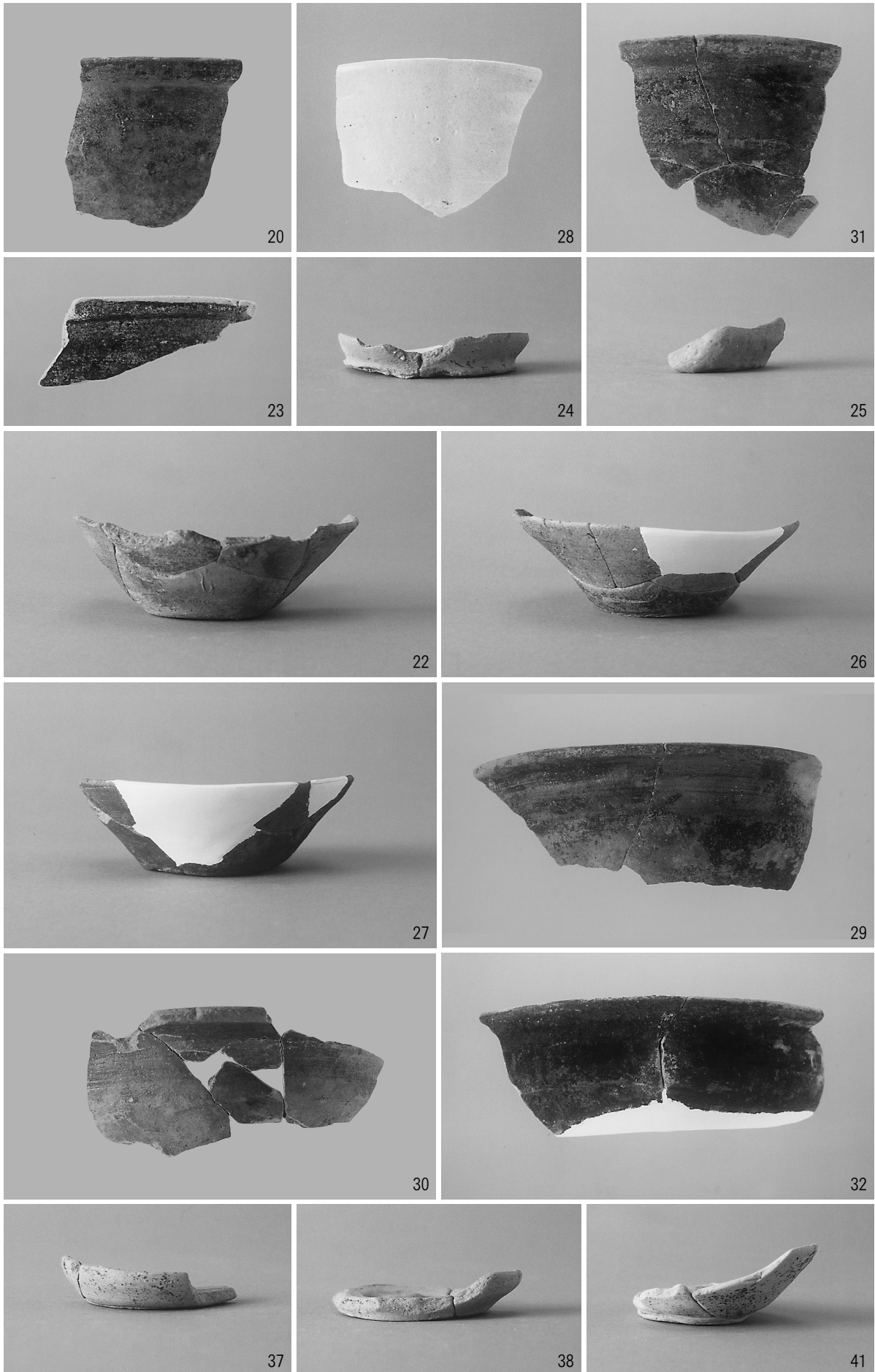


SX2 完掘状況（東から）

図版10

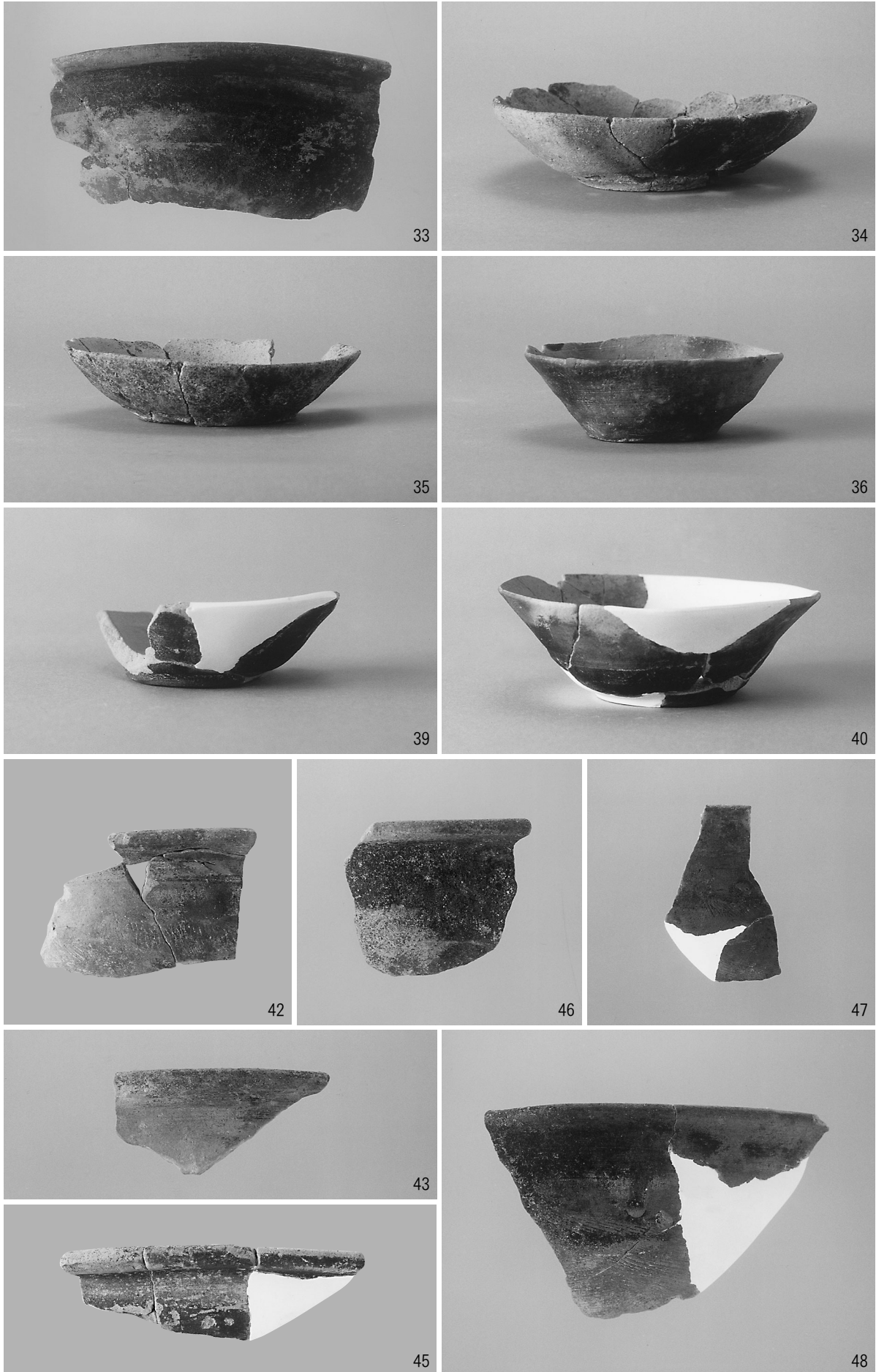


出土土器①

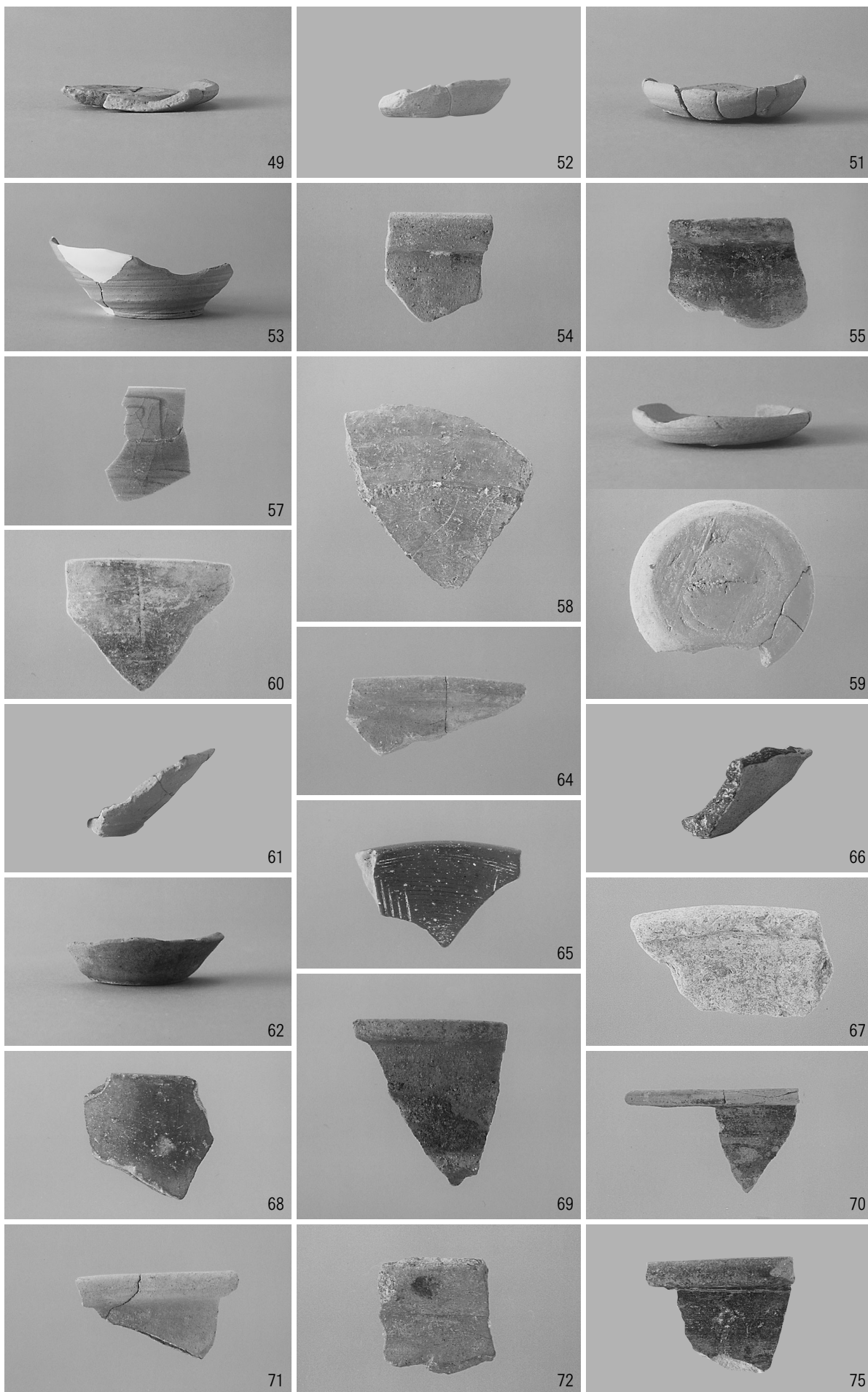


出土土器②

図版12

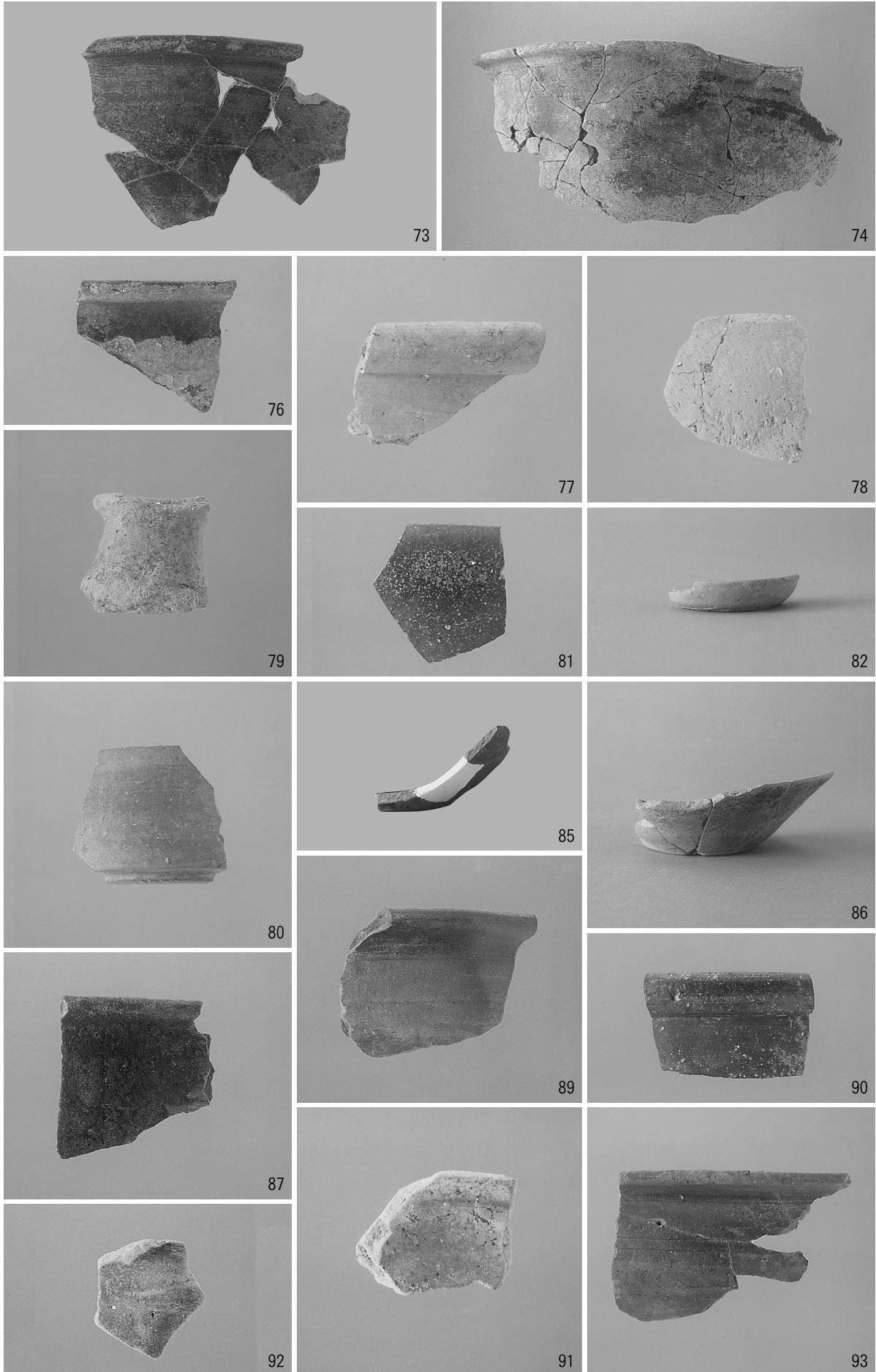


出土土器③



出土土器④

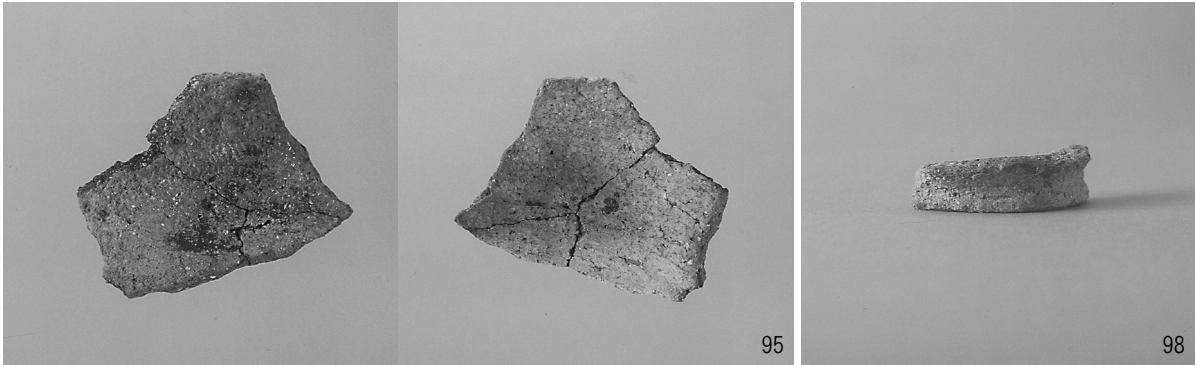
図版14



出土土器⑤

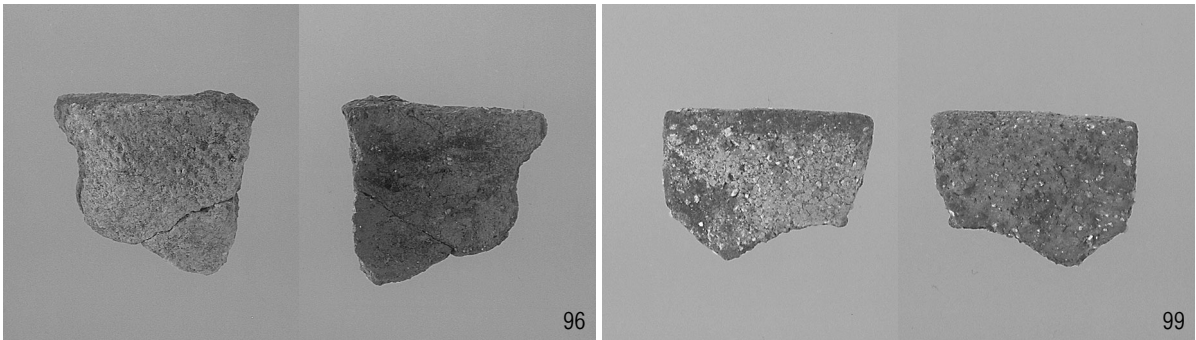


94



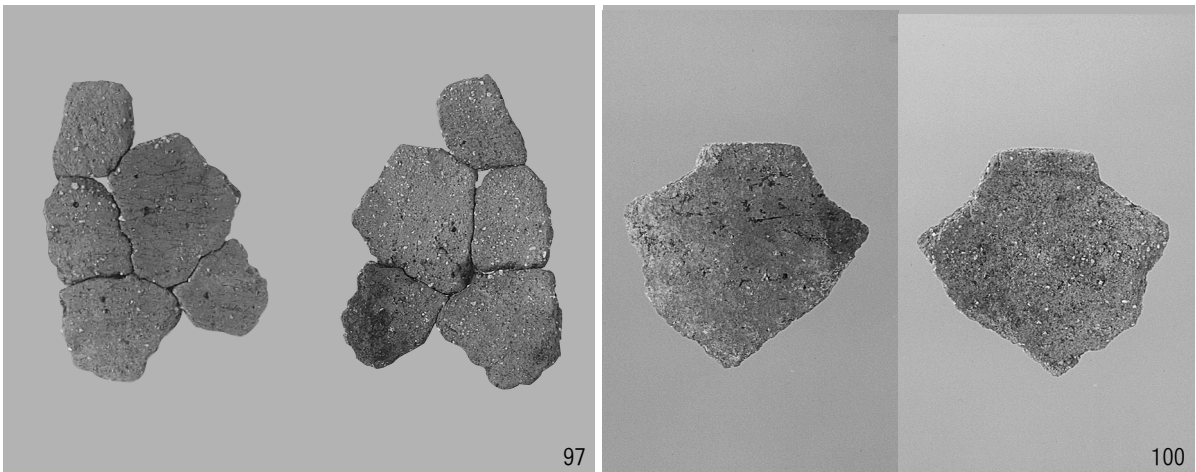
95

98



96

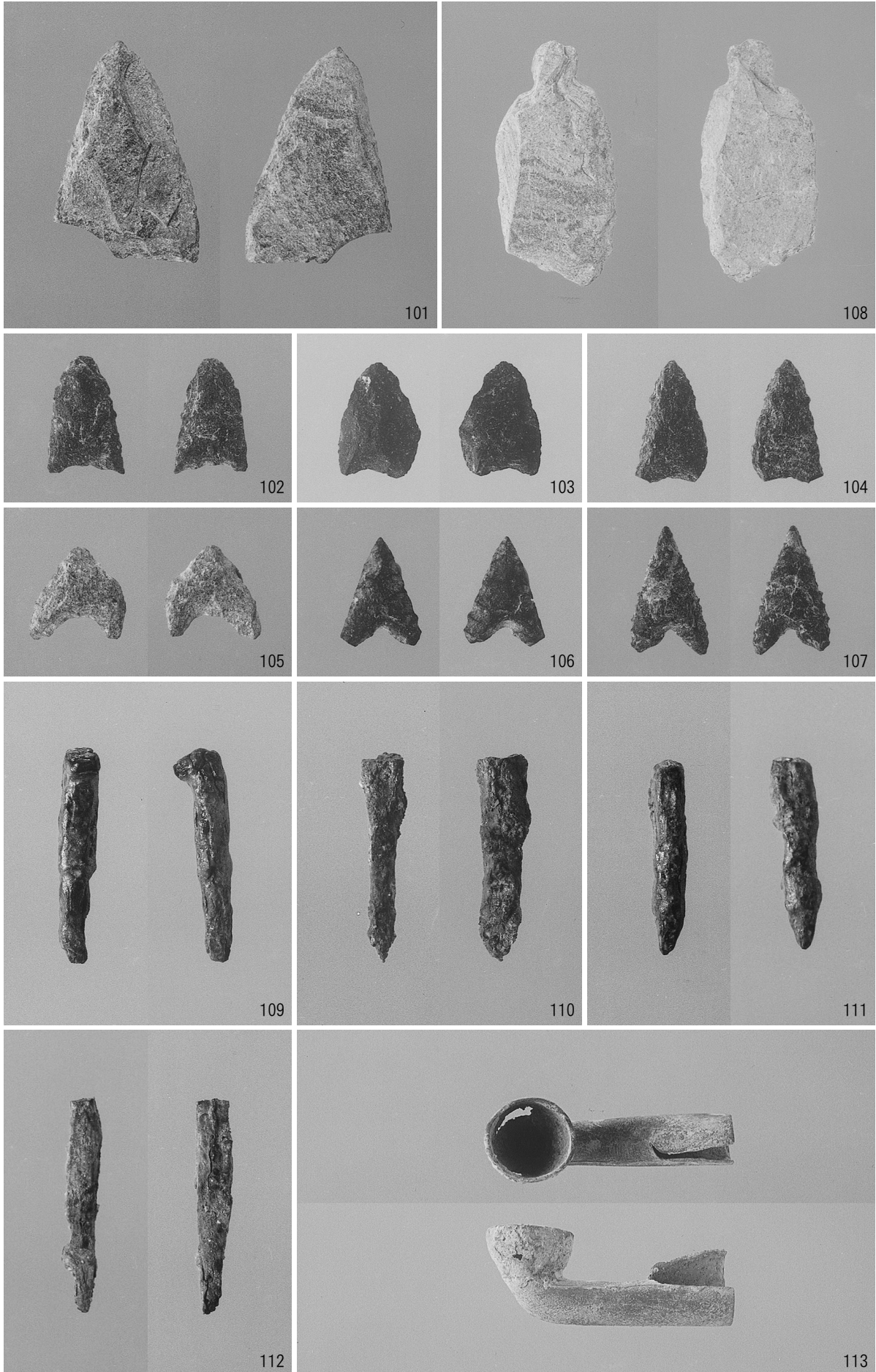
99



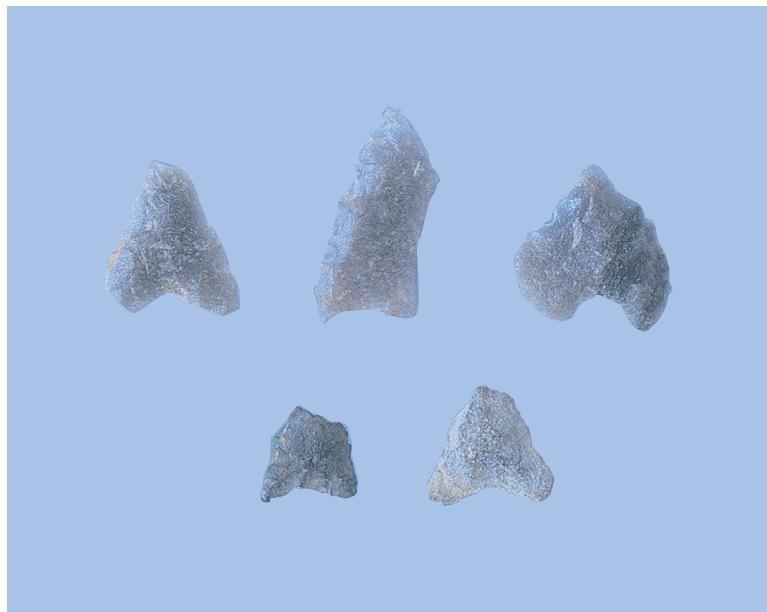
97

100

図版16



木 焼 遺 跡 図 版





調査区遠景（東から）

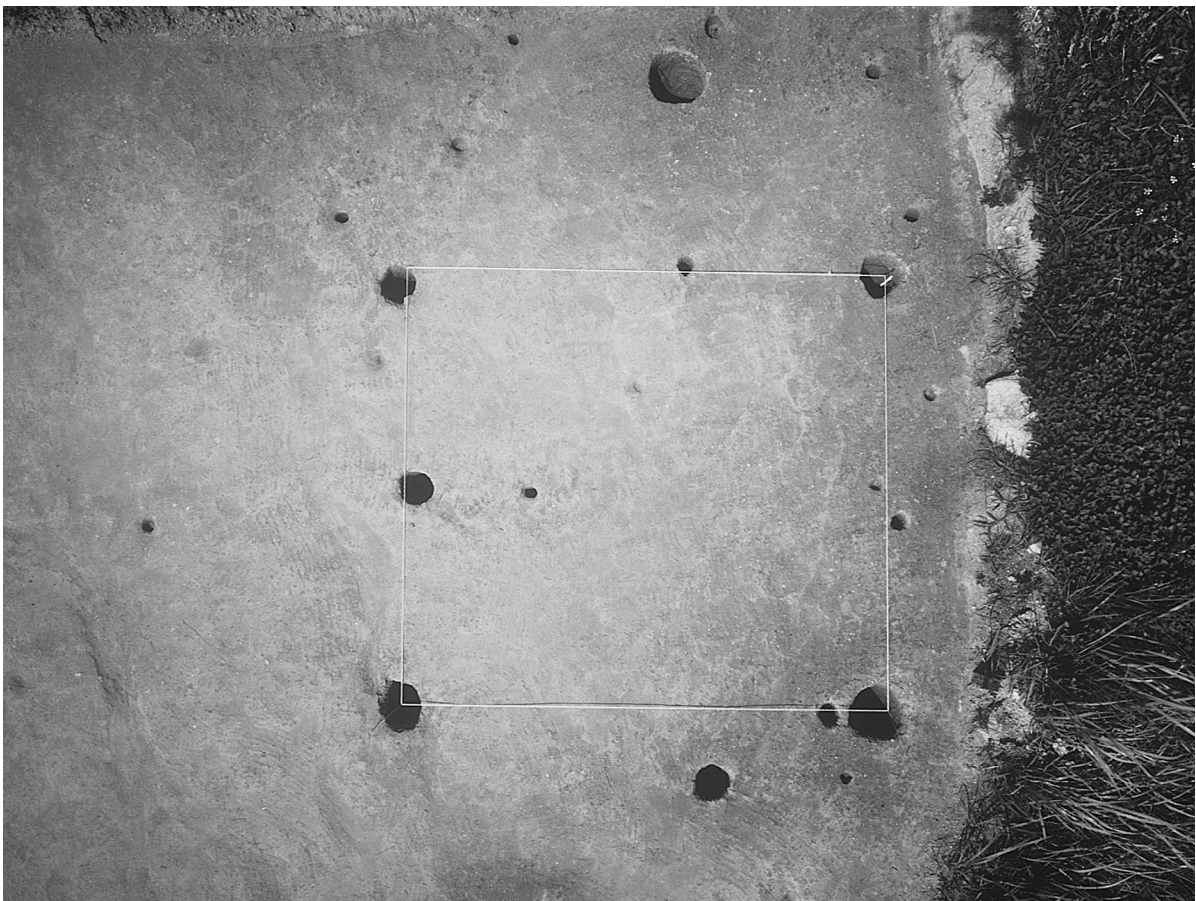
図版18



調査区全景（東から）

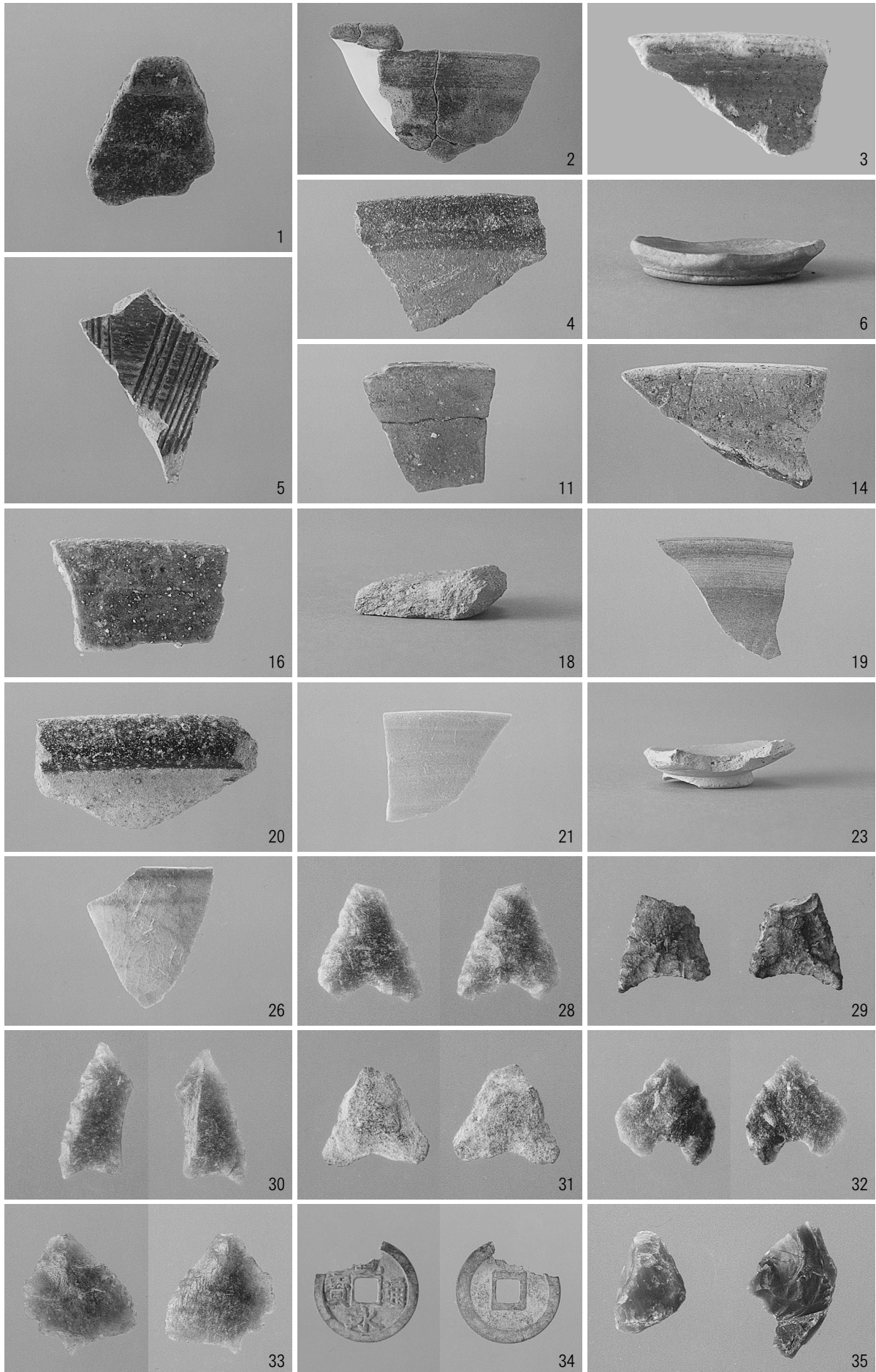


I 地区遺物包含層 完掘状況（東から）



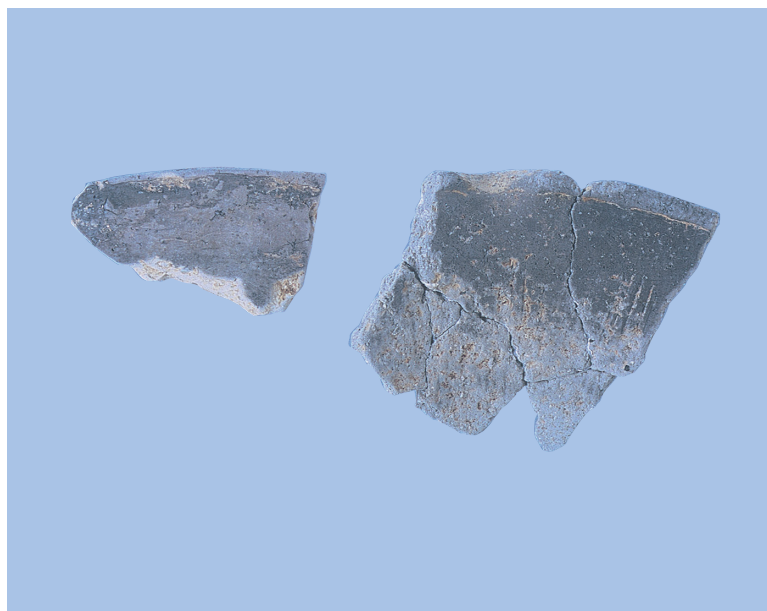
SB1 完掘状況（東から）

図版20



出土土器・石製品・金属製品

松ヶ谷遺跡図版



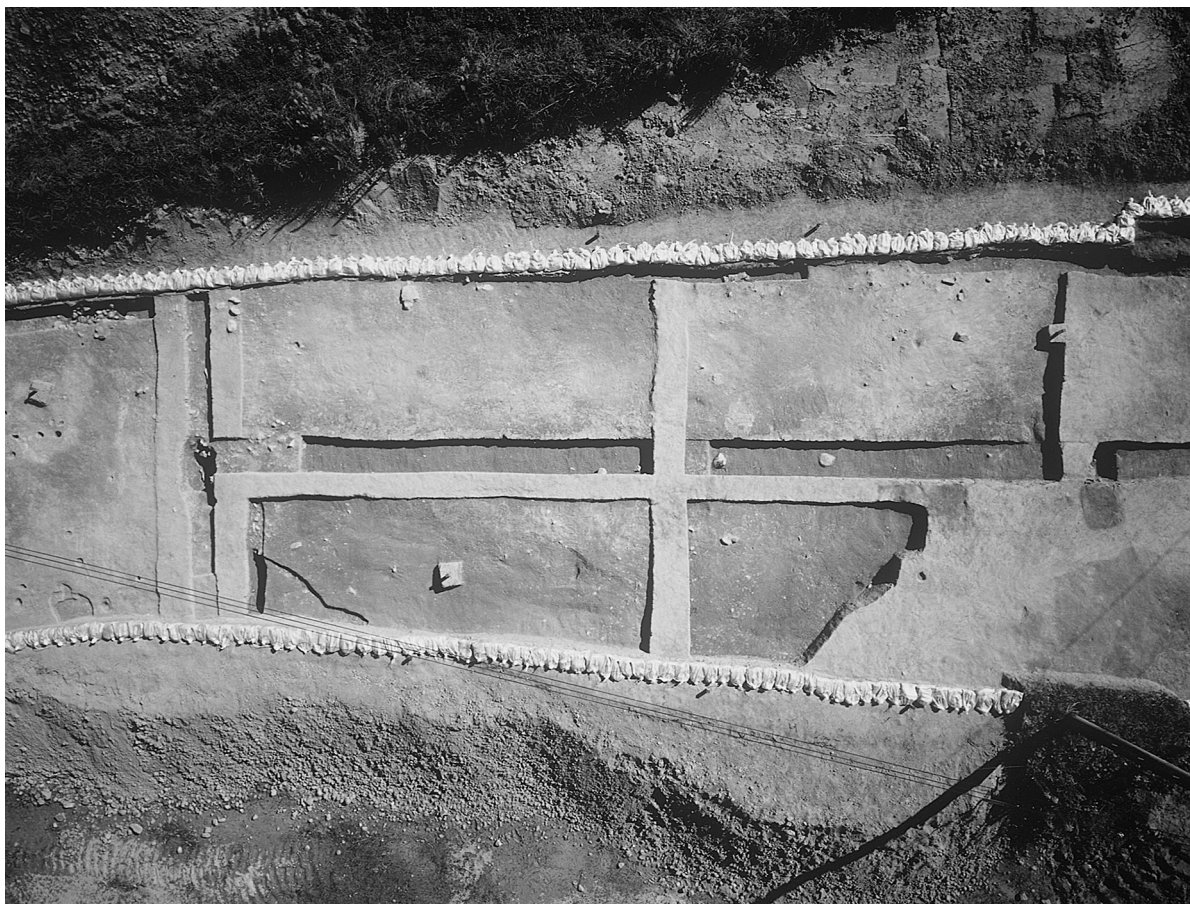


調査区遠景（東から）

図版22



調査区全景（北から）



調査区中央部 完掘状況（北から）



TR4 ① 土層断面（北から）



TR4 ② 土層断面（北から）



TR4 ③ 土層断面（北から）



TR4 ④ 土層断面（北から）

図版24



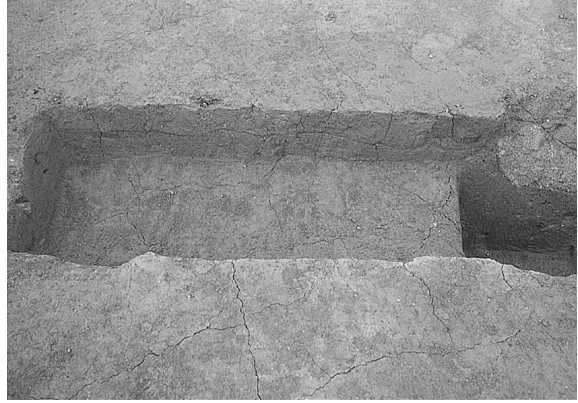
TR1 ① 土層断面 (南から)



TR1 ② 土層断面 (南から)



TR1 ③ 土層断面 (南から)



TR6 ① 土層断面 (南から)



TR6 ② 土層断面 (南から)



TR6 ③ 土層断面 (南から)



TR2 ① 土層断面 (南から)



TR2 ② 土層断面 (南から)



TR2 ③ 土層断面 (南から)



TR2 ④ 土層断面 (南から)



TR2 ⑤ 土層断面 (南から)



TR2 ⑥ 土層断面 (南から)



TR5 ① 土層断面 (西から)



TR5 ② 土層断面 (西から)

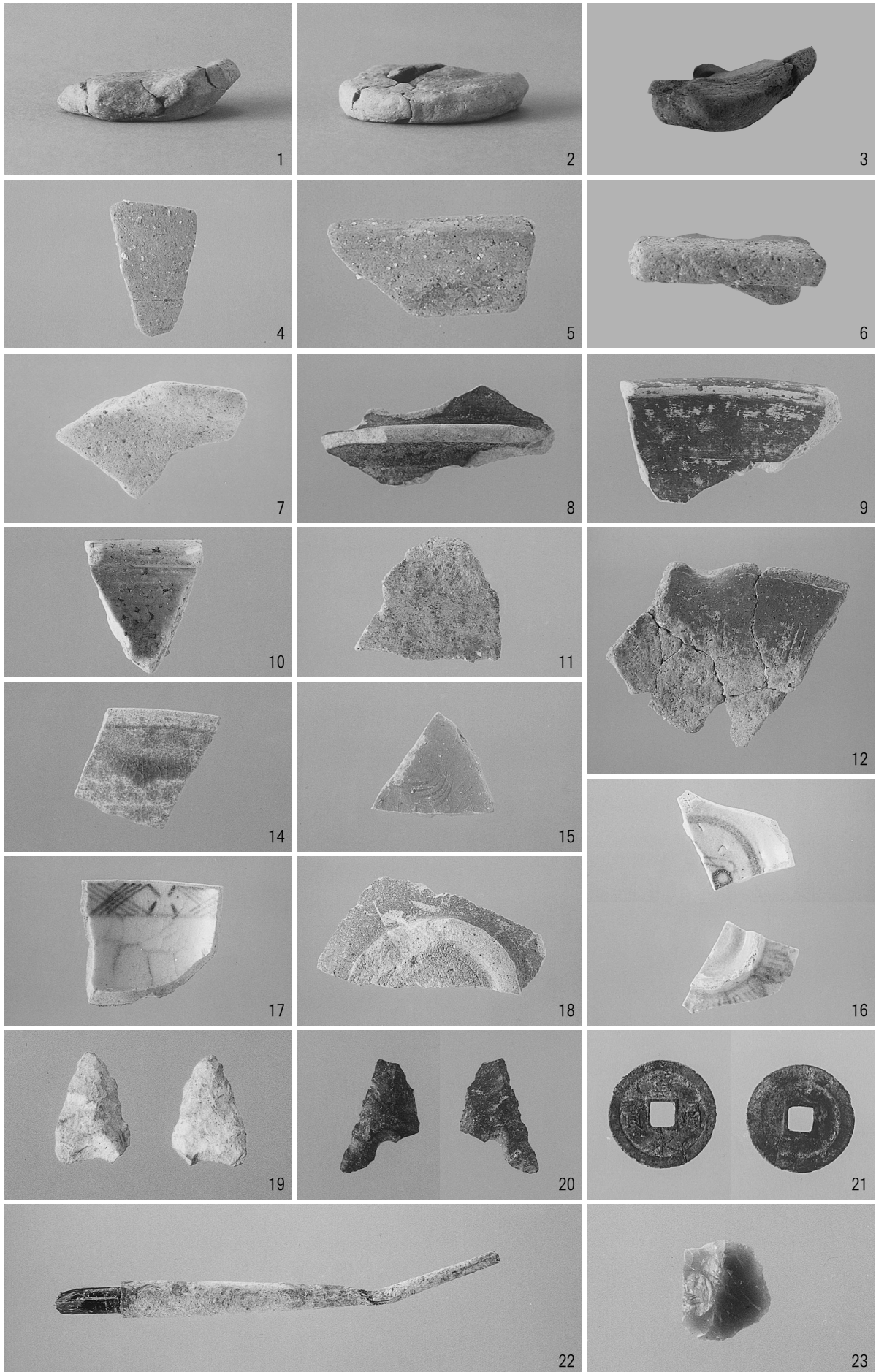


TR5 ③ 土層断面 (西から)



TR5 ④ 土層断面 (西から)

図版26



出土土器・石製品・金属製品

報告書抄録

ふりがな	いりょうばらいせき・こやけいせき・まつがたにいせき
書名	伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第58集
編集著者名	上土井 宏典 吉中 雅信 藤原 彰久 谷口 哲一
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2006年3月20日 (平成18年3月20日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いりょうばらいせき 伊領原遺跡	やないし 柳井市 いかち 伊陸	35212		34°2'21"	132°5'35"	20050509 ∩ 20051014	2,770	ほ場整備
こやけいせき 木焼遺跡				34°2'16"	132°5'27"	20050512 ∩ 20050802	2,160	
まつがたにいせき 松ヶ谷遺跡				34°1'1"	132°4'47"	20050901 ∩ 20051027	670	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊領原遺跡	集落跡	縄文時代 中世	掘立柱建物跡 17棟 土坑 14基 溝状遺構 5条 柱穴 約500個	縄文土器 土師器、瓦質土器 須恵器、陶磁器 石製品、金属製品	中世の掘立柱建物群 を検出
木焼遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 1棟 柱穴 約300個	土師器、瓦質土器 須恵器、陶磁器 石製品、金属製品	
松ヶ谷遺跡	集落跡	中世	柱穴 約15個	土師器、瓦質土器 陶磁器 石製品、金属製品	

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第58集

伊領原遺跡
木焼遺跡
松ヶ谷遺跡

2006年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口市春日町3番22号

印刷 児玉印刷株式会社
〒755-0008 宇部市明神町3丁目4-3